父親のひとこと

高藤建設株式会社

父親のひとこと

はじめに

このたび、髙藤建設株式会社が創立四十周年にあたり、青少年の自我形成に役立つ記念事業をという思いで本書を刊行されました。

髙藤建設の創業者・髙藤國太郎会長は、若いころ、それまで勤めていた工務店を退職、上京して苦学され、昭和七年、釜山で髙藤工務店を創立。戦前は朝鮮で活躍されたものの敗戦で無に帰し、昭和二十一年二月、門司に髙藤建設を設立されたと聞いています。

少年時代に心ならずも進学できなかった髙藤会長は、事業のかたわら常に青少年のすこやかな成長をねがい、これまでも市の児童文庫に寄付するなど心を尽くしてこられました。

ここに、りっぱな青少年の読み物ができたことをお慶びすると同時に、執筆者のみなさまのご協力に感謝いたします。

この本が少しでも多くの青少年に親しまれることをねがいます。

昭和六十一年二月

安川　寛

四島　司

お祝いの言葉

松浦秀明

高藤建設株式会社の創立四十周年に当たり、『父親のひとこと』が発刊されたことをお祝い申します。

高藤会長とは、戦前の釜山時代から半世紀にわたるお付き合いで、ここに立派な教育書ができましたことは本当に嬉しいことです。

私は西条中学（愛媛県）二年の時、父が病気になり、約一週間位で亡くなりました。病気は熱黄疸。今考えるとウイルス病だったと思います。死ぬる数日前に自分で死を感じたのでしょうか、「お前、中学を出て、何とか上の学校に行って、出来れば立派な医者になってくれ」と云ったと覚えております。

残りの中学三年間は西条の開業医の家に、今で云う家庭教師の様な型で先生の御宅に住み込んで三年間を過ごし、卒業して鹿児島七高に入学、九大医学部に進みました。大正九年、卒業と同時に九大医学部第一内科教室に入局。昭和六年に釜山府立病院の院長で赴任し、終戦の年の昭和二十年十一月迄約十五年を過ごしました。

釜山に行ってすぐ高藤会長の御宅が私の家のすぐ近くだったので、御付き合いが始まりまし

た。終戦で引き揚げ、会長は門司で、私は二年おくれて二十二年に国立小倉病院の院長として小倉に来て、又、高藤さんとの御付き合いが始まって今日に至っております。釜山時代が十五年、北九州に来て三十九年、釜山と北九州合わせて五十有余年になります。

最後に、私がいつも口にしております格言を二つだけ記します。

云ふは易く、行ふは難し

知らざるを知らずと云へ、これ知るなり

〈国立小倉病院名誉院長〉

目　次

はじめに……1
お祝いの言葉……2
人さまに借りを残すな……金子太郎……12
任せたらいい……間茂樹……14
努力そして諦め……青山政雄……16
先人の猿真似をするな……新井正……18
「おやじ」は「おやじ」……荒井範雄……20
偉くなろうと思うな……新木文雄……22
大志を抱け……有吉龍健……24
人並みを……安部高子……26
心にゆとりを持て……阿部正男……28
無　言……安西正樹……30
人生は運命との対峙……石蔵啓三郎……32
一生懸命生きる……和泉太郎……34
油断なき人に不安なし……磯部重雄……36

進んでやれば仕事は楽しいもの……市川慶三……38
早起きは三文の得……井上章……40
お母さんが心配するヨ……今田章……42
接する人に愛情を持って……今永一……44
花は桜木、人は武士……入江伸明……46
人間健康が第一……岩木健次……48
無言の心……上村勝一……50
我家の神話……碓井三子男……52
短気は損気……内川昭司……54
脚下照顧……江頭匡一……56
身の程を知れ……合馬又彦……58
自然の恵みと二人の父の教訓……岡野正実……60
売物には紅をさせ……岡本包夫……62
父の後姿……大石正巳……64
さあ、自然と対決だ……大石潤……66
温容、不言実行……大神文和……68

態度で教えられた庭訓……大木二郎……70
新しき朝日は昇る……大迫忍……72
胸を張れる親に……大西利昌……74
相手の立場になって考える……奥田洋……76
自助努力・筋を通す……小野精次郎……78
若い時の苦労は買ってでもせよ……小原一美……80
企業で、地域を開発せよ……笠井三郎……82
ただ酒は呑むな……加治屋知暁……84
大学は出ておけよ……川崎清澄……86
対岸へは迂回航路も……川崎文治……88
酒は飲んでも呑まれるな……川崎安太……90
尻をふけ！……上林幸生……92
細い橋……北田光男……94
空気のような父……君原健二……96
へこたれたらだめですよ……木村照彦……98
父の一喝のおかげ……工藤憲男……100

人のために働く者は食いはぐれがない……栗岡博良……102
誠実・誠意・真実……小林滉……104
戸上山不動、白雲去来……是則宗興……106
無理するな……近藤貢……108
ふんどしゃかかでも義理欠いちゃならぬ……榊原重男……110
働かざるもの食うべからず……坂本薫……112
楽しみは耐えることから……佐藤好助……114
満足は腐敗なり……四島司……116
賭け事に手を出すな……篠原治二……118
流れに逆らうな……菅田義秋……120
商売人になるなら他人のメシを喰え……杉浦一彦……122
恩を忘れるな……曽田傳重……124
余裕をもって仕事をせよ……高田賢一郎……126
正道を行く……髙藤昌和……128
約束を守れ……竹村重利……130
商人の道……田尻栄宏……132

人のお世話をする人に……田中辰治……134
みんなのためになるごとがんばらんば……田中丸善郎……136
好況時に心せよ……辻長英……138
石にかじりついて……出口次年……140
無言の教え……寺本清……142
無言の「宏如海」……友貞睦夫……144
らしくあれ……夏川和造……146
嘘をつくな……鍋島良太郎……148
計画は細心、行動は大胆……西井哲朗……150
お前は天才ではない……西野憲次……152
世の中は毎日が競争だ……野畑彦蔵……154
だまされても人をだますな……野村勇治……156
ファインプレーはいらない……芳賀晟寿……158
利己主義はいかん、人さまのお蔭を忘れるな……長谷川裕一……160
自分の立場をはっきり主張せよ……花田宏……162
おやじと共に……原田篤……164

習字を勉強しよう……日向安次……166
父の肌……広川正三……168
大胆細心……深町龍太郎……170
成功するだけの努力を……福嶋一雄……172
人に恩をうるな……福山庸治……174
エライ人間になるな、リッパな人間になれ……藤井敏哉……176
父がつけてくれた名前……藤嶋吉郎……178
男なら泣き事言うな……藤本新二……180
道ばたの石ころ……二田義松……182
男だからな……堀川伝夫……184
天知る、地知る、人知る、我知る……本田太郎……186
鉄の意志と火の精神力……真玉仁……188
一人では育たない……松井薫……190
頭の良い人より信頼される人に……松村周典……192
体をきたえろ、病気は新芽の内に徹底してつみとれ……松本攻……194
努力、思いやり、誠……三島正一……196

「一言」の無かった父……水野　勲……198
気張れや……御手洗　博……200
みんな阿弥陀様の子なき……皆川　節夫……202
田舎の人……柳田　千殼……204
指輪が語る父の言葉……山内　大介……206
何事も一所懸命にやれ……山田　宣弘……208
商いするより考えせよ……百合野　保文……210
健康管理は自分でやれ……吉川　八郎……212
感謝報恩……吉田　和彦……214
己の分を知れ……吉田　敬一……216
無言で教えた家族の心……吉村　喜好……218
人間、信用が一番ばい……吉村　慶元……220
己こそ己の寄る辺……依田　久……222
心を開く……渡部　明……224
健康こそ人生の美である……和智　午郎……226
編集あとがき……髙藤　國太郎……228

この文は、明治、大正、昭和生まれの百八人のかたがたが、それぞれの人生でいまなお心に残っている父親や恩師の一言を書いていただいたものです。

本文は、執筆者の文章を尊重し、戦前の送り仮名や制限外の漢字を原文のまま掲載しました。

人さまに借りを残すな

金子太郎

おやじが生れたのは明治十五年で、日露戦争に行ったというから、文字通りの明治の人間であった。明治の人間は、禁欲的な儒教倫理を身につけていながら、文明開化に憧れて、自由闊達な空気を好むところがある。

だから太平洋戦争に突入し、物資の不足から切符制や配給制度などが始まると、父は毎日のように統制経済を批判し、役人の悪口を言った。後日、私が役人になった時、子供の頃に聞かされた父の批判や悪口が、どんなに役に立ったか分らない。

その父はいわゆる世話好きで、知人や郷里の越後の人の面倒をよく見ていたが、口癖は「人さまに〝借り〟を残すな」であった。〝借り〟とは、金銭上のことだけでなく、世話になるだけとか、迷惑をかけるばかりというのを意味していた。それは何時しか、私の生活信条にもなって、知人、友人の一人一人について、「〝借り〟が多くはないか」と、思いをめぐらすのが習慣となっている。

金子　太郎　大正14年8月30日生　本籍　東京都
▽昭和24年東大法学部卒、同年大蔵省入省、証券局総務課長を経て▽48年東京税関長、49年大臣官房審議官、50年環境庁長官官房長、53年同自然保護局長、54年企画調整局長、55年環境庁事務次官▽56年丸三証券㈱取締役社長就任

任せたらいい

間　茂樹

父は明治二十五年二月、甘木市に生れ、昭和四十九年四月、福岡市で八十三歳の生涯を終えた。父は典型的な明治人であった。神佛を尊び、祖先の供養を怠る事はなかった。酒は斗酒なお辞せずで、六十代までは親しい友人が来ると夜を徹して語り飲んだ。

少年時代は家が貧乏だった為、小学四年が終ると徒弟奉公に行った。二十四歳の時、母と機械一台、職人一名で印刷業を独立開業した。独立までの、そして独立後の父母の苦闘、大車輪の働きについては今では私共の業界の語り草、伝説となっているが、私は母からは断片的に聞かされるだけで、父はあまり語るのを好まなかった。ただ四十三年二月、父が社長を私に譲り、会長となった時、私は若い人達のために父の伝記を中心とした社史を刊行した。それを読んだ父が私には聞きとれない程の低い声で、「俺の苦労はこんなものではなかったなあ」とそっと呟いたのが何時までも忘れられない想い出の一つとなった。

私が社長になってからも、父は毎日定刻前に会社に着くが、一切を私に任せ、社務については全く口を出さなかった。当時母は私の経営のやり方に不安を感じ、父に愚痴った時、父は「あれはあれの考えで一生懸命やっているのだから、それで失敗してもいいじゃないか、どうか

なった時は皆で一緒に長屋住まいでもしよう」と、笑ってとり合わなかったと、後で母から聞かされた時、思わずこみ上げてくる嬉しさと有難さの念を抑える事はできなかった。

晩年の父は足が不自由となり、歩行が困難となったが、それでも業界の会合に出席するのを無上の楽しみとしていた。業界の方々からも愛され、いたわって戴いた。毎年五月には父が相談役をしている印刷組合の定期総会が東京で開催される。父が出席すると多くの方にご迷惑をおかけするので、ある時その通知状をわざと父にみせなかった。この時の父の落ちこみは私の想像以上だった。組合はもう俺を必要としなくなったかと寂しく笑った。私は私の小細工、似非親孝行を心から恥じた。

間　茂樹　大正13年2月24日生　福岡市出身
▽昭和22年9月慶應義塾大学経済学部卒業、秀巧社印刷株式会社入社▽23年3月同社専務取締役就任
▽43年3月同社代表取締役社長就任

努力そして諦め

青山政雄

私は仁川（現在の韓国）で農場を営んでいた父の二男として明治三十六年に生れました。確かな記憶ではありませんが、当時一五〇名位の作業員が働いていた様に思います。兄を入れて、三男四女の子供の教育は、父と母に取って大変に大切なものの様でした。田舎出の百姓夫婦が考えた事は、子供達にだけは教育をさせてやる事だったと、父に聞かされた事がありました。

長崎高商（唯今の長崎大学）を卒業して直ぐ司法試験に合格し、検事となっていた兄の後を追って、私が司法、行政の試験に合格した時の父の言葉を今でも昨日の事の様に覚えています。

「人の世は、運が良かったと云う事もあるだろう。が努力に勝るものは無い。しかし努力しても実らぬ努力もある筈だ。その時は男らしく諦めて次の努力を始める為のスタートラインに立つ事だ」と。

昭和二十年一月、日本の勝利を最後迄信じて疑わなかっは父は、敗戦の惨めさを見る事も無く亡くなりましたが、其の事は、父にとってせめてもの事だったと、子供の立場から心の安らぎを思った事でした。しかし、今の平和な、豊かな日本を、見せてやりたかったとも思ったりしています。

未だ、私の耳許に父の声が聞えて来る様な気がしますのに、父の年齢をはるかに越えてしまった私ですが、小さな努力を今日も又、積み重ねてゆく事が出来るならと、そう心に云い聞かせている毎日です。

青山　政雄　明治36年5月10日生　本籍　広島県
▽大正15年3月京城高等商業卒業▽大正15年4月朝鮮総督府財務局
▽昭和6年高等文官試験司法科、行政科合格
▽昭和8年弁護士登録。今日に至る

先人の猿真似をするな

新井　正

父が逝ってからすでに二十五年余りの月日が流れている。父の一生は電力技術者だけで、父から電力技術者をとると、何も残らないような気がしてならない。

大正から昭和にかけて、変電・送電の技師であった父は、丁度私が大学の電気工学科に入学した頃、平素無口で、長い話を好まなかったのだが、これから電気屋になる息子に、半ば独り言のように喋った話が、四十年間私の頭に焼きついてはなれない。

「学校を出て間もない頃、送電線の建設主任技師となった。建設も終り、緊張して試送電のスイッチを入れたとき、工夫が鉄塔に残っていて感電死させてしまった。いつまでもいやな思いが尾を引いた。」といった話から始まり、各電機メーカーの社風、仕事振りを知った経緯などで、最後に「俺の設計をした変電所の一つの話だが、建設後何年も無事故で運用されていたのだが、ふと、その変電所の設計に欠陥があることに気がついた。それから十数年間は、早く建て替えられるとよいがと思っていた。

ところが、その地方が台風の来襲をうけて、その変電所が流れた。これで俺の汚点が消えたと、内心喜んでいた。その後新設変電所がそこに作られた。うれしかった。たまたまその変電

所を見学する機会があった。そこで驚いたことには、新変電所は、自分の間違いをそのまま踏襲しているではないか。これにはガッカリするやら、今の若い者の馬鹿さ加減にあきれはてるやらで、これで又心配が残ってしまった。」

こんな話であった。

その後、私も電子関係のメーカーに就職し、開発技術者として今日までやってきたのであるが昔の親父の一言「先人の猿真似をするな」は常に心のどこかに残っていて、先進国においつけ、おいこせの業界で、性急に結果を出したがる我が身をいましめてくれた。

今の私を父が見たら、「まだ猿真似が多いぞ」と叱られそうな気がするこの頃である。

新井　正　大正7年11月14日生　本籍　神奈川県
▽昭和17年東京大学工学部電気工学科卒、東京芝浦電気株式会社へ入社。主として電子計算機の設計開発に従事、二十五年間電子計算機と共にすごす▽昭和53年アジアエレクトロニクス株式会社専務取締役を経て、現在、九州アジアエレクトロニクス株式会社社長

「おやじ」は「おやじ」

荒井範雄

私の父は八十二歳。信州千曲川のほとりでおふくろと共々元気に暮している。私に生活援助も言って来ないし、どうやって飯を食っているのか、誠に不思議である。㊎なのだろうか。

私は一人息子。小学校を五回転校、中学一年（旧制）で下宿の身となる。おやじが転勤だったから。それ以来四十年、ずっと親元を離れ通しである。

二年に一度位、信州を訪ねる。あの歌は日本のふるさとの為にある。ふるさとを訪ねた日本人の為にある。

小学唱歌　「兎追いしあの山……。」

帰郷した時、これしかないと思う。おやじとの対話は、少々の昔話。仕事の話はない。金の話もない、女の話もない。突然、「時は貨弊だから」、「ビートたけしがなァー」と言い出し、びっくりする。現世にしがみつこうとする勉強振りを感じる。よく本を読んでいる。ゲートボールの心境は無いようだ。

私は社長業三十二年。未だに「おやじ」は抜けない。偉大なる怪物サンだからだ。

厳しいおやじだった。

幼少の頃より「食べ物の文句を言うのは下の下の人間」――お陰で好き嫌いなし、弁当箱のフタの米粒から食べる人間で現在も通している。

小学六年の時、「聖人になってはならない。但し君子の一番下の軒下ぐらいにはぶら下っておけ」。むづかしい言葉だったからよく覚えている。それから間もなく下宿の身となり、他人の飯を食うようになってから「ああ、あのことか、このことか」と思うようになった。

私の愚息は十九歳。十六歳で東京の高校へ行った。おやじの背中を見て育っていると、しみじみ思った。誰も書かないシナリオが「おやじ」と「私」の間にあったように、今「私」と「息子」の間に進んでいるような気がする。それは〝財産〟である。

「おやじ」は、いつも「おやじ」である。

荒井　範雄　昭和4年4月14日生　本籍　長野県

▽昭和28年明治大学法学部卒。

▽同年㈱田中製作所小倉工場入社

▽43年4月現社名株式会社セントラルユニ代表取締役就任、現在に至る

偉くなろうと思うな

新木文雄

己に厳しく、他人に寛容な人であった父は、あまり教訓めいたことを子供に言うことは少なかった。親の姿を見て、子供は育って来たのかもしれない。

浄土真宗に熱心な石川県に生れ育った父は、幼い頃からお寺へお経を習いに行かされたそうで、私共の小さい頃の父の想い出は、毎朝仏壇に向かってお経を上げるその姿であった。私共もその後に坐らされ、お経が終ると仏壇に手を合わせ、仏壇に置いてある箸箱をいただいて、始めて朝食となるのであった。月に何日か精進の日があり、父母の祖先の命日であったその日の夕食は、殺生された食物は口にすることは出来なかった。

こんな環境で育ちながら、私には宗教心は全くない。ただ神社仏閣に詣るのは何となく好きで、出張の時など時間が余ると、その土地での著名なお寺やお宮へ連れて行って貰うことが多い。晴れ晴れとした気持になれるようである。

また人との付合いでは、常に相手の人への思いやりを忘れないこととしているが、これは他人に寛容であった父の姿が、私に与えていったものかもしれない。

学校のこと、進学のことについては、全く子供まかせであり、意見や希望を言ったことは一

度もなかった。ただ、銀行に就職が決まった時、バンカーであった父から、「偉い人になろうと思うな。人から信用される人になれ」と言われたのが、父からの唯一の訓戒めいた言葉として今でも心に刻み込まれている。

信用は銀行員の生命である。「人から信用される人になれ」―バンカーであった父が、銀行員となった私に、銀行員の本質を諭してくれた言葉として、私の銀行員の長い生活を通じて、今でも大切にしている父の言葉である。

「偉い人になろうと思うな」と言った父の言葉は、若い頃あまり気に止めていなかったが、晩年になり、自分の社会的地位が次第に上って来てから、実感として心に響くようになった。「偉くなろうと思うな」。偉くなったと思うな。どんなに地位が上っても、偉くなったと思ってはいけない。私は父のこの言葉を、これからも大切に守り続けて行きたいと思っている。

新木　文雄　大正11年4月6日生　出身地　石川県
▽昭和22年9月東京帝国大学経済学部卒▽同年10月日本銀行入行。那覇支店長、秘書役、文書局長、日本輸出入銀行理事を経て▽55年6月福岡銀行専務取締役、58年6月頭取

大志を抱け

有吉龍健

私の父は大正の末期、旧制鹿児島師範を出て小学校の教師となり、昭和六年に現在の北朝鮮の平安南道に家族（母と姉と私）を伴って渡った後、終戦の日迄、平安南道各地の小学校で奉職していた。

私は小学校五年の二学期を終った時、当時東京に住んでいた叔父（父の弟）の処へ預けられることになり、家族と別れて上京した為に、父親との想い出は主に小学校時代のそれが多い。

父と一緒の学校にあっては、謹厳で怖い父だったが、家にいる時はくつろいで小言めいたことは一切言わなかった。弓と釣りが好きで休日には必ず弓矢を携えて近所の矢場に行くか、釣竿を担いで魚釣りに出かけた。或る時友達と弓矢をつくって遊ぼうという事になり、弓を作った迄はいゝが、矢は父の矢を使ってやれということにして、床の間の矢立から矢羽の美しい矢を全部持出し、先端を二十糎程切り落として鉛筆のサックをはめて子供用の矢に作り直してしまった。一日中その弓矢で遊び回って夕方帰宅した時、父は私の持っている矢に目をやって一瞬「あっ」と言って驚いた様であったが、何も言わずに口をつぐんでしまった。そしてそれ切り再び弓を手にすることは無かった。

晩年、私がその事を父に問い訊ねたところ、「あの時はあまりのショックで口がきけなかったまでさ」と笑っていた。嘘をつくとか、卑怯な真似をするかしなければ、少々の乱暴やいたずらには寛容で、むしろ年中あちこち傷だらけの息子の元気のよさに満足している風があった。

或る時、「軍神廣瀬中佐」という伝記物を読んで感激して父に何か色々と子供らしい感想を話していた折、父に生まれてはじめて大声で叱られた。

「軍人になるつもりなら大将になろうと思え。中佐や大佐でも御国の為になるならいゝなどと思うのは子供らしくない」ということだった。当時はその見幕の烈しさに仰天した私だったが、後年振り返ってみると、かのクラーク博士の「少年よ大志を抱け」という有名な教訓そのものであった。小学校四年の子供にはその真の意味が理解出来なかった丈に、其の後何時迄もかえって鮮明に脳裡に刻まれることとなった。

有吉　龍健　昭和3年12月3日生　本籍　鹿児島県
▽昭和28年京都大学法学部卒▽日産自動車㈱財務部長、和歌山日産自動車社長を経て▽昭和60年3月より福岡日産自動車㈱社長

人並みを

安部髙子

「髙子!!これは一体どういう事だ!?幼稚園の子でも出来る事をわざわざお前にさせているのではない!」

「はい」

「はいではない」

「済みません」

「済みません?馬鹿者!人に簡単に頭を下げる様な事を何故始めからするのだ!!」血相を変えて人前で激怒する父に、私は悔し涙をぬぐう事すらできずに唇をかみ締めていた。父のあだ名はB29。従って叱られた方も何が何だかわからずに、又いつ叱られるのか見当もつかない。家族の者にとっては恐い父であったと思う。

短大卒業後私は、就職せずに花嫁修業のかたわらいやいやながら家業を手伝った。

父母にとって私は他の子供よりも手のかからない自慢の親孝行娘であった。そんなある日、またもやB29の奇襲攻撃である。仕事場で戦争のような忙しさが一段落した時間帯の事であった。ミシンを出して洋裁学校での宿題をやり始めた私を見た父は、「髙子お前はいつまでそんな

事をするつもりだ?自分で縫った洋服を自分が着る人生より如何にすれば他人に縫わせた物を着れる人生が送れるか。お父さんの子だったらそれ位の事を考えろ!」

私はこのB29の爆弾投下を信じる事が出来なかった。一体何が悪いと言うのだろうか!?世間の親達はやれお茶だ、お花だと花嫁修業に励む娘達の成長に目を細めるのに。しかし、何しろ相手はB29である。反抗することもできず、やり場のない自分の当時を思い出すのであるが、私にとって事件と呼べるべきこの二つの父の言葉が後々迄亡父の思い出として鮮明に蘇える。

人並である事、加えて女である事の甘えを絶対に許さなかった父。母もまた然りである。「人様に頭を下げるのではなくお金に頭を下げると思えば、腹も立たないでしょ」と、商人の原点とも云うべき理念をいとも簡単に飾らずに私に教えてくれた。

安部　髙子　昭和22年3月15日生　本籍　福岡県
▽昭和42年短大卒業▽昭和55年2月北九州バンケットサービス代表▽昭和60年4月嵯峨開店

心にゆとりを持て

阿部正男

私は今年で満七十四歳を迎えますが、この齢に至るまで一貫して想起する父の一言は、「心にゆとりもて」という言葉でした。

七つある「茶のこころ」の一訓に「外出には傘を持て」という教えがあるそうです。その真意は傘を用意するゆとりある気持であれば、常に心にゆとりがあるではないか、という茶道のゆかしさです。

父は学者でしたが、茶人ではありませんでした。何分にも特別のとき以外食事を共にすることもなく書斎人でしたから、子供達には寧ろ無関心でしたが、何か優しい弱さがあり、それが好きでした。

学終え社会に出るに当っての餞の一言が、「心にゆとりもて」でした。随分平凡な言葉だなあ、と思いましたけれど、すぐ忘れました。従って私の人生路はゴーイング・マイ・ウェイでした。

不羈奔放で過ごし、後悔先に立たずですけれど、仕事や家庭、病気など二進も三進もいかない壁にぶつかったとき、父の言葉どおり「心のゆとり」を持った静かな対応が効果を発揮し、

自らの道が拓けた気がしました。

平凡と思った〝父のひとこと〟を息子にも伝承しました。息子はどう考えるでしょうか。

阿部　正男　大正元年8月31日生　東京都出身

▽昭和12年京都帝大経済学部卒、同年東京芝浦電気株式会社入社、19年同小倉工場庶務課長

▽北九州商工会議所専務理事を経て、現在科研化成株式会社監査役

無　言

安西正樹

私は、八幡で生れ、八幡で育った。

五市合併前の八幡市は、製鉄の街であった。当時、荒びれた一漁村にすぎなかった八幡の浦に、明治三十四年、日本一の製鉄所が誘致されて、その十六年後の大正六年には早くも市に昇格している。こんな中で周辺のほとんどの家庭は製鉄と何等かの関りがあった。

私の父も例外ではない。しかし、私に父の記憶はほとんどない。幼時に失ったからだ。兄姉に聞いたところによると、当時としては珍しく柔和な父親で、子供達も、のびのびと振舞えたようだ。だが「躾」は厳しく、箸の上げ下げ迄うるさかったという。

毎晩、晩酌を楽しんだらしい。

私の少年時代、青年時代を通して、口ヒゲを生やし、黒枠〃の中に無言で納って我々を見下していた。

今でいう母子家庭である。当然、世間の波風は高かったけれど、そんなことを周囲も気にも止めない過酷な時代背景であった。

人はよく、「まあ、何とかなるだろう」という。だが、私の生きて来た環境はそれを許さない。

「もう、どうにもならない！」

これが長年身に付けて来た私の生き方である。

父が逝って五十年。

今でも私がむづかしい問題にぶつかって頭を悩ましていると、五十路の坂を登りつめようとして、白髪の目立ってきたこの頃の私より若く、口ヒゲを生やした父が夢の中に現れ、無言で励ましてくれる。

複雑な気持ちを味う時である。

安西　正樹　昭和4年1月2日生　北九州市出身

▽昭和52年迄　株式会社安川電機製作所に勤務。社内業務合理化のためコンピュータシステムの設計を担当

▽昭和54年迄　株式会社ワイイーデータ西部支社長に出向　主として中小企業に対しコンピュータの普及活動に従事▽昭和57年　株式会社シーエスシーを設立・現在に至る

人生は運命との対峙

石蔵　啓三郎

「父のひとこと」で、とっさに脳裏に浮かんだのは「あーァ人生、人生」という父のつぶやきであり、〝運命論〟である。

博多から石蔵屋（弁当屋）の養子に入り、戦前、戦中、戦後、ことに終戦直後の激動期に養子として家業を支える使命感のもとに、まさに必死に処してきた父の人生を考えたとき、父なりに自分の人生を振り返っての凝縮したつぶやきであったろう。成功もし、又失敗もした。必ずしもすべてが思うまゝになるとは限らない人生への実感であったのだろう。

仏壇を大切にし、仏心の篤かった父としての諸行無常のつぶやきであったのだろう。

私が二十歳の時、父は六十四歳であった。東京の大学から郷里へ帰るたびに、ビールを飲み合いながら父と酒の肴がわりに運命論を討かわした。

父の主張は、「人にはもって生まれた運命がある」であり、私は、「それは面白くない。運命とは自分で切り拓いていくものである」と、あたかも一人で生きていくという主張であった。時には激しい議論となった。

父は晩年、かなりの惚けにあり、周囲の人に大変お世話になったが、その惚けの中でも「あ

ーァ人生、人生」というつぶやきと、「運命論」の議論は絶えることがなかった。

子供六人と自分は小学校しか行けなかった故に、「学問が大切」と、よく学校に来ては、廊下から教室をのぞいて黙って帰っていった父。くそまじめで努力屋であった父の期待に、はたして応えているのであろうか。

昭和五十三年五月二十七日、八十二歳で父は逝った。母に遅れること七ヵ月余であった。

「あーァ人生、人生」、そして「運命論」と、近頃は自分の生かされていることを実感し、父の主張に近づきつつある自分を見い出して苦笑することしきりである。

石蔵　啓三郎　昭和16年7月10日生　本籍　福岡県
▽昭和39年慶応義塾大学経済学部卒業
▽39年4月住友化学工業株式会社入社、新居浜事業所に11年勤務▽50年8月家業である北九州駅弁当株式会社取締役総務部長に就任、現在に至る。

一生懸命生きる

和泉太郎

父竹蔵は、昭和四十一年九月二十二日、郷里玉島に於て行年九十歳で他界した。大往生であった。家業は製塩、果樹園、田畑と多角経営を営んでいたので、全く多忙を極めたが、精励恪勤、実によく働いていた。他面、人一倍信仰心厚く、朝夕は祝詞やお経を朗々と称えていたものだ。

又、無類の勉強家で、毎夜遅くまで漢籍を読んだり、写経をしたりしていた姿が今でも眼前に浮かんで来る。

私は子供の頃、いたずらがひどく、近所の家からたびたび苦情が持ち込まれたが、両親ともその都度丁寧に詫びに行っていたのに、自分には何も云わなかった。

私は姉三人と自分の四人姉弟の中の一人息子であった故か、格別に可愛がられ、大事に育てられた。

母、つた乃は良妻賢母型の温順な性格で「子供は将来、どんなに伸びるか分らないから」と云って、寝ている子供の枕元は、決して通らなかった。

父は又、田舎では珍らしく学問好きの教育熱心であっただけに、子供が将来、独立してやっ

てゆけるようにと、娘達にもそれぞれ教師の資格をとらせたが、昭和初期の頃だから、当時としてはかなり進歩的な考え方の持ち主であったと思う。

自分が今日迄大過なくやって来られたのも、一生懸命生きて来た父母の背中を、無意識のうちに見ながら幼年時代を過ごして来たからだと思い、老来、年と共に追慕の情を禁じ得ない。

和泉　太郎　明治45年1月12日生　本籍　岡山県
▽昭和12年京都帝大法学部卒、直ちに日本郵船(株)入社、40年取締役、42年常務取締役
▽47年郵船興業(株)取締役社長、昭和57年取締役会長
〈好きな言葉〉温古知新

油断なき人に不安なし

磯部重雄

私の祖父は長府毛利藩櫛崎城の御舟手番でした。今の下関水族館一帯です。壇の浦海戦では源義経が船所五郎率いる此の辺りの櫛崎船を味方にしたのが戦勝の要因といわれています。父は明治十年生れ。維新による瓦解が尾をひいて随分苦労をしたようで、英文の数学書や設計書が遺っています。鉄道の機関区等に勤めた後大正三年に独立して鉄工所を経営、昭和九年の暮に病没しました。八人の子沢山で、私は末っ子、それも女が三人も続いた後の男の児で大慶び。祖父譲りの趣味魚釣りをプッツリと断って舟もたたき売った由、兎に角嘗めるように溺愛してくれた記憶が残っています。

昨年は丁度創業七十周年に当ると共に父の五十回忌でもあり、昔を知る方々に集って貰い、想出を語って戴きましたが、嘘のつけぬ学究肌の反面、酒が入ると手拭を頭にチョンと乗せて踊る十八番があったそうです。先年、三洋電機の井植社長の御話の中で厳父の五十回忌を故郷淡路島で行う為、予定を秘書課に伝えたところ「ヘエー五十年経っても法事をするものですか」と驚く社員の中で、唯一人「では社長は幼い時から苦労されましたね」と頼母しい発想が返って来た由です。尤も、私の場合は兄姉の御蔭で全く苦労して居りません。それでも時勢もあり、

学資不要の軍の学校に跳込んで航空隊に入ったのは水軍の祖父も驚いたことでしょう。

父が亡くなった朝の模様は当時、小学三年生の私でも異様な雰囲気から昨日の事のように覚えて居ります。病床から母の助けで起上り、取巻く知人達と水盃を交わしました。それが終ると再び仰臥した後、硯を取寄せ、姉達が支える巻紙にいろいろ書き始め「兄弟姉妹仲よく」と迄で筆を落しました。残された母は其の後長命して九十一歳で亡くなりましたが、和箪笥の奥には自ら縫上げた経帷子手甲絆がキチンと置かれ、葬儀料を納めた封筒が添えてあり、思わず襟を正した次第です。

昨年物置を整理して居りますと、古い黒板が出て来て父の筆跡で次のように書いてあります。残念乍ら後半は既に消えて判読不能ですが、早速写真に撮り毎日眺めて居ります。「無駄なき家に不安なし、油断なき人に不安なし……」

磯部　重雄　大正15年1月18日生　本籍　山口県
▽昭和20年陸軍航空士官学校卒▽昭和24年九大工学部卒▽昭和27年九大経済学部卒▽現在磯部鉄工㈱取締役社長

進んでやれば仕事は楽しいもの

市川慶三

私は三男二女の末ッ子に生れた。父が五十二歳の時の子であったので、まるで孫のように猫可愛がりに育ったものだ。特に上の兄姉が次々と亡くなって私が一人残ってからは真綿でくるむような育て方だった。小学校に上っても、雨が降れば休め、風が吹けば休め、運動会で走ると心臓に悪いから走るな、一等の賞品より良い褒美を買ってやる。一事が万事そんな風であった。だから中学に上ってラグビー部に入ったときは、バレーボールの練習を見てあれがラグビーと親爺をだましてはじめたものだが、その嘘がばれて試合の応援にくるようになり、時たま勝つと小踊りして喜んでくれた。

大抵のことは何でも聞いてくれた親爺が眼をむいて反対したのは、私が大学を出て新聞記者を志望した時である。父は自分の夢を果すために私を銀行で修業させたかったようである。

そんなことで朝鮮殖産銀行に入行が決定したときは大変な喜びようであった。入行式の前日母の心尽くしの祝いの膳を前にして、父が真顔で言った言葉は今も私の耳から離れない。

「いよいよ明日から銀行だが、銀行と言うところは人様の大切なお宝を預るところ、信用第一。慶三、お前が銀行に入って一番楽に仕事をするコツを教えるからよく聞いて置け」。「一番楽

なのは自分の勝手気ま、、上の人の言うことも聞き流しでい、加減に仕事をするのが一番楽かも知れん。しかしそれでは三カ月ともたん。仕事はそんな甘いものじゃない。」

「人から言われて仕方なしにやる。人から叱られてやる仕事ほどつらい仕事はない。不平たらたらの仕事くらい面白くないものはない。」「一番楽に仕事をするコツと言うのは誰よりも進んで仕事に取り組むことだ。それが一番仕事を楽にする唯一の方法だ。いゝか、誰よりも一歩先に進んで仕事をやることだ。働き甲斐のある仕事がある訳じゃない。進んで仕事に取組む人の心の中に働き甲斐が生れるのだ。進んでやれば仕事は楽しい。このことを忘れるな」。

「進んでやれば仕事は楽しいもの」のこの一言。本当に甘い親爺だっただけにこの教訓は今もしっかりと耳に焼付いており、私の人生にたしかな活力を与えてくれたと思う。

市川　慶三　大正7年3月8日生　本籍　石川県
▽昭和13年早稲田大学専門部商科卒▽同年朝鮮殖産銀行入行▽昭和20年終戦により引揚げ、宇部信用金庫を経て▽昭和27年西日本相互銀行入行。45年取締役、57年社長就任、59年4月西日本銀行頭取▽昭和58年福岡経済同友会代表幹事
〈好きな言葉〉不撓不屈

早起きは三文の得

井上　章

私の故里は馬寄（北九州市門司区）。現在の町名は社ノ木。変った地名である。

その昔、神功皇后が三韓征伐のおり、この牧草豊かな草場の地を訪ずれ、兵馬を集めたところといわれ、住民の敬神の念厚く社が建てられたところから、草場村、馬寄村、社ノ木と歴史とともに変遷してきたことがわかる。

馬寄には古くから伝承されている馬寄踊りがあり、今でも盆には老若男女によって踊り継がれ、民俗芸能にも指定されている。

土地の古老の口伝えによれば、新九郎という親孝行者を郷土の誉として、また子育ての鑑として伝承され、連綿としてこの地区の教えの中に今でもいきづいている土地柄である。

この様な地で育った祖父は、質実剛健の気風が体にみなぎり、自分に厳しい人でもあった。寺小屋で勉強したというが、読み書き算盤は達者で、大正十二年門司と大里町が門里合併を行なった当時の町会議員であった。

朝は四時に起き、戸ノ上山の大台河原まで馬草苅りに行くのが日課であった。地域の人々の為に諸々の役職を引受け活躍していたようだが八十歳で他界した。

門司港の清見で生まれた父は、豊津中学（現福岡県立豊津高校）を卒業するとすぐ井上家の養子となった。師範学校を出て教職についていた父。戦時中は陸軍少尉、中学校や青年学校の軍事教練の教官でもあった。サーベルをさげ鼻髭を生やし威厳のある容姿そのまゝに厳格で口よりも先に手が飛んだ。私は父が笑った顔を見たことがない。しかし、そんな父でも祖父には一目おいていた。

酒が好きで夜は遅く帰ることが多かった。父が遅く帰ってくると、祖父は「もう少し時間を大切にしないと子供の教育はできない。」と説教をした。

私は親父のそばで消えいるばかりに小さくなって聴いていた。「早起きは三文の得」と口ぐせの様にいっていた祖父は、刻々と過ぎ去って行く時間の貴重な値打ちを、自分の生活観の中で、肌で培ったものを教訓として、父を通し孫の私にも聴かしていたかも知れない。

井上　章　昭和4年4月17日生　本籍　福岡県
▽昭和22年日本電信電話公社勤務、25年太平火災相互株式会社福岡支社勤務を経て▽29年西門司幼稚園設立、学校法人井上学園理事長
▽北九州私立幼稚園連盟会長
著書＝北九州私幼連30年史

お母さんが心配するヨ

今田　章

大正八年九月、私が生れた当時、父は農林省営林署の判任官として釧路に勤務していた。山口県立岩国中学校から早大と剣道が強く、「胴」の今田として鳴らしたそうだ。

昭和十四年、四十五歳で没したので、父と酒をくみかわした経験がまったくないのが残念。謹厳実直で、到来した菓子箱の底に金子が入っていたので出入りを差し止めたそうだ。煙草が好きで、キセルを掃除しながらよく歌っていた。上手だった。横笛もよくした。子供心に修身の教科書から抜け出した様な父だと思った。

教育熱心で、男の子の教育は北海道の田舎では駄目だと東京に転居し、私は巣鴨の仰高尋常高等小学校（東京で二番目に古い小学校）三年生に転校、東京府立第九中学校に入学した。

父は長州産、母は水戸出身。明治維新に共に一頁を残した志士の血を両親から受けついでいる。戦時中の上海、東亜同文書院に入学したのも血の故か？

赤ん坊の頃はヘルニヤで、泣けば脱腸するので泣かされぬ故、甘やかされた由。

父が小さな村の只一人の官吏と云うことで、地域の人々から坊ちゃん、坊ちゃんと、チヤホヤされた。

甘やかされ、チヤホヤされ、その上に生来血の気が多いときているので、私の子供の頃がどうだったか、御想像がつきましょう。

記憶がうすれているが、物心がついてから何回か、そんなことをすると「お母さんが心配するヨ」と注意された。父の言い方は「叱られるヨ」でなく「心配するヨ」だった。母も同様に「お父さんが心配するヨ」だけであった。叱られるのがこわいからでなく、心配をかけてはいけないと云う意識が次第に身についてきたような気がする。

先日、私の食卓の上に「まわりの人の迷惑を考えましょう―禁煙」と貼ってあった。小学生の孫の仕業である。家内の「健康のために節煙」の言葉には馬耳東風だった私もこれには参った。父と孫からはさみ打ちにあった様なもので、父の「心配するヨ」が生き〳〵と甦ってきた。

今田　章　大正8年9月25日生　本籍山口県
▽昭和17年華北電業股份有限公司入社▽応召、戦傷加療中終戦で現地除隊。留用者として石景山火力発電所建設に従事、22年竣工、帰国▽23年4月旭興産㈱創立者の一人として現在に至る

接する人に愛情を持って

今　永　一

父は昭和三十二年三月四日に八十六歳で、母は昭和五十七年十二月二十六日に百一歳で亡くなりましたが、私朝起きた時も、夜寝る時も、何時も父母のことが思い出されて、両親のお位牌におまいりして、父母の愛情に対して感謝しています。

父母は私に接する人に愛情を持って暮せよと、常に申されていましたが、年をとるにつれてこの言葉は益々人間として大切な言葉であると感じています。

胃癌の切除は、ウィーン大学の、現在の外科の生みの親でもあるビルロート先生によって、千八百八十八年に初めて成功致したのでありますが、このビルロート先生の考案した胃癌の切除法は、百年後の現在でも、世界の何れの国の、何れの病院でも行われていまして、この手術は、胃癌が手術を行われずに治る方法が発見されるまでは、この世界では永久に行われることでありましょう。

ビルロート先生は又世界で一番多くの大学教授を育てあげた偉大な教育者でもあります。この沢山の弟子は、皆何時も自分たちは世界最高のよき師に恵まれて思う存分勉強が出来て、この世に何も思い残すことはないと、何時もビルロート先生を慕い感謝していましたが、この様

に弟子は勿論、世界の沢山の人々より、現在でもビルロート先生の様な医者は、この世にもう二人とは生れて来ないだろうと尊敬されていられるのは何故だろうかと、私この点に就て色々調べて見ましたが、それはビルロート先生は、接するすべての人は勿論すべての物に対して、深い愛情を持っていたからだろうと思いました。

愛情とはどんなものであるかを、日本のカント哲学の最高権威者である天野貞祐先生（文相京大総長、一高校長）の学説を調べて見ますと、「愛情とは相手の立場になって考えてあげることである」と述べられていることを知りまして、私深い感銘を受けました。そして私は改めて両親に対して深く感謝した次第であります。

今永　一　明治35年6月23日生　本籍　大分県
▽昭和3年九州帝国大学医学部卒▽昭和12年九州帝国大学助教授▽昭和14年熊本医科大学教授▽昭和24年名古屋大学教授▽昭和40年愛知ガンセンター病院長、48年同総長、愛知県癌研究振興会理事長▽現在　名古屋大学名誉教授、愛知ガンセンター名誉総長

花は桜木、人は武士

入江伸明

終戦の年の昭和二十年八月二十六日に父は先を急ぐかのようにこの世を去った。その時、父は四十五歳、私は十歳であった。

終戦の日のことは今も私の脳裡に焼き付けられている。佐賀県の有明湾に近い一僻村に父が病身だったこともあって、私達は一家をあげて疎開していた。その日、私達は間借りしていた農家の一部屋に集まり、ラジオからきこえる天皇のお声を聴いた。放送が終って、父は「戦争は終った。日本は敗けたのだ」と言った。愛国心の強かった父の気持ちはどんなものであったか、その日からわずか十一日のちに父は死んだ。

父が亡くなって四十年。今でも日本刀を手入れしている父の姿を、息を凝らして見つめていたことを想い出す。端座している父と、日本刀のもつ殺気とが子供の私を圧倒した。このとき父に畏敬を感じ、父が実に立派に見えた。私の姉弟は、姉が二人、長男が私で、弟が二人であった。父は私達兄弟三人が成人した時にはそれぞれ一振の日本刀を与えると約束していた、長男の私には、父が一番大切にしていた一振が当てられていた。私は早く大人になって、この刀を思うままに使える日を夢みていた。

愛国心の強かった父は、私に軍人になることを望んでいた。戦時色の濃い時代ではあったが、私に与えられた本、玩具、その他の身の廻りのものでさえ、いずれも立派な軍人になるための動機づけになるものばかりであった。「花は桜木、人は武士」という言葉を父は好んで使った。この語句は、正真正銘の父からの伝承ものである。

男は一人前扱いをされたくなる頃から、父親をおやじと呼び始める。その頃から私は父親が無性に欲しくなった。居酒屋などで、同年輩の者が父親と盃を酌み交している光景を見ると、なんとも羨しい。いまでも思い悩むことがあると、おやじであればどうするだろうかと想ってみたりする。男は終生おやじと対談を続けているのかもしれない。兎に角、子供の頃に父を失った私にとって、おやじはいつまでも男性の理想像であり、憧憬の化身にしておきたいのかもしれない。

入江　伸明　昭和9年12月3日生　本籍　福岡県
▽昭和33年早稲田大学第一政治経済学部卒。三井信託銀行を経て入江興産㈱に入社。現在、入江興産㈱社長。
〈好きな言葉〉人生は熱であり、愛であり、そして、かえりみる時の微笑である

人間健康が第一

岩木健次

明るいまぶしい陽ざしに、さわやかな風の吹きわたる季節、私はその風の中に亡き父の声を聞く。

「人間健康が第一なのだ」と。

父は萩の出身で、親類兄弟の多くが軍籍にあったにもかかわらず、測量士として身を立て、日露戦争直後の大連（今の中国）で地図作りの仕事をしていた。私がもの心ついた頃は京城（現在のソウル）に移り住んでいた。

父はその頃旧日本軍の司令部で同じ仕事をしていたが、何んの不自由もなく小学校の六年生を迎えた頃、我が家にとって青天霹靂とも云うべき事が起こった。それは父の病であり、しかも長期療養を必要とするものだと云うことであった。子供心にどうすればいいのかと胸を痛めた。当時を今でもはっきり思い出すことが出来る。働くということの何んであるかも判らない取り柄のない母であったが、家計を維持するということのために働きはじめた。

七年間の長い療養生活の中で、父は母や私に対して申訳ないといいつづけていた。そして人間は健康でなければ駄目だ。世に出てからも健康でなければ、自分の職務すら果すことは出来

ないぞとよく云い聞かされた。

その後、私が銀行に就職することになった時も、常に健康に心掛けるよう諭した。

私が銀行に勤めて二年後の大正十三年二月に遂に永眠した。母は働きながら父の看護を終えて責任を果した後も、更に私の為に働きつづけ度いと意欲を燃やしてくれた。そこで早速私は一旦就職した銀行を退職して進学することとした。

それから間もなく私は学生の身で郷里萩で徴兵検査を受けた。結果は第二乙種補充兵ということで、所謂兵隊の落ちこぼれ族であった。そんなひ弱な私が、その後終戦、引揚げという異変にも遭遇しながら、現在他人様にさしたる迷惑をかけることもなく、公認会計士としての職務に落度なく忠実でいられるのは、父の諭しのおかげと心から感謝の気持を持ちつづけている。

八十歳の今日、私は心に父の声を聞く。

岩木　健次　明治37年6月18日生　本籍　山口県
▽昭和2年大邱、京城女子公立商業の教諭
▽20年終戦で京城から門司へ引揚げ、計理士、税理士登録、公認会計士試験合格。北九大、九産大の非常勤講師。家庭裁判所依嘱による財産鑑定、会社更生法、和議の調査業務。髙藤建設監査役外会社顧問

無言の心

上村勝一

昭和二十三年、父が病死したのは私が十七歳の夏であった。敗戦で物資的にも精神的にも全てを失った父にとって、戦後の無理が原因であった様である。

大正十年甲種合格で砲兵隊に入隊した父は、人一倍頑強な身体と精神力を持って居たと思われるが、大阪船場の商家の四代目としての一面をも持ち合せて居た様でもあった。商家の常で家庭や子供の事は殆ど母にまかせて居た様である。従って私には父との対話の場は無かった様に思われる。「よかったなあ」、「あかんがなあ」と言う一言だけであった。ただ常に父の大きな目が物を言って居る様で、どちらかと言えば言葉ではなく行動によって教えられた様に記憶して居る。当時私は未だ高校生であったから将来の問題に就いて父に相談する事も、亦父子で酒を酌み交わす事も無かったからかも知れない。

私が人生設計に就いて父の考え方に接したのは、父の死後、戦時中に書いたと思われる遺言状の写しを見た時であった。長男である私は商業学校に学び将来家業を継承する事云々の一節である。父にとって家を継承して行く事が、第一の任務という考えを持って居た様であった。私は遺言状によって、亦父の死によって初めて父の残してくれた仕事を引く継ぐ事を決めたの

である。当時を知る人達からは「父の死によって良きにつけ悪きにつけ今日の君があるのではないか」と言われ、私自身もその様に思って居る。

そして父の残してくれた仕事が私に対する父の無言の薫陶ではないかと考える様になった。その後仕事を通じて、身をもって教えられた事が、「始末」「算用」「才覚」という船場精神であり、之がおやじの一言と言えるかも知れない。

考えてみると、私自身、息子とこれ迄どれだけの話をして来ただろうか。昨年三井寺円満院門跡様の奨めで、親子対談の場を持ったが、とてもおやじの一言と言えるものではなかった。父親と言うものは、子供特に息子に対しては何んとなく言い難いものの様である。昔から「他人の飯を喰べさせよ」と言われるのも、その一面からではないだろうかと思って居る。

上村　勝一　昭和5年11月21日生　本籍　大阪市
▽昭和28年京都大学経済学部卒。田附株式会社入社▽30年6月旭光製絲株式会社入社▽46年12月社長▽アトラス撚糸、京阪撚糸、旭光商事各代表取締役
〈好きな言葉〉積善之家必有余慶

我家の神話

碓井　三子男

私の生家は筑後川中流の左手で、その昔、古墳中・後期の月ノ岡日ノ岡両古墳の所在する水のきれいな（只今のことではない）小村落で、原鶴温泉の川向うに位置し、代々村横目（久留米藩制度で数ケ村落程度の目付役の様なもの？）をしていたが、約二百六十年前頃享保年間に六代前の祖先が当時の大庄屋の行政上の不正を批判して職務上争いを起こし、大庄屋と幾分でも離れた今の地に移ったと聞かされている。

そうした正義に対しては節を曲げない心を訓えとしてではなく、神話の様に幾度となく聞いて育った幼い日々であった。私は今思い出すと、随分わんぱく坊主で、小学校に上って、先生も色々困られた様ですが、同級生や下級生の為には、上級生に立ち向かって争い、頭にこぶを出したことも再三あった。しかし、親から一口も叱られたことのない反面、私の行いの中に少し許り良いことがあると、祖父が近所の親達にその事を吹聴して歩くので、自然私自身、村で身を正ざるを得ないはめになって、今日の私が出来た様な気がします。

昔は（私の幼い時代）炊事は女子の領域として決められていた当時、小さい時から男子も家事が自身で出来る様に躾られていて、今思い出して自分でよくやったと思っていることがあり

ます。約七十年前、日本中に〝スペイン風邪〟が大流行して、私の一家も父母、伯・叔父母、弟を含む全員が起き上がることも出来ない時に、私だけ幸い病気が軽かったのでしょう。十歳の私が一家の食事を作り、後片け迄した覚えがあります。

私の家は明治維新頃、村の人々の保証人かぶりで没落し、最低の水呑百姓になっていたが、教育だけはとの考えからでしょうか、当時は大部分の子がせいぜい高等小学校迄であった時代に、村の地主の子同様、中等学校に行かせて貰い、兄も郡内に中学校がなく、長崎中学在学中に前記〝スペイン風邪〟にかかって亡くなった。

そういう家計の苦しい中の進学は、私の心に「親の恩」（今の人々にはこの言葉が異様に思われるかしらないが）私は人に言われるのではなく、自分でめぐみを感じています。

碓井　三子男　明治40年生　本籍　福岡県

▽旧県立浮羽工業学校卒業後、財団法人京都建築研究所を経て陸軍小倉造兵廠に技術者として勤務。終戦残務処理を済した後、会社経営、門司市役所を定年退職後髙藤建設株式会社に入社・調査役十一年。現在社会福祉法人小倉新栄会（小倉新栄病院）理事長

短気は損気

内川昭司

私は男ばかり四人兄弟の三番目である。こどもの頃のことで、自分ではよく覚えていないが、兄弟喧嘩の仕掛人だったらしくて、そのあと「お前が悪い」と父からよく叱られた。

東筑中学校（現福岡県立東筑高校）に入って、学校からきた調査書の性格の欄のところに、父は「短気」と書いており、私はそれが嫌だった。東筑高校を卒業する年に母親が腎臓病を患い、手術を余儀なくされ、父から大学に行っても学費の面倒は見れないと言い渡された。一旦は進学を諦めて九州電力（戸畑発電所）に就職した。

しかし、この頃は戦後の混乱期で世情騒然としており、はたちまえの私には、世の中の出来事がよく訳はわからないが腹立しかった。

ちなみに、昭和二十七年四月には破防法案反対の第一波ストに始まり、六月には第三波のゼネスト。同じ年の五月一日は、独立後初めてのメーデーにデモ隊と警官が乱闘したメーデー騒乱事件。五月九日は、警察が早大に突入した早大事件。六月二十四日には大阪の吹田事件、七月七日には名古屋の大須事件。いずれもデモ隊と警官の乱闘事件となり、その結果、大勢の検挙者が出た。九月になると、私の所属した電産労組が、初めて三ヵ月近くに及ぶ電源ストを始

め、十月には炭労大手十七社が無期限ストに入った。政府はこれらに対処するため、翌二十八年にスト規制法を制定しようとし、労働者はその反対闘争を繰り拡げた。

私は、親からの仕送りが得られない生活の不安に気持は揺れたが、社会の不正義に立ち向いたい一心で、昭和二十九年の春、大学を受け、好運にも合格した。父は合格を素直に喜んでくれたが、これから始まる四年間の学生生活を、私が他人に迷惑をかけることなく自力でやれるかどうかをひどく心配した。私が九電をやめて京都に立つ前に、「ほかに言うことはないが、お前は気が短い。短気は損気だ。その性格で人様に迷惑をかけないようにしろ。それだけが心配だ」と言った。この頃は、私はすでに短気を起すとあと味が悪いことを自覚していた。だから、はたちになった私に、その言葉はかなりこたえた。

世の中に出てからも、私は、親父のこのひと言をにがみのある薬にしている。

内川　昭司　昭和7年11月7日生　本籍　北九州市
▽昭和33年立命館大学法学部卒業
▽弁護士、福岡県弁護士会小倉部会所属

脚下照顧

江頭匡一

昭和三十年、思いもかけぬ脱税の摘発を受け私の人生に大きな転機が訪れた。戦後、米軍の御用商をはじめ種々の事業を手がけて成功した私はまさに得意の絶頂にあったが、巨額の追徴金はそれまでの蓄積をすべて吹き飛ばしてしまった。

その時、私の頭をよぎったのが「脚下照顧」という言葉である。私はそれまでの事業生活を振り返り、結局、男子にとって事業とは一生に一つしか成らないものではなかろうかと考えた。そして、アメリカのレストラン王、ハワード・ジョンソンの伝記にふれた私は、飲食業こそ一生の仕事と決め、再スタートを切ったのである。

それ以後、経営の節目というか、大きな方針を決定する時などには、無意識のうちに「これでいいのか」と自問自答するようになった。

「漁夫生涯竹一竿」―人生一つのことをやり通せば、必ずその道のプロになれる。

「随時随所に在りて主人となる」―いつ、いかなる時も自分の能力を精一杯発揮することだ。

いずれも私なりの解釈である。そして、「脚下照顧」とともに、私のいわば人生訓となっている。

これらの言葉は、実は私が少年の頃、父が勉強部屋の床の間に掛けてくれた軸にあった言葉である。当時、父に反抗ばかりしていた私にはまったく無用の言葉であり、その意味を知ろうともしなかった。

その言葉が三十歳を過ぎて、大きく躓いた時に私を支えてくれたのである。

私は父から金銭的なものは何も貰っていない。すべて自分自身の力でやってきたと豪語していたが、父はお金では購うことのできない大きな財産を遺しておいてくれたのである。

江頭　匡一　大正12年3月25日生　本籍　福岡県
▽昭和20年旧制明治大学専門部法律科中退、米極東空軍御用商を経て▽昭和31年ロイヤル株式会社設立、代表取締役社長就任、現在に至る。飲食業を産業に育てたいという理念のもとに、総合飲食企業として全国に事業を展開

身の程を知れ

合馬又彦

実父今永幸生は慶応義塾理財科にて福沢諭吉先生の薫陶を受け、卒業後三井銀行に勤務しましたが、ロンドン出張を命ぜられ、大分県宇佐の病父の強い願望の為、志半ばに帰郷、生涯をこの地にて過しました。

言葉数の少ない、几帳面な、物静かな性格で、郷土愛も強く、村の為には随分と奉仕して居りました。又読書が好きで、よく老子、孫子、十八史略、仏書等の漢書をはじめ、英字新聞にまで目を通し、依頼されれば書を書き、囲碁も趣味の一つでした。

父の常日頃の言葉には「身の程」、「身を以て示せ」、「人の身になれ」等「身」の付いた言葉が多く有りました。私の永い人生で其の時其の場でこの一語が色々の面で思い出され役立って居ると思います。

此の詞(ことば)は仏教や老子の教えから来ているとは言え、私達祖先からの渡世の警句ともされて来ました。「身」という言葉の音は肉体、響は心魂が感じられます。想うに身も心も魂も全人格体が一つに成って営まれる思考は人間に取っては大変大切なことと思います。

現在、社会にはこの点が次第に失われつつある故に篤志の方達の協力の許に回復される事を

切に願って居ります。人の誠の心から出た言葉は人間が万物の霊長として、この世に存在する上で不滅のものです。

私は実父から訓示された「身」と言う詞を子々孫々まで処世の指針として、来るべき二十一世紀を迎え、より逞しく実社会に活躍してほしいと熱望して居ります。

合馬　又彦　明治37年6月28日生（旧姓　今永）

本籍　大分県中津市

▽昭和6年慶大医学部卒、同校医局長、講師、医博、ドイツ留学二年▽昭和14年小倉にて開業（合馬耳鼻咽喉科医院）現合馬クリニック（内科）耳鼻科担当

▽著書『ホルモン、内身扁桃腺に関する論文』

〈好きな言葉〉春立つや愚の上にまた愚にかへる

自然の恵みと二人の父の教訓

岡野正実

私は、少年時代を博多の郊外約二十粁位にある田舎で育ちました。誠に静かで平和な田園であり、当時模範村と云われた程の、実に純朴な農村でありました。

小学校の一年生の時から、夏休みには必ず上級生から集合させられ、勉強させられたり、藁細工を教えられて草履を作ったりして、その草履で学校に通ったものです。

私は幸にも、二組の父母を持ちました。云い換えると、私は成人の後、他家を継ぐこととなったわけであります。

実父は非常に温厚で実直な性格で、少々いたずらをしても、怒られた覚えはありませんでした。その実父が何時も口癖に云ったことがあります。「お前が大きくなって人の上に立つことがあっても、自分の力だけでそうなったなどと、決して思ってはいけない。それはむしろお前の周囲の人々や、世の中のおかげがあればこそと思え」という言葉でありました。

勿論、子供心に、何となく聞き、何となく何時の間にか覚えた言葉でありました。その言葉は「社会の恩を忘れるな」という戒めであることが、成長し社会体験を重ねるに従って次第に理解出来るようになり、今や私の人生観のバックボーンとなったのであります。

養父は、青年時代刻苦勉励を重ね、永い間外国企業に奉職し、種々の体験が豊富でしたので、物事のけじめがはっきりして、極めて簡明卒直であると共に、非常に厳しい性格でした。その養父からうけた教訓はいろいろありましたが、その中で、他人に対する思いやりについて、次の様な考え方を持てと云うことであります。即ち「人間は神様では無い。どんな人間でも無くて七癖で、特徴と欠陥を併せ持っていることは止むを得ない。だから人と接する時にはその人の欠陥だけをとりあげて批判することよりも、むしろ先にその人の特徴を更に大きく伸ばすよう協力してあげることが大切である」ということであります。

私は少年時代の野性味ゆたかな田舎の自然にはぐくまれると共に、二人の父から得た指針を糧に、そして周辺の人々とのふれ合いと恩情により、人生を豊かに、そして心楽しく過ごせることを、誠に有難いことであると、只管感謝している次第であります。

岡野　正実　明治44年1月2日生　本籍　福岡県

▽昭和14年九州帝大経済学部卒。同工学部機械工学研修▽住友化学工業を経て岡野バルブ製造株式会社入社

▽昭和40年同社長就任、今日に至る

▽現在北九州商工会議所副会頭、ＪＥＴＲＯ北九州会長、メキシコ国名誉領事

売物には紅をさせ

岡本包夫

私の家業は刃物鍛冶でした。作り貯めた包丁を、市内の市場などを回って売り歩くのが、祖父と私の週に一度の仕事でした。私には職場から解放される嬉しい日でもありました。

前の晩遅くまで入念に研ぎ込みタップリ油を引き、二つの木箱に並べておいて寝るのです。翌朝は暗いうちに二つの箱を天秤棒で担いで家を出るのです。

その日は底冷えがして起き出し辛く、ぐつぐつしていると、職場の方でかすかな物音がする。祖父かと慌てて職場に出てみると、薄暗い裸電球の下で父が一丁毎に刃先を布切れで拭いています。

私が、研いで油も引いている、と不足顔に呟くと、父は油が多いと刃鋼と地鋼の境目が分かり憎い、と言いながら丹念に刃先を拭くのです。腹が立って膨れていると、父は鋭い目を向けて「売り物には紅をさせ」ということがある。それは、良くないものを良く見せようとするのではなく、職人が自分の作ったものに対する愛情であり礼儀だよと言いながら、なおも手を休ませないでいました。

私が十四歳の冬のことでした。

人には、ふと口に出る言葉があるようです。それは、お風呂に入っていて、トイレで用を足していて、食事をしていて、ふと口に出るのです。口癖というのでしょうか、私の口癖は「売物には紅をさせ」です。

父は根からの刃物鍛冶職人で、少し名人気質のある人でした。素朴な人柄は誰からも愛され私達兄妹にとっても最高に良い父でした。父の口癖が私の口癖になったのなら、こんな素晴しい遺産はないと思います。

岡本　包夫　大正3年1月1日生　出生地　島根県
▽昭和6年下関商工実践学校夜間本科卒。12歳から24歳まで打刃物職の家業に従う
▽25歳から31歳まで中華民国青島在住。昭和20年引揚げ▽昭和25年父と弟二人で株式会社カネヤス創立、専務、社長、会長を経て相談役
著書『みかんの皮』『運鈍根』他

父の後姿

大石正巳

もの心ついてはじめての父の記憶が、不思議な程鮮明に残っています。

昭和初年頃、叺や俵でいっぱいのうす暗い倉庫のなかで、厚司姿に前掛を締めた父は、気忙しく叺、俵を縄で荷造っては担ぎ運んでいます。柱に帯紐で結ばれ、私は土間の叺の上で、休むことなく働く父の姿をじっと見つめています。その印象が強かったせいか、今でも私の記憶にある父はいつも仕事に熱中し、仕事に一途な姿ばかりです。

父は明治三十一年、佐賀県の木蠟商兼業農家の二男に生れました。兵役を終え、大正九年、家業不振のため製鉄所のある八幡に単身移住、同十四年に大石商店の看板をあげましたが、その数年間は辛苦の連続で、創業の試練と醸成の時でもありました。

農繁期には日傭で、遠賀村まで出掛けたこともあったそうです。

製鉄所の構内で働いたこともありましたが、ある日、身近に事故があり、明日は我が身とやめたそうです。その時は思いつめ、弁当箱まで捨てて帰ったが、勿体ないことをしたと笑っていました。

僅かな資金で米屋を始めたものの、米価の変動でたちまち倒産の憂き目にあい、苦悩と無念

の末、「世間を甘く見過ぎた。我ながら思いあがっていた。分を弁え、己を知る」ことを肝に銘じ、背水の覚悟で再起を誓ったそうです。未熟な自分では、米屋は手におえなくても、容器なら自分で車力をひき、自分の才覚で一時間でも多く働き、一軒でも、一度でも数多く得意先を廻りさえすればなんとかなると、残り少い六十円のうち十五円で車力を買い、包装材料の仕事を始めたという話は、明治生れの男そのもので、忘れられません。

以来六十年。なにもかも変わったようにも思えますし、父の死後三十三年にもなりますが、私は今でも六十年前に父が拓いた道を、ただ辿ってばかりいるように思えます。時には追い越したいと念ずることもありますが、いつも、肩巾の広い父の後姿が目の前にあります。

大石　正巳　大正12年4月18日生　本籍　佐賀県
▽昭和18年12月早稲田大学商学部在学中、学徒動員▽21年復員後、大石商店入社、22年監査役就任、27年4月日航機事故による父遭難により大石産業株式会社社長就任。五十三年会長就任、現在に至る

さあ、自然と対決だ

大石　潤

私が音楽の道へ入るきっかけとなったのは　父が買ってくれた小さな卓上グランドピアノである。当時四歳であった私は、父と母を相手にその卓上ピアノを一本の指で弾き鳴らす毎日であった。私にとってアンサンブルの初体験である。現在、ピアノでもって室内楽の道を歩んでいるのも、この一台の卓上ピアノがあったからだと思っている。

小学校に行くようになって初めてピアノを本格的に教わるようになった。この時点でピアノを勉強する事がいかに大変であるかを知らされたのである。能動的、早く言えばわんぱく坊主であった私には、長時間ピアノの前に坐っているこの苦痛は想像に絶するものであった。しかし、音楽がもっているエネルギーを感じていた事は確かであった。ひとつの音は千の言葉で説明するよりすばらしい意味をもつ。音のアンサンブルで大きな感動の世界へ入り、泣き、笑い、そして共鳴し、人間であることを実感しながら人生を歩むのである。

父は画家であった。私が世界中で一番尊敬する男でもあった。その父と或る日軽井沢へ出かけた。雄大な朝焼けの浅間山に立ち向かって二人がキャンバスを並べたのである。筆を手にした父は朝日に輝く浅間山に向かって「さあ！自然と対決だ」。この一言は私の心に強烈な勢いで

突入した。自然、それは完全なものである。究極的には神に向かって心を開き、真実と美の世界へ入り込んでゆくことである。幼い頃からもっていたやさしい父というイメージが、この一言で芸術家である途方もなく大きな父になってしまった。父と肩を並べて絵を描くことによって、私は音楽がもつ深さ、芸術の底知れぬすばらしさを感じたのである。

私が音楽の世界で自然と対決出来るようになるにはまだまだ遠い。私には私自身が在り、そして又私には沢山の育てなければならない音楽家の卵がいる。そういう人達にいつか「さあ、自然と対決だ」という言葉をなげかけられるようになってみたい。

一台の小さな卓上ピアノから始まった私の人生である。音楽と音楽のアンサンブル、そして、人間と人間のアンサンブル、そこに私は真実をみつけたいと希っている。

大石　潤　昭和16年6月17日生　東京都出身
▽昭和39年国立音楽大学ピアノ科卒、41年同大学専攻科卒、大石潤ピアノトリオを結成、パリ・エコールノルマルに留学、ベルリン四重奏団、ウィンフィルハーモニーのA・スコッチ、ゲバントハウスのG・ボッセと協演▽昭和60年国立音楽大学助教授

温容、不言実行

大神文和

雄たけびは耳にのこれど下あごの
　ひげなつかしき　大人のおも影

亡父大神貴文の銅像に刻まれた元伊勢神宮少宮司・古川左京氏作の和歌です。

祖父母が若くして世を去ったために、父は伊勢神宮皇学館卒業後、若冠二十歳で宮司となりました。

父は明治末期から大正時代にかけて甲宗八幡神社の境内整備、壮大な社殿や楼門等の改築を手掛け完成をみております。

然し終戦直前の昭和二十年六月二十八日の空襲で神社は焼失、若い頃から苦労した父だけにどんなにか心の痛手を負ったことだろうと思います。

父は常に神恩、皇室中心、社会奉仕、報恩反始、卒先躬行を身を以て子供達に示しておりましたが、神社の復興のため立ち上り、自身の信念を貫き、精魂を傾けて現在の社殿を再建したのです。

どんな苦難にもくじけず信ずるところに従って雄々しく生き、神に仕えた父の生き様は、私

に示してくれた無言の教訓であったと今にして父の恩を感じざるを得ません。

神社界に貢献が大きいとして生前数々の栄誉を受けておりましたが、亡くなりました翌年神社惣代会長を始め地元の皆さん、熱田神宮や大阪住吉大社の宮司さん方のご好意で当社境内に銅像を建てていただきました。日々在りし日の父の像を見上げながら私も父のような生き方にあやかりたいものと願っております。

大神　文和　明治45年1月18日生　本籍　福岡県

▽昭和6年伊熱神宮皇学館卒

▽9年日本大学卒、甲宗八幡宮奉職

▽39年甲宗八幡宮宮司

態度で教えられた庭訓

大木二郎

朝、目覚めて、両親不在、兄弟だけで朝食をそこそこに学校へ。当然、弁当の時間は、愉しく箱を開ける級友の中で俯いたまま。女性の担任の先生は昔の小使室に私をひっ張って行き、ジャムパン半分下さる。涙ボロボロ喰べた少年の姿が私。

この朝、両親は孤独でこの世を去った老人の湯灌から葬儀の手続きまで済まして夜が明けた由。「極貧の老人への義務なのよ」と、母。他人に、世間に盡くせ、私に謙虚と清貧を無言で教えたのか。

ギリシヤ正教の神父であった父がそのエスプリを態度で教示した庭訓か。

医師を志し、ニコライ師に出会い、人の心を医やせと諭され伝道の道に転じた人。北九州にも旧制第七高校生であった私を母の亡きあと従え、誦経の間の聖歌をうたわせ、上手とも下手とも言って呉れなかった想出もある。できの悪さを見抜いて私を東大に入れて呉れた父。

今、独り鏡で自分の顔を凝視すると涙が止まらない。聖と俗。私はプロファーネ。昨春、叙勲の報告のつもりで、東京の小平霊園の墓に参った時、讃めの言葉は呉れなかった気がした。

結局、庭訓らしきものを言葉で教示された覚えがない。それが逆に、盡きぬ教えとして常に

響いて来る。

ラ・ロシュフコー（フランスのモラリスト）に感性過ぎると皮肉られても私は構わない。

大木　二郎　明治45年3月5日生　本籍　東京都

▽昭和12年東京帝国大学文学部卒

▽旧制鹿児島青年師範学校教授、鹿児島大学教授（倫理学）を経て▽現在、鹿児島大学名誉教授、鹿児島女子大学教授

〈好きな言葉〉水平思考

新しき朝日は昇る

大迫　忍

私の中にある父は、たいへん厳しい父でした。部下のとんでもない不始末でもかばうほど他人にはとても優しかったが、私にはめっぽう厳しく、むちゃな要求も少なくなかった。父が創業のとき、会社名にとった〝善隣の精神〟などかけらもないように思え、名前どおり、ただもう「忍」の一字でした。

当人にとっては迷惑な話でしたが、父の考えでは、長男がしっかりしておれば、事業も親きょうだいも心配いらないし、他のきょうだいは長男に比べて親にめんどうみてもらう時間が短いから下の方には優しくということのようでした。その頃はすでに零落していた貧農の三男坊として生まれた父は、小学三年のとき、台湾で住職をしている叔父の養子に出され、台中第二中学校を卒業後大陸に渡り、当時の国策会社で日中合弁の華北交通で秘書兼通訳をしていたそうです。そして敗戦と内地での再出発――こうした怒涛のなかに棹さした父には私たちには計り知れない人生哲学があったのでしょう。

その厳しい父も、難病に倒れてからは、私が病院にいるときが一番心が安まったようで、特に夜は引き留めました。そして、殆ど助かる見込みのない最後の手術のおり、「お前は良いパ

ートナーだった。ありがとう」と、しっかり私の手を握りしめました。

太平洋戦争の敗戦で、青年の夢をかけた大陸から裸で別府に引き揚げ、まだ一つにもなっていなかった私をはじめ家族を養っていく父の苦労は並大抵ではなかったと思います。そのなかで創業した地図製作業が時代とともに発展したとはいえ、常に独りで悩んだ父の孤独が、死出の一週間前に語った「お前は良いパートナーだった」という言葉にしのばれ、ふびんに思えました。

また、父は他界する三週間ほど前の小康を得た朝、ベッドに仰臥したまま「新しき朝日は昇る五月晴」と墨書しました。この朝の父の心情はともかく、私は自分の人生にいい句を遺してくれたと思っています。最後まで希望を棄てずにその日その日に力を尽くすという自らの戒めとして。

大迫　忍　昭和20年8月13日生　本籍　大分県宇佐市
▽昭和43年中央大学文学部卒、株式会社ゼンリン入社
▽昭和55年5月同社代表取締役社長、西日本美術精版株式会社社長▽58年8月MRDゼンリン株式会社社長
▽59年9月天地堂印刷株式会社社長ほか、現在に至る
〈好きな言葉〉終身学習

胸を張れる親に

大西利昌

父は八幡製鉄の社員だった。曽祖父の代までは伊豫（愛媛県）。墓石に「備前公」の文字も見えるから、先祖は岡山の出かも知れない。とにかく、祖父が愛媛から出て来て八幡製鉄所につとめ、父は親子二代の製鉄マンだった。熔接技術者だった父は、〝まじめ〟一本の性格で、製鉄所から発明・考案の表彰状をたくさんもらっていた。

昭和二十八年、私が中学二年の初夏、脳卒中で倒れ、五年ほどして五十六歳で他界したので、父と子が真剣に人生を語るような経験はない。記憶にあるのは、幼い子供にとってはこわい父親だったということだけである。特に、しつけについては厳しく、すわり方、ご飯の食べ方まで注意した。

懐しい思い出もある。小学三年の時病気をしたが、その全快祝いにゴム長を買ってくれた。当時は終戦後の物資不足時代、学校でも長靴は珍しかった。六年の修学旅行から帰ったとき、戸畑駅まで迎えに来ていた。無事に帰ったのがよほど嬉しかったらしい。当時は、列車やバスの事故、旅館の火災など多く、心配していたのであろう。十人きょうだいの六番目、上がみんな女の子だったので、小さいときから畑開懇を手伝わされた。終戦後の食糧難を切り抜けるた

め、小さな山地、原野も切り拓いてイモや野菜を植えていた。

しかし、中学一年の春休みに父が市議会議員の選挙に出たので、標識を持って手伝おうとしたら、「子供がすることではない」と叱られた。手伝いにもケジメはつけていたのであろう。

その後間もなく父が倒れてから、家計は火の車となった。一番下の弟が小学二年。祖父はお茶やレコードなどにあり金をはたく趣味道楽だったので、一生懸命働いた。

父の葬儀がすんだあと、家族みんなにあてた遺書が出て来た。子供達には、「成人した暁に胸を張れる親になろうではありませんか」とあった。

何もない私が、若くして事業ができたのも、こうした父の生き方のお陰で、父の信用に支えられて助けてもらったことを思うにつけ、先人から受けたご恩を少しでも返したいと思う。

大西　利昌　昭和15年11月7日生　本籍　北九州市
▽昭和36年11月ロマン美容室開設▽40年11月理容店、42年2月飲食店開設を経て▽44年4月冠婚事業開始▽46年12月株式会社北九州冠婚葬祭助成会設立・代表取締役社長▽58年6月株式会社サニーライフ・明善社社長
〈好きな言葉〉現状維持は腐敗である

相手の立場になって考える

奥田　洋

父は広島県双三郡（現在の三次市）に農家の三男として生れ、苦労して学校を出たようです。そのせいか私の学生時代にはよく「我々の若い頃は……」と云って叱られたものでした。

父は冗談はよく云っていましたが、訥弁で、人前で話をするのは余り得手ではないようでした。

私は昭和三十五年大学を出て父の会社に入り、年始、その他の催し事等の挨拶で父が訥々と話していたのが思い出されます。

そういう父でしたから、仕事の上でもこゝはこうしろ、あそこはあゝしろ、というような事は余りありませんでした。手とり足とり商売の手ほどきをしてくれるものと思っていた私にはとても不安な事でした。自分のやっている事を見て盗み学べ、という事だったのでしょう。

そういう環境の中で、昭和四十年、私が二十九歳の時に石油会社を設立し、社長に就任しました。

その時の言葉がおやじの全てではなかったかと思っております。「誠意をもって仕事、人に接しろ、自ずと道は開けてくる」「常に相手の立場になって物事を考えろ」と。誠意をもって

一生懸命努力し、たとえその結果が失敗に終っても父はこれを責める事を決してしませんでした。

一時の失敗は必ずや次の成功に繋がるでしょう。又商売というものは自分丈け利益を上げる事は決して有り得ず、相手の立場になって物事を考えると、お互いに相応の利益を得て、その関係はずっと長続きするでしょう。

私は相手の立場を考え過ぎるせいか、どうも金儲けが下手なようです。

奥田　洋　昭和11年5月5日生　本籍　福岡県

▽昭和35年早稲田大商学部卒

▽36年奥田金属㈱に入社、取締役▽40年奥田石油㈱代表取締役社長▽41年奥田土地建物㈱取締役、門司伸管工業㈱取締役兼任▽52年奥田金属㈱代表取締役社長

自助努力・筋を通す

小野　精次郎

昭和八年十月頃、私は父に「小笠原家の歴代お殿様のお茶うけの菓子として知られている〝鶴の子〟は、今では他の菓子屋でも売られている様ですが、湖月堂でも造る方向で研究をしてはどうですか」と伺いをたてたことがあった。ところが日頃はもの静かな父が声を大にして、「他の菓子屋はいざ知らず、鶴の子は代々の福田屋さんが昔から苦労を重ねて今日の鶴の子を造り上げたのだ。それを努力もせず、ただ真似だけをして、鶴の子として簡単に売り出そうなどと考えるのはあさましい考え方だ。その様では将来立派な菓子は造れない。有名な菓子程それだけ苦心と努力の積み上げがいるものだ。その様に思いあがった考え方をする様では駄目だ」と、酷しく叱られ、二度とこの様な情けないことは考えないで呉れと、無口で温厚な父から強くとがめられた。

以来、私は鶴の子のことについては語ることはなかった。

父の死後、時は経ち、昭和五十一年秋に福田屋さんが鶴の子の製造を止められると聞いた。暫らくして福田屋さんにお会いする機会があったので、「福田屋さん、今は鶴の子は小倉の銘菓として、多くの方々が遺されることを望んでいます。福田屋さん、頑張って鶴の子を造って下

さい」とお奨めをしたところ、福田屋さんは、健康上の理由と、後継者の問題もあるので、小笠原家のご当主忠統様に事情を申し上げ、福田屋は私の代で終りに致したいということのお許しを得ていますとお話があった。

後日、小笠原様にお会い致した折に福田屋さんとの経緯を聞かれたので、ありのまゝお話したところ、小笠原様は私に福田屋さんには自分から話をしましょう、福田屋さんが承知されたら、湖月堂の鶴の子として造っては如何とお奨めを頂きましたので、小笠原様がお気に召す鶴の子が出来ましたら、小笠原家のお許状を戴き、造らせて頂きますということになった。

湖月堂の鶴の子が、発売されたのは一年後の昭和五十二年十一月であった。私を厳しく叱って呉れた父の思慮の深さと義理を通されたことには、頭の下がる思いの私である。

小野　精次郎　明治42年2月9日生　出身地　北九州市
▽大分高等商業学校（現大分大学）卒、昭和5年4月㈲湖月堂商店入社▽昭和36年10月㈱湖月堂代表取締役社長、56年11月同代表取締役会長▽48年10月コゲツ産業株式会社設立、代表取締役社長、56年11月同代表取締役会長▽42年3月コゲツフーズ株式会社設立、代表取締役社長、57年5月同代表取締役会長

若い時の苦労は買ってでもせよ

小原一美

私の父は徳島県の四国三郎の別名で呼ばれる吉野川の中流にある麻植郡川島町で生まれました。阿波踊りで有名な徳島市からおよそ二十キロほどのところで、北に讃岐山脈、南には四国山脈が連なり、雄大な山々に抱かれた風光明眉な由緒ある町です。

明治二十五年生れの父は、小学校を卒業するとすぐ縁故を頼って裸一貫で旧門司市の金物店に丁稚奉公として住み込んだそうです。心に夢を抱いているとはいえ、友達もおらずただ働くだけの明け暮れだったが、努力の甲斐あって九年目にして自分の金物店をもつことが出来たそうです。それからはいろいろな事業を手がけ、七転び八起きして今日の小原ビル、小原運輸を築き上げることが出来ました。

そんな父が、よく私に言い聞かせたことは、「他人のめしを食え」、「若い時の苦労は買って出よ」でした。

父はその言葉を実行し、私が中学を卒業すると、迷わず大阪の金物問屋に丁稚奉公に出されました。

当時父は、金物店や他の事業も手広くやっていたので、よもやと思っていましたが、人の心

をつかむ為には他人の所で苦労しなければだめだという父の持論をとおされたのです。この父の厳しい姿勢は今の私にどれだけ戒しめとなったことか、私が今日あるのもこの父の教訓と躾があったからこそと感謝しています。

また成人した私に言って聞かされたことがあります。それは、「財が出来たら社会に還元せよ」でした。

父は事業での儲けを惜しみなく郷里川島町や門司に投じ、昭和四十五年には川島町の名誉町民の称号を授かり、銅像が建立された程でした。

毎日、父の仏壇に手を合わせるたびに今は亡き父の言葉が語りかけてくるような気がします。「俺の言った事を実行しているか」「頑張れよ」。厳しい父でしたが慈愛にみちた父でした。

小原　一美　大正6年3月3日生　本籍　福岡県
▽昭和21年家業の運送業手伝い
▽27年3月小原運輸有限会社・専務取締役就任
▽54年12月同代表取締役就任、現在に至る

企業で地域を開発せよ

笠井三郎

私の住む鳥栖市は、福岡県内に湾入し、佐賀県に在り乍ら福岡の経済圏内にある。一級国道三号線と三十四号線は市内で分岐、高速道路のジャンクションも市内に在り、国鉄も此処で分岐、只通過していないのは西鉄の電車のみと言った交通の要衝である。然し乍ら国鉄で栄えた時代は過去の夢、昭和二十四年に進出して頂いた元日本専売公社も明年三月には筑紫野市に移転されるし、九州で只一つ空港のない憐れな佐賀県内に在って重荷を背負わされている。

亡くなった父に「事業を通じて地域開発に専念せよ」「儲けることを先に考えるな」「誠実に経営して社会の信用を得れば必ず報われる」苦難に克ち抜く事だと悟されて来た。

戦時中、三回の空襲を受け、終戦四日前の第三回目の爆撃で事業所は完全に灰燼に帰してしまった。その後復旧に努力し、地域社会の発展を念願しつつ倉庫業に専念して来たが、今日があるのも亡き父の教えの賜物だと只管感謝している。

斯くして、亡き父の訓に徹して来たが、明治生れの教育を受けて来た所謂頑なな性格と信条は私をして今尚現職に止め、当市の開発を忘れさせません。

今や、日本は世界各国からあらゆる面で「余りにも恵まれ、良過ぎる」と批判され、今後が

案ぜられる時代になって来た。先憂後楽の諺通り、人には迷惑をかけない、強く正しく、企業の社会的責任を重じ、今後共この田舎で一生を地域開発に貢献すべしと覚悟している。

幸にも、テクノポリス指定十七ヶ所の中で県境を越えて指定された唯一の市であり、未来ある地方都市として認められ、その胎動に意を強くしている。この時にして更に亡き父の遺訓に背く事なく努力することこそ孝養の道であり今後共努力して行く所存である。

因に、当市は、対馬藩の飛地であったことから農民ストライキは全国的に有名であった。又親方日の丸の国鉄や元専売公社があるので、市民意識が活力ある他市と聊か喰違っている点があり、市民の洗脳を期待し、先輩諸兄の御教示を仰ぐ次第です。

笠井　三　郎　明治43年生　本籍　佐賀県

▽昭和6年大分高商卒▽鳥栖倉庫㈱社長、佐賀県倉庫協会長、日本倉庫協会常任理事、九州地方倉庫業連合会副会長、鳥栖商工会議所副会頭

〈好きな言葉〉信用は最大の資本なり

ただ酒は呑むな

加治屋　知　暁

私の故郷は鹿児島県の最北端。十層山脈を北東に越えると、平家の落人で有名な人吉市。西に二山、三山越えるとツルの里出水市。遠く南東の空に韓国、高千穂の霧島山群が浮かぶ。人口わずか二万七千八百の大口市である。海抜百八十米もある高所盆地だから、三十糎くらいの雪は珍しくない。昔は〝陸の孤島〟と言われ、島津が薩摩藩を統一するとき手をやいた。

こんなところだから、私が生れたころはまだ幕末が続いていた。中学校（旧制）の校歌に「北客来らば硝薬を　膳羞せんと叫びたる　衣鉢はここに　華と咲く」というのがあった。関ヶ原や西南の役の無念を思い、肥後の加藤や熊本鎮台を北客と仮想して教育したのであろう。

父は無口だった。しかし、冗談は好きで、よく人をからかった。お人好しでのんきなことも人後におちなかった。伯父の金山探しの保証人になり、家業の焼酎醸造屋を潰したくらいだから鑑定書付きである。大学に入った夏、「何科だったか？」と聞くので「哲学科」と答えるとしたり顔をしている。教育長が聞いたので、「たしか八幡製鉄に関係のある科だった」と返事したという。十年後、経済記者として八幡製鉄を担当するとは思いもしなかった。

そんな父だから、子供を叱ることもほとんどなかった。だが、時折り、思いついたように教

訓めいたことも言った。それも一分足らず。「人に後指をさされるな」とか、「弱い者に味方せよ」とか、「正義のためには先頭に立て」とか。ほとんど短語に近かった。師範学校に入ったころ、「ただ酒は呑むな」と言ったことも忘れられない。

学校の父兄会に行っても、母親にも一言もどうだったと話すことのない父だったが、脈絡のない折り折りの短語の中にも、「自分で考え、自分で処理せよ」という希(ねが)いがあったのであろうか。進学、就職、一切指図はしなかった。

しかし、こうした父の無言と短語が私をジャーナリストに走らせたような気がする。まぎれもない事実は、父に似て酒が好き。折りにふれ、二、三人伴い、役にも立たぬことをしゃべって呑むのが好きということである。

加治屋　知暁　昭和4年12月7日生　本籍　鹿児島県
▽昭和27年旧制九州大学文学部卒、毎日新聞入社、編集委員、51年希望退職、毎日新聞社終身名誉職員▽現在、マスコミ心理言語研究所長・講師・会社顧問
▽著書＝『現代を演ずるもの』『門司ロータリー50周年史』他

〈好きな言葉〉己の欲せざるところを人に施すなかれ

大学は出ておけよ

川崎清澄

「大学丈は出て置けよ!!」

終戦の年、昭和二十年海軍より復員した私への父の言葉でした。

現在であれば「親から言われて学校へ行くなんて親不孝もいい加減にしろ！そんな気持であれば学校へ行く必要なし」と人は思うでしょう。

敗戦と同時に世の中は乱れ、勝利への目標を失った私は唯茫然として居りました。戦後の農地改革、インフレ等、日銭の入る当ての無い旧地主の家には兄弟三人の内、兄と私二人の大学生活は経済的に絶対困難だったのです。大学予科入学後も、預金封鎖、国鉄私鉄値上げ等、その都度学校を中退する事が家族一同幸福になる道では―と幾度も考えたものです。

しかし父は「大学丈は出て置けよ」の一言でした。米を取りに我が家に帰る毎に、山の檜が段々と伐られて行きました。

そこで私は、現在奉職して居ります会社に入社し、会社の好意に甘えアルバイトをし乍ら学業との両立の道を考え実行しました。従って卒業迄の二年間は、社会人と学生半々の生活をして居た訳です。其の間常に頭の上には、親の「苦しくても学校は止めてはいけないのだ」の言葉

を胸に頑張って来たものでした。

今思うに、父は兄弟三人大学を卒業させた訳ですが、大学さえ行かせなければ、地元で晩年三人の息子や其の家族に囲まれて楽しい人生だったのではないかと思います。しかし兄弟三人故郷を離れ大阪、福岡、東京と遠くに住む結果となり、父母は家を守ると言って田舎暮しで終りました。

父の一言に依り、私は勿論、兄弟全員幸福な人生を送って居ります。私は、父より受けた言葉は「勉強丈はして置けよ」と言われたのだと思って居ります。幸い私は二人の息子に恵まれ、同じ様に「勉強丈はして置け」と伝えて来ました。その二人も数年前社会人と成りましたが、いずれ近い将来、その子供達に対し同じ事を言い伝えて行くものと信じて居ります。

川崎　清澄　昭和4年2月1日生　本籍　敦賀市
▽旧制大阪府立市岡中学、予科練、立命館大学予科を経て▽昭和26年旧制立命館大学経済学部卒業
▽三油興業株式会社取締役
〈好きな言葉〉人よりも一歩努力

対岸へは迂回航路も

川崎文治

私は大正六年（一九一七年）生れ。父は明治二十八年（一八九五年）生れであった。昨年大往生したが、身体も心も大きかった。しかしその割には細心なところがあり、九十年の間、近所の人からは通称「大将」といわれていた。

いろいろの想い出があるが、私が東筑中学を卒業して一年間東京で浪人をして、東京商科大学予科（現一橋大学）に入ったのは父の助言によるものである。入学試験の二ヵ月前位までは父も私も現在の東大（一高）志望ときめていたが、その後何かと調べたり聞いたりしたのであろう。大げさに喜んではくれなかったが、心中安堵はしたに違いない。

ところが当時の一橋では、簿記は勿論、ソロバン（四っ玉をはじめて開発した川村寛治先生が直々に教えられた）や習字などが必修となっており、東京での青春時代をロマンチックにあこがれていた私にとっては意外な現実であった。しかし何とか一年は過したが、二年目になって、私はこれからの自分の道ではないと思いつめて、当時いろんな点で熊本の第五高等学校へ入り直そうと決心し、改めて受験参考書などを買い込んだ。

ところで一橋の方は退学届を出さねばならない。それを書いたのはいいが、保証人としての

父の印が要るというので早速右の事情と共に父へ郵送した。ところがである。歌の文句ではないが、印は来ないで父が飛んで来た。そして旅館の一室で殆んど徹夜して話し合ったのであるが、その時の一言が私の運命をきめたといっていい。名前は忘れたがある名僧の言に曰く、「川でも大きな湖でも、向う岸に渡ろうとする時には、直線距離を行くのでなく、必らず風向きや流れを考えて迂回するものである」と。いわゆる直情経行を戒めたものである。

私はすぐには納得いかなかったがそれだけ言って帰った父の一言を反芻しつつ、学資を出してくれる父へ報いる気持もあって、結局退学を思いとどまったのである。

その後どこだったか忘れたが、友人達と観光の折に川を渡ったが、船頭さんが真直に渡らず、岸に沿ってムダな様だが迂回した時、ああこれだなと独り感慨にふけったものである。

年長者の言には聴くべきものが必らずある。

川崎　文治　大正6年6月17日生　福岡県出身
▽昭和17年9月東京商科大学卒業▽軍務、三井化学工業株式会社を経て▽26～28年九州大学大学院▽28年より久留米大学、長崎大学、大阪市立大学（商学博士、名誉教授）、山口大学を経て▽56年より北九州大学、59年7月15日より同学長、現在に至る

酒は飲んでも呑まれるな

川崎安太

父は四国・香川県の小豆島に生れ、幼年期を過した関係もあってか、信仰心が厚く、私達がもの心ついた時から、朝、神棚と仏壇に火のともらぬ日はなかったし、正月の三社詣で、盆の墓参りは一度も欠かしたことがなかった。

小豆島には島四国と呼ばれ、弘法大師が開場したと言われる八十八箇所の霊場があり、春や秋には大勢のお遍路さんで島中があふれる程であったが、私も幼稚園の頃、父母に連れられ大分より船で小豆島に渡り、お遍路参りをし、大変に疲れた思い出がある。父は十七歳の頃、二十三銀行本店（今の府内会館）の建築工事の為、この大分の地に来てから、大分の人になりきり、大分出身の母と結婚したが、生涯の間一年に一度は故郷を訪れる事を忘れた事がなかった。

父は生来無趣味というか、仕事をすること、特に工事現場の視察に生き甲斐を感じ、その疲れをいやす晩酌の酒二合に無上の喜びを味わっていた。家庭生活の中や、職場に於て、常に好んで用い、また、自らも実践していた言葉を拾い出して見ると、「相手の気持になってみよ」、「人様に迷惑をかけるな」、「和」、「誠実」、「信用」、「責任感」という言葉だろうか。特に酒の席でグダをまいたり、酔いつぶれたりする人が居ると、「酒は飲んでも呑まれるな」と厳しい

注意。快く楽しい気持で適量飲んでこそ、酒は百薬の長となる、とよく言った。この幾つかの言葉に代表されるように、派手な事や、狡(ずる)いこと、いがみ合うことが大嫌いな性格で、機会を見つけては親族、会社の従業員、友人、知人を我が家に大勢呼び集めて酒をくみかわし、快く語らい合うことが何よりの楽しみであった。お陰で母はその設営に大変苦労をした様だ。

父は仕事以外に趣味を持たない人と申し上げたが、甲子園野球と、大相撲の放送だけは熱心に見たり聞いたりしていた。野球は私達兄弟三人共少年野球に出場していたし、特に兄は大分工業時代、投手として甲子園出場をかけて善戦したこともあり、一投一打に全力を出し切る甲子園野球に強い魅力を持ち続けた様である。相撲は大分県出身の双葉山の出現がその心をたぎらかせたせいではなかろうか。

川崎　安太　大正14年9月20日生　本籍　大分県
▽旧制大分中学、熊本幼年学校、陸軍士官学校を経て27年明治大学商学部（旧制）卒▽三菱鉱業㈱に八年勤務の後、35年株式会社佐伯建設に入社。昭和58年より同社社長
〈好きな言葉〉敬天愛人。真心（まごころ）

尻をふけ！

上林幸生

祖父の政治道楽で文字どおり井戸塀になったのが、父の二十歳と聞いている。

以来、丁度五十年間、父は働きに働き、走りに走って六年前に慌しく逝ってしまった。

子供の頃から、父が何かに駆り立てられるようにせかせかと動きまわるのが不思議でならなかったし、物心がついてからは、仕事に対する厳しさや激しさに畏敬の念を覚えるようになった。

激しさの中で、「尻をふけ！」という怒号が今でも耳の片隅にはっきりと遺っている。

余り品のある一言ではないが、私には一番こたえる言葉だった。

なにごとにも中途半端で、しめくくりの出来ない私に「自分の尻をふけない者は一人前ではない」と、事ある毎に喧しく言われてきた。

結果のよしわるしは余り問題にせず、最後まで全力を尽くしたかどうか、物事のケジメをつけたかどうかを問い質され、言い訳などで繕うものなら、たちまち雷が落ちてきた。

「終り良ければ全てよし」の言葉どおり、後始末の出来ない者はどんな立派な計画を持っても駄目だと、日々の仕事を通して教えられた。

「尻をふけ」ということは、自分のしたことに「決算書を作れ」ということであり、生来、意志の希薄な自分が、半端な妥協をしたり、安易な方へ流されるのを戒めるための言葉であると広義に理解をしている。

人のお尻を洗いたいなどと、便利なものが売られているが、人生最後の尻が立派に自分でふける様に、身も心も引き締めて生きて行きたいものである。

上林　幸生　昭和14年3月30日生　本籍　福岡県
▽昭和37年3月同志社大経済学部卒、家業の上林産商取締役、父経営の不動産賃貸業を継承▽54年九州ビル興業㈱代表取締役に就任、㈱三幸冷凍、㈱たる善各取締役会長、上林産商㈱取締役

細い橋

北田光男

父は若い頃、故郷の八代を出て大陸に渡った。妻とまだ小さい二人の子供を連れてである。満州はまだ夜明け、特に首都新京は日本の国策に沿った計画都市で、見事な広い道路が伸び、至るところに青い森が、美しい丘が広がっていた。

満鉄に入社して十五年余り、技術者であった父は、独立して小さいながらも自分の城を持った。それが冷暖房工事の北田工務店である。需要と供給のバランスが取れれば事業は面白いように飛躍するもので、父はあっという間にその大道に躍り出ていた。

新京郊外に延々と広がる社宅街、煙突を連ねる工場と並んで華麗なビルが、高層建築が、ホテルが……。新京特別市は、まちに文化の香りが空高く舞い上ったのである。だが、父はその絶頂の時にもう微かなかげりをみていた。都市化の完成の次は放出であることを。父はその築き上げた全てを投げうって、地方都市通化へ思いきった脱出を試みたのである。

もう軍靴の音も高まって王道楽土の旗印も急速に怪しくなって来た時である。

まだ匪賊の噂さえちらちらする避地の通化に美しいホテルが、白い窓が誕生した時、父は目を細めて言ったものである。

「中国の人達はどうしてこんなに心が高いのだろう。おれは教えられることばかりだ。光男、このホテルはお前達子供の為に造ったのだが、今は中国の文化のひとつにこの竜泉ホテルが、その外交の場になればとも思っている。」

昭和十六年、竜泉街の小高い丘の上に建てられてから終戦まで僅か五年、ホテルの命は余りにも短かかったが、その望んだ成果はそれなりにあったと引揚げた後、父はぽつりと言った。

「中国の人達を沢山泊めたし、中国の友達も随分と出来たからな。だが、やっぱり小さい橋、いや細い橋だったのかなあ。」

その細い橋を中国にかけた父は、それから二十年後そのホテルに思いを馳せながら他界したが、生涯教訓めいたことを一度も口にしなかった。だが父は、常に態度でその全身で生きる道を自分の子供達に語っていたような気がする。

北田　光男　大正3年3月21日生　本籍　熊本県
▽昭和12年旧巣鴨高商卒▽昭56年㈱ベスト電器取締役社長
〈好きな言葉〉天は自ら助くる者を助く

空気のような父

君原健二

自分は父親からどんな薫陶を受けたか ― 随分時間をかけて考えてみたが、思い当る言葉が全く浮かばない。理由はいろいろ考えられる。私自身が健忘症で忘れてしまった。あるいは、私が反抗心が強かったので、父親を無視していた。もう一つは父が薫陶らしいことを言っていない。そのいずれかであろう。父はおとなしく、口数が少なかったことを考えると、三番目の薫陶の言葉を言わなかったとしか思えない。

私は年子の五人兄弟の三番目であった。戦後の混乱期は育ち盛りで、食物の分配等で感情をむき出しにして兄弟けんかをした。そんな時も、何故か父から怒られた記憶がない。

二児の父になった私は、父の血をひいてか無口で、また直情径行型ではない。しかし、永年スポーツを行っている間に、子供は「厳しく育てたい」と思うようになった。そして「他人に迷惑をかけてはいけない」という信念から、他人に迷惑になっていると思われることがあると、息子が幼い頃から、人前でもよくたたいたものである。

私は最近、そのことを深く反省している。当時の私は、自分の立場から一方的にしか判断できずに、自分の主張を通した。息子の行動には、私には分からない、それなりの理由や背景が

あったかもしれない。目の位置一つにしても、私の見える視野と息子の見える視野は随分違っているはずである。その息子の立場に立って見たり、どうしてそのような行動をしたのか深く考えず、いや応なく自分の考えを息子に押しつけた。

父に対して、私は恐しさも、頼もしさも、憧れも感じなかった。今考えると、こうした刺激的印象を受けなかったことは、父親から特別な価値感の枠をはめられなかったことであり、かえって自分自身を自由に伸ばすことになったのかも分からない。

父は、私に存在意識さえ感じさせない空気のような存在だった。生きていく必要に欠くべからざる空気の役を果した父に、有難く感謝したい。

君原　健二　昭和16年3月20日生　福岡県出身
▽昭和34年戸畑中央高校卒、八幡製鐵株式会社入社
▽37年朝日国際マラソン出場、東京オリンピック八位、メキシコオリンピック二位、ミュンヘンオリンピック五位、ボストンマラソン、アジア大会など優勝

へこたれたらだめですよ

木村照彦

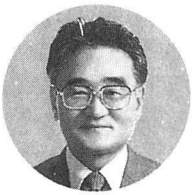
「何をやってもいゝから、その結果には責任をもたなくてはいけない」。これが父の生活規範の一つであったように思へます。談たま〳〵このことに触れた時、同席していました従弟が「叔父チャンそれは大変きびしい」と批判しましたら、やおら「そりゃそうじゃ、自由とはそんなもんじゃ」と自分の説を強く言い張ったことを記憶しています。このように自由を愉(たの)しもうとした父の生涯でありましたから、私共にもあまり教訓じみた教えはなかったように思えますが、あらためて今、父子の対話を時を追って顧みますと、私の現在の行き方、考へ方に影響を与えているいくつかの言葉に行きあたります。

戦後間もない頃、庭に遊ぶ雀の群を指さして「食うだけならあの雀達も食っていっている。人は自分が食い生きて行けばいゝものではない」と語りかけて来ました。この言葉など私を導こうとしたものでありましょう。現今の飽食の時代であればともかく、空腹をいかに満たすかと人々は悩んでいた時代でありましたから、直ちには理解出来ぬ言葉でありました。

人が一生を生きる道程においては、困り苦しみ、判断に迷うことは幾度であります。ある時、私も判断に苦しみ、夕刻、父に相談に参りましたら、父の申しますに「色々のことはあらうが何事

もへこたれたらだめですよ。昌子（愚妻の名）が待っておろうから早く帰って食事をなさい」という一言でありました。私にとっては何の相談の相手ではありません。全く冷たい言葉でありました。しかし、時と共に、時に応じて暖かく、あるいは極めて熱く私に力づけ励まして呉れる父の一言であります。

へこたれたらだめですよ――今も耳朶に残る父の言葉であります。



木村　照彦　昭和2年3月9日生　本籍　福岡県
▽昭和26年九州大学工学部機械工学科卒業と同時にエトナ・ジャパン株式会社に入社、30年父の事業に参画する為退社▽昭和42年株式会社山城屋社長▽昭和45年父死去に伴い父の社会への報恩の志を果たす為財団法人木村奨学会を設立、理事長

父の一喝のおかげ

工藤憲男

思春期の男の子にとって父親は敵対心をかき立てる存在である。父はわたしのそんな感情を全く寄せつけぬように、豪然と巌のようにわたしの前に立ちはだかっていた。晩年にはわたしの帰省を母以上に待ち望み、あわただしく立ち去るわたしを淋しそうな目で見送るようになったが、壮年期にはほとんどわたしにかまけてくれるようなことはなく、父に連れられて参詣したことは一回しかなかった。

父は今で言うなら企業家であって、農業をしながら精米業をし、周辺からかつがれて劇場経営までしていた。一次と二次と三次産業を兼営していたといえよう。精米業は手伝わされなかったが、農作業と興業は手伝わされた。夏の草取りが一番苦しかった。稲刈りと麦刈りは一人前の百姓に負けぬほどできた。興業の方は警察への届け出、ポスター張り、フィルムの輸送、税務署申告などがわたしの仕事であった。

受験勉強の追い込みの時期になって、農作業の手つだいをしぶったわたしを父が一喝した。

「勉強せな上がれんような学校に行く必要はないッ」

他の受験生の親に比べて何と冷酷な父だろうと、腹が立った。ライバルの半分の時間しかな

いと思うので、自然にわたしの集中力は高まった。時間に余裕のある日曜日などは反って勉強がはかどらぬほどになった。わたしが当時難関であった旧制高校に四年では失敗したが、五年で合格できたのは父の一喝のおかげと感謝している。

そして、その時は意識しなかったが、父の言葉には人生の教訓が含まれていた。家事の手伝いをした残りの時間で勉強することまで父は禁止しなかった。無理な勉強は永続きしない。少し余裕のある歩き方で人生を歩き続けることが、死ぬまで歩き続けられる生き方であると父は教えてくれた。

父は死ぬまで歩き続けた。若い時にあれほど憎んだ父が今では涙が出るほど恋しい。

工藤　憲男　大正15年　香川県白鳥町に生まる
▽昭和25年京都大学理学部卒▽川岸工業㈱専務を経て
現在川岸興産㈱専務、日本経営士会経営士、北九州経
済社主幹▽著書「冬の稲妻・吉村重喜伝」

人のために働く者は食いはぐれがない

栗岡博良

昭和五十八年一月二十九日、父は七十三歳でこの世を去りました。もっと長生きして欲しかった。私は常にそのことを考えるのです。私はある意味に於て、私の成長をいついつまでも見守ってくれるのは、父であると思っていたので、父を安心させること、また自慢出来る仕事が出来ることが、私は親孝行であると思っていました。その父を失くして私は「張り」を失なったのも事実です。

しかし、私には三人の男の子が居るのですから、「張り」を失なった、などとは言っておれないのです。子供たちのために、私が父から学んだ「何か」をまた受け継ぐ仕事があるように思うのです。私の人生の根底に流れている「何か」は、やはり父の教えであると思います。

男親と子供の関係は、誰もがそんなことかも知れません。しかし、父から学んだことは、父が生涯自分の人生を正しく、教育者として生きてこられたことが、子供たちへの教えであったのではなかったかと思います。言葉で「お前は人さまに迷惑をかけるなよ」とか、「悪い事は、するなよ」とか言うのではなく、父の人生を通じて、自分が見られている姿で、子供たちに教えていたのだと思います。それだけ、自分に厳しく生きてこられた人であったと思います。

父が私たち息子二人に、常に考えていたことは、人のために働ける職業を身に付けさせる事と思っていた。高等学校を卒業する時、「お前は手先が器用だから歯科医にでもなったら」と言われた。兄は医師として、私は歯科医として、人のために働けることを希望していたのは、父であったと思います。父は常に「人のために働らいてさえいれば、食いはぐれがないのだ」と言っていた。私たちは父の教えを守り、一生懸命に世のため、人のためになる仕事をさせて戴いて、毎日、感謝しています。

父が、無言で働いていた姿、何げない一言一言が、私のこの人生の土台になっていると思います。

栗岡　博良　昭和12年7月15日生　本籍　大阪府
▽昭和41年大阪歯科大学大学院卒、歯学博士号授与
▽42年医療法人和幸会　阪奈サナトリウムを四条畷市上田原に設立▽46年阪奈産業株式会社設立取締役社長に就任▽53年阪奈中央病院設立、同年8月医療法人理事長に就任▽58年6月社会福祉法人幸友会理事長に就任▽59年4月特別養護老人ホーム設立

誠実・誠意・真実

小林　滉

戦後生まれの私に、父の厳しさは尋常ではなかった。

私の家は、江戸時代は堀田藩（現在の千葉県佐倉市）の武士で、明治になって曾祖父が軍人になり日露戦争に参加、祖父も陸軍士官学校出の職業軍人だった。こうした家で、大正四年生まれの父は、当然のことと陸軍士官学校に入り、職業軍人になったという。日中戦争に参戦して、陸軍少佐、陸軍予備士官学校の教官をしているとき終戦になった。このように私の家は、父まで三代続いた職業軍人、病死、敗戦など最後の機縁は違ったが、三代続いた陸軍少佐だった。

こんな家系のせいもあってか、父は妥協を許さぬ完全主義者で、四人きょうだいの中で男の子は私一人というのも父の集中砲火を浴びることになったのかも知れない。言いわけ、口ごたえは一切無用、どうして殴られたのかも分からないほどだった。

父の考えは、人間は国家や社会との関連で個人を位置づけ、その座標軸に個人の目標をおいて、「現在の自分の価値と尊厳を自覚する」ことが人生の基本ということである。従って、勉強や仕事も、「務めだから務める」。そして、長い人生には何箇所かの関所がある。この関所はごま化しでは通れない。正々堂々と人生の関所を通る努力をすることが、人間としての務め

であるという考えである。

こんなストイックな父ではあるが、私は中学時代は短距離と相撲をやり、高校、大学時代は柔道（四段）に打ちこめたのだから、けっこう、子供の尊厳を認めていたのかも知れない。

大学を出て父の会社に入ってからも落雷の連続だったが、最近になってようやく父の考えが理解できるような気がする。どんなことでも、徹底的に理を追究せず、「それくらいでいいじゃないか」という安易な判断や、一切のムダを嫌い、なにごともしっかり考え、きちっと折り目をつけること。そして、事業も人間も誠実・誠意・真実が財産であるということを学んだ。

六十二歳で失盲した父は七十一歳のいまも毎日、会社に出社している。

小林　滉　昭和22年7月31日　北九州市出身
▽昭和45年3月同志社大学商学部卒業、大光炉材株式会社入社▽51年10月同社副社長
▽56年9月同代表取締役社長、現在に至る

戸上山不動、白雲去来

是則宗興

父は大分県の田舎、宇佐郡院内の出身で、生来山に親しみが深かった。

戸上山は門司を代表する山で、標高約五二〇米。頂上からは大里市街を一望のもとに収めることができる。父がこの戸上山麓の神社に奉仕することになったのも何かの因縁かもしれない。

あれはたしか私がまだ中学生の時だったから昭和二十四、五年頃のある日だったと思う。

「戸上山動かず、白雲去来すか」と父が誰に言うとなく呟くのを耳にした。その後一度紙に書いて見せてくれたので私には忘れられないことばとなった。

「自分の奉仕させていただいている戸上神社の鎮まります戸上山は確固不動だ。ただ有象無象の諸現象のみが白雲のように現われては消えて行く」と言う意味であろうが、移ろい易い人の心、変わり行く世にどこまでも中庸を保って立ち向かおうとする父の信念と戒めのことばであったわけだ。

終戦後の擾乱の世に、戸上山をバックボーンとして処して行った父の気持、それは聊か文学的かもしれないが、何となく磐梯山の姿に象徴される野口英世や、「ふるさとの山はありがたきかな」と詠んだ啄木に通じる点もあるように思う。

父はまた、「幾そたびかき濁してもすみかへる水は皇国の姿なるらむ」という八田知紀の歌が好きで、日本の国はどんなに乱れてもいつかは必ず国の本道にもどると力説していた。変化するものと変化しないもの、そこの認識をはっきりさせて常なるものを見失うまいと心掛けていた父の姿勢が懐しい。

戸上山は今も泰然自若として大里の移り変わりを見守っている。その心を体して私も神明奉仕をつづけたいと思っているが、最近の世の変化の凄まじさ。コンピュータの誣歌、行政改革教育の改革等々まことに賑々しい。

もしおやじが今生きていたなら目をぱちくりさせることだろうが。それだけこのことばの重みが感じられてならない。

是則　宗興　昭和11年3月20日生　本籍　福岡県
▽昭和33年国学院大学文学部卒
▽高等学校教諭を経て昭和48年戸上神社宮司
〈好きな言葉〉人生意気に感ず

無理するな

近藤　貢

戦時中、「特甲幹」に志願しようかと相談した時、「どうせ征く時は、征かねばなるまいが、無理するな」と云われた。

入隊即戦死の時代である。兵隊に急いでいかなくてもという親の心が、それとなく伝わってくるような感じであった。おかげで二十年には現役入隊したが、すぐに終戦、大した苦労もせずにすんだ。

子供の大学受験の時には、「うかるところを受けよ、うからんところはうからんぞ。無理するなよ」といいきかせた。

二人の子供からは大反撥を受けたが、気楽に受験できたのは確かであったようである。長男の同級生が浪人中に自殺した。B大なら自信があるといっていた彼が、親から、先生から何のため浪人したんだ、もう一度A大を受けろとハッパかけられ、ノイローゼ気味だったとか。親としてドキッとさせられる話である。

とかく、かどの立つことの多い世の中、ままならぬ世の中である。無理して後悔することの

ないようにしたいものである。

近頃、何だか親爺に似てきたなと思う時がある。

近藤　貢　大正15年2月6日生　本籍　福岡県
▽門司中学校から鹿児島経済専門学校を昭和22年に卒業。同時に九州女子学園教諭となる▽43年に同校校長、53年に理事長、福岡県私立学校審議会委員も兼ねる

ふんどしゃかゝでも
義理欠いちゃならぬ

榊原重男

はるか東に赤石連山を望む南信州の飯田市郊外の生家は、私の少年時代は養蚕を中心にした農家だった。春夏秋と、年三回の蚕の最盛期になると、蚕室を含む三百坪位の建物の殆んどが蚕に占領されてしまって、人間は小さくなって寝る位だった。

その頃の養蚕家の忙しさは、今では信じて貰えぬ程だったが、そんな中でも父は実に義理固く生きてきた人だと言われていた。

「褌は男の大切なものだが、たとえその褌を買うゆとりがなくても義理を欠いてはいかんぞ」

これが祖父の時代からの家訓の一つだったらしい。

義理を敷衍（エンラージメント）すれば、礼儀・信義にまで係わってくる。社会生活上の根ッ子の問題でもあろうと思う。ムラ意識が義理意識を高めたであろうことは容易に想像がつく。

幼な心の記憶にも鮮やかなのは、五人の娘（私の姉達）の嫁ぎ先に対する五節句の義理やら隣近所の冠婚葬祭、村の行事に至るまでの父の義理の盡し方だった。自分の子供から来た手紙にも必ずていねいな返事を書く父だった。

私も比較的多く手紙を書く方らしい。返信も含めると月平均五十通は超すが、これも「親爺

の一言」とその性格に影響されていると思う。大分以前から感じている事であるが、忙しい人とか、社会的地位の高い人の方が返信をよく呉れる。たとえば、階級のハッキリしている昔の軍人の場合など、上はかつての陸軍大臣、参謀長から佐官級の人までは必ず返信がある。それは「義理固い」という表現が適切かどうかは別としていつも私が感じ入ることの一ッである。

手紙を書くのに、私は決して義理で書いているつもりはない。書かずにいられない気持とか感謝の心が先に立って書くのであるが、当然書くべき返信も書かなかったら、結果的には義理を欠いたことになると思う。

日本のヨコ社会に在っては、分を弁えた、薄すぎず、厚すぎずの義理を果してゆく心くばりが、地域社会にもビジネスの社会にも必要な潤滑油ではないだろうか。

ふんどしも締め、義理も大切にして生きてゆきたいと希っている。

榊原　重男　大正6年11月飯田市生
▽昭和18年陸軍航空士官学校卒業▽昭和23年株式会社前川製作所に入社、昭和56年代表取締役副社長に就任。関連五社の取締役、朝霧ジャンボリーゴルフクラブ副理事長他兼務。
著書『ノモンハン桜』

働らかざるもの食うべからず

坂本　薫

私は広島市より呉線に乗り三十分程海岸線を走った環境的には、非常に恵まれた安芸郡坂町横浜で生れ育ちました。

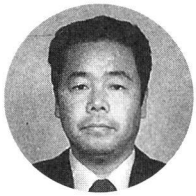
少年時代の楽しい思い出は、正月のどんと焼き。どんとの飾りは、高さ十米位に藁を積み上げ櫓を組み、其の上に各自の今年の願いごとを短冊に書きしるし、藁たばに年男が火をつけ、大きな竹ざおに鏡餅をはさんで、其の火で焼いて食べれば、今年は無病息災といわれます。

この厄払いの行事にはじまり、竹馬遊び、春先きのめじろ取り、釣り、あさり掘り、夏の海水浴、秋には裏山の赤松林をかけ廻って松茸取り。すべて手づくりと自然を相手に工夫しながら遊んだものです。稲刈りが終れば、いのこ廻りと言って、赤鬼、青鬼が今年の豊作を祝い、其の家の繁栄と家族の無病息災を祈った行事もありました。一年を通し、色々な行事、子供ながらの素朴な遊び等おそらく今も残り続いているものと思われます。

私の父は、子供みたいなお人好しの反面、頑固者。自分の信念、信条を貫き通す人で、子供のしつけには厳しく口喧しい人であった。父親の口癖は、子供は勉強が仕事。勉強もしない、父母の言うことも聞かん子供には、めしを食わせるな、というありさまでした。

この様な父親の教えを受け、てんぐ屋坂本佐市氏の養子に入りました。先代坂本社長は何事にも徹底した信念の持主で、例えば礼儀一つとっても挨拶の仕方が悪いと部屋に入りなおさせられたものです。又、なによりも仕事優先、然も仕事の段取りには口喧しく言われたものです。残すものには給料をはずむが、使うものには給料をはずまない。これは無駄使いをたしなめると言う意味。又、お金のことは親子兄弟でも別。同居すれば家賃を払え、食事をすれば食費を払え。これ等は、あまえの精神の排除。少々極端かも知れませんが、日々生活の中で絶えず聞かされ、実行させられました。

この様な環境の中で育った私も、父親ゆずりの頑固者ですが、社長就任後、今は亡くなりました父親、先代社長の教えを大きな財産、座右の銘として、一にも二にも仕事本位で、寝具を通じ社会にご奉仕する所存でございます。



坂本　薫　昭和11年11月19日生　本籍　福岡県

▽昭和32年西南学院高校卒、株式会社てんぐ屋入社

▽昭和44年2月取締役社長就任、現在に至る

▽関連企業㈱天狗屋ビル、㈲坂本総業、福岡産業印刷㈱、各取締役社長

〈好きな言葉〉信念の前に不可能なし

楽しみは耐えることから

佐藤好助

私には二人の〝親父〟がいた。一人は少年期まで、もの静かに成長を見守ってくれた実父、もう一人は水泳界の名伯楽と呼ばれ、青春時代に明日への希望と情熱を燃えたぎらせてくれた恩師・黒佐年明氏である。

実父は建設業、母は飲食業を営み、私は七人兄弟の四番目として熊本県八代市で育った。海や山、川など自然道場を相手にのびのび少年期を送った。父母とも働き者で多忙だったので、子供七人はほとんど自由放任に育てられた。

父と母はよく口論した。勝負は口の達者な母が押し切っていた。父はただ「こんおなごは、なんば言いよっとか、黙っとれ！」と一喝するだけだった。そんな父がなさけなく思えた。しかし、「男は黙って、何事もやり遂げにゃ」というのが口ぐせで、不言実行型だった。だから少年期までは父の感化を受ける余地はほとんどなかった。

人間としての成長期に、最も影響を受けたのが水泳の鬼コーチでならした黒佐年明氏である。18歳のときである。出合いからずっとコーチと選手という間柄を通り越し、父と息子同然のような裸と裸のつき合いが続いた。猛練習で泣かされたが、人間的にもビシビシ鍛われた。酒の

飲み方も教わった。一心同体でオリンピックを目指したが、練習量とカロリー摂取のバランスを考え、「給料もらったら、オシャレする前にまず喰え」というのが師の説法の一つだった。

実父と黒佐氏とに類似点があると分析したのは、ずっと後のことである。それは「人生の楽しみは耐えることに始まり、耐えた苦しみは、やがて健やかな喜びに変わる」という黒佐氏のモットーを聞いたときである。

この言葉が、変化のないスポーツの水泳に影響を及ぼし、いい結果につながったのかもしれない。幼年期から成年期に二人のオヤジの生きざまを見て、自制心、耐性、克己の大切さを知らされた。実父は老年期に自転車で転び両足を折ったが八十六歳で健在。もう一人のオヤジ・黒佐年明氏はガンとの戦いに耐え続けたが、もうこの世にいない。

佐藤　好助　昭和17年8月3日生　本籍　熊本県
▽昭和36年熊本県立八代高等学校卒、八幡製鉄所入社
▽37年1月豪州・ニュージーランド遠征で四四〇ヤードメドレーリレーで世界新記録樹立、38年10月東京国際（プレ五輪）一〇〇、二〇〇㍍バタフライで優勝、39年東京オリンピック出場・一〇〇、二〇〇㍍同種目で日本記録樹立▽水泳部監督を経て現在同部幹事長
〈好きな言葉〉克己復礼

満足は腐敗なり

四島　司

父、四島一二三は、明治人の気骨を持ちつづけ、信念の一生をおくりました。私が徹底して反抗した時代もありましたが、父の目から見れば、未熟な息子が掌の中を走りまわっていただけだったのかもしれません。

独立独歩、反骨精神で貫いた父の一生は、福岡相互銀行を戦時中の合併からまもりぬきました。当時としては、命をかけた反抗でしたが、父のおこした銀行を引きついだ私には、いかに父がこの銀行を愛したか、その決心がいかに貴重なものであったかが、ひしひしと感じられるのです。

父は無類の格言マニヤでしたが、そのエキスを生前につくった墓碑に彫り遺しています。

祖先に対する最上の祭りは
道を守り業を励むにあり　（正面）

希望なきは死なり　満足は腐敗なり
勇気なきは精神的死者なり　（東面）

自分の格言を、決して人にも息子にも課さなかった父の遺した言葉が、この頃はずしんと心

におちてくるのを感じます。父は、私にとって、大きな存在でした。

四島　司　大正14年1月1日生。福岡市出身
▽昭和24年慶応義塾大学経済学部卒業▽26年福岡相互銀行入社▽44年5月同行社長就任
▽全国相互銀行協会会長、福岡商工会議所副会頭、在福岡イタリア共和国名誉領事

賭け事に手を出すな

篠原治二

他人の趣味嗜好には口を差しはさまない主義だが、賭け事だけは嫌いである。「バクチには手を出すな」。幾度となく聞かされた父の言葉が幼な心に焼きつき、成長したせいだろう。

私は新聞記者にしては、マージャンが出来ない珍らしい人種である。くやしまぎれに「僕はジャーナリストであってマージャニストじゃないヨ」と言ったりする。

その代り酒は飲む。おやじは酒については何も言わなかった。決して崩れることなく酒をたしなむ方であった。ところが、こちらは飲めば高歌放吟、父親には似ても似つかない。

町のどまん中で商家を守っていた父は、商売道の掟としてソロバンをとても大事にした。五っ玉のでかいソロバンであった。いたずら盛りのころ、ソロバンを裏返しにし、廊下の端から端へ転がしたりすると、容赦なくげんこつが飛んできた。職人が道具を〝宝物〟扱いにする気風が近年、薄れてきたことは残念である。

口数の少ない頑固おやじでも、子供には優しかった。小さいころ虚弱児童で、医者通いをしても病気がなおらないと、父は、こっそりと町はずれの地蔵さんに願をかけに行った。霊験がいまごろ効いてきたのか、私は丈夫である。

反抗期のころ、不粋な父は、何んとなくうとましい存在であった。母の方は、高等女学校から師範学校を出て商家にとついできただけに、はるかに包容力があった。男尊女卑のおくに柄で、父は、その母に対し威張っていた。

一転、父が気弱わになり、子供たちとも胸襟を開いて語り合うようになったのは、母が脳いっ血で急死してからだった。私は、突っぱって生きてきた男の寂しさをその背に感じ、初めて親しみをもった。

一九六五年、私は内戦下のラオスと東北タイに特派された。そのルポルタージュの記事が新聞の一面を飾り、郷里の父は一日に何回も天眼鏡を取り出し、伜の記事を飽くことなく読んでいたという。初めての海外取材のみやげ話をしに帰郷しようと約束していたのに、父はその機会を待ち切れないようにこの世を去った。

篠原　治二　昭和6年3月31日生　本籍　鹿児島県
▽昭和28年明治大学法学部卒▽毎日新聞社社会部記者を経て長崎支局長、福岡総局長、報道部長を経て▽現在西部本社編集局長兼論説委員。
著書＝「えんぴつ巷談」他
〈好きな言葉〉和して同ぜず

流れに逆らうな

菅田義秋

健康に有用とすすめられて、十数年前から錦鯉を飼っている。朝、起きるとまず庭を一巡し、それからひと時を鯉に興ずる。今ではその習慣がすっかり身について、十数年来の日課となった。お陰で、いまもって体調もすこぶるよい。

現代の世の中は、早いテンポで流れは絶えず変化してゆく。「日進月歩」どころか、その勢いはまさに「秒進分歩」といった感がある。したがって、情勢の変化を機敏にとらえて的確な判断をすることが、激動の時代を生きぬく要諦といっても過言ではあるまい。

だからこそ、手前ミソではないが、少しの時間でも雑念を忘れて心のゆとりを養う自分なりの領域を、生活のリズムの中にとりいれる大切さをしみじみ感じるようになった。

私の父は、どちらかといえば無口のほうで、多くは語らなかったけれど、義理人情に厚い律義なところがあった。世渡りも堅実だった。だから私が事業を創業しようとしたときも、「お前にはそんな商売は向かん」と、強く反対した。しかし、私は挫けなかった。切々と自分の夢をうったえ、最善をつくして説得した。

やっとの思いで私の意志が通じ、「よし、わかった」と納得した。その時父は、「流れに逆

らうなよ。川というものは気象の変化によって増水するときもあれば浅くなるときもある。そのことをよく考えて大河を流れる如く渡れ。それが商売の鉄則だ」と言った。その言葉には異様なひびきがあり、いまだに耳朶に残っている。

時間には流れがあり、経済には波がある。それは自然の法則で、これに逆らうものは失敗する。だから、事業を行うには社会の動静を大局的に読み取っていち速く対処せよ。つまり、先見性の重要さを諭したものと思われ、何か今の時代を言い当てたような父の言葉に敬服する。

人は、誰にでもこころにひびくことばがあるだろう。私は、「流れに逆らうな」―このひと言に支えられて今日の人生がある。毎日、愛鯉と興じている寸暇といえども、このことばは片時も忘れることはできない。

菅田　義秋　大正8年10月29日生　本籍　山口県
▽昭和9年徳山実業実践学校卒。第三海軍燃料廠入廠
▽終戦後は山口県職員となり、賠償課・徳山県税事務所を経て昭和26年退職▽同年徳山興産を設立し取締役社長に就任、現在に至る
〈好きな言葉〉苦しいときは苦しさを分ち、楽しいときは楽しさを分つ

商売人になるなら他人のメシを喰え

杉浦一彦

私の父はつねづね「商売人になるなら、上の学校へ行くよりも、奉公して他人の飯をたべて苦労しての修業こそ、一人前の根性ある商人になる道だ」と言い聞かせていました。

父親の歩いた経験から、子供にも性根をもたせようと思ったことが、今になってわかる気がします。次男坊に生れた私は、田舎で本家（養父）のもとで育ち、尋常高等小学校を卒業後、志を抱いて農業をあきらめ、門司の実家に戻りました。大正十三年当時の門司は北九州唯一の港町で繁栄を極めて居りました。

私は田舎で育ち、初めて都会に出て見て、井の中の蛙大海を知らずのたとえどうり、高小卒程度の教育で何が出来るだろうかと、先ず感じ、おやじに一心に頼んだり、又すねたりして、やっとのことで福岡実業専修学校へ入学の念願が叶いました。この時の義兄の応援には感謝しています。通学のかたわら実業の日本社の発刊する実業講習録の通信教育で勉強、貯めた小遣いで初めて買った本が、増田義一先生の著書『青年と修養』『立身出世の基礎』の二冊でありました。その当時は余裕のある時代でなく、当時の青少年の考え方なり将来の設計が読書によって培かわれたのではないでしょうか。

どなたかの詩の一節に「樹、静かならんと欲すれど、風止まず。子、養わんと欲すれど、親待たず」そのとおりだと思います。

追想を重ねながら目につく応接室に掲額してある教育勅語の一言一句が、過去の思師の教訓でありました。おやじの一言が今日、自分の責任時代になって、どれ程信用面、或は、取引きの上に大きくプラスになったかを、改めて親に感謝すると共に親に尽せなかったことが心残りであります。現在の事業が、如何に時代の流れと共に厳しい変革があろうとも、商人として、一片の温かさと、信義をもって、初心を忘れず、大衆のニーズに沿った本業の〝菓子〟で、流通業界の使命を全うせねばならないと思っております。

杉浦　一彦　明治42年8月3日生　本籍　福岡県
▽昭和2年福岡実業専修学校卒業、家業に従事、従軍。復員後菓子問屋を再開▽株式会社杉浦代表取締役▽九州菓子卸商業組合初代理事長▽昭和57年11月勲五等瑞宝章受章

恩を忘れるな

曽田傳重

私の故郷は神話の国出雲。小泉八雲で有名な松江市に次ぐ人口八万、農村都市の出雲市で、合併前の田園風景をそのまま残した町である。そもそも大社町に隣接し、田畑が出雲大社の社領であり、古来、絶大な恩恵に浴した土地がらの閑村であった。

私は故郷を離れて四十数年になるが、他国の方に故郷を問われる時、いつもこの出雲大社を誇らしく語るのである。

私の家は代々この土地の小さい地主であった。ゆくゆくは父の後を継ぐべく、安穏な少年時代を過していたが、あの敗戦により、父は公職追放となり、又一方、農地解放と、全くの苦境に立たされ、なすすべもなく、典型的な没落地主の道を辿った。私はやむなく終戦直後の大阪に飛び出してきた。故郷を去るに当って、日頃子供に無頓着であった父が「受けた恩は忘れるなよ」と一言、私に教えた。

爾来、都会生活四十有余年。数多くの方々の心温まるご指導とご鞭韃をいただき、大過なく今日を迎えているが、この間に受けたご恩の数々は年を経るごとにその重みを増してゆくのを感じている。

「恩を忘れるな」―この言葉を返せば「恩に報いよ」であろう。私は報恩の一端は、その方々に誠心誠意、盡すことだと思っている。

これに徹した時、「人は道を誤らず」、そこには必ず「幸せが訪れる」ことを確信している。

父は公職追放解除後、旧村民の皆さんの温かい支援を得て、市会議員を四期も勤めさせていただいたが、今は職を去り、愛着限りない近隣の方の庇護のもと、老妻と死別して五年。ただ一人心安らかに茅屋に余生を送っている。何分にも八十七歳の老齢、もの忘れがひどく度々失敗を重ねているようであるが、然し、選挙時に支援を得た方々の恩は忘れず、冠婚葬祭には、風雨遠路をいとわず杖を手に出かけている。「恩を忘れるな」の一言を自から実行しているようである。

曽田　傳重　大正11年2月16日生　本籍　島根県出雲市。
▽昭和21年立命館大学経済学部卒。▽昭和57年協和発酵工業㈱取締役退任▽現在千代田開発㈱取締役社長

余裕をもって仕事をせよ

高田　賢一郎

子供の頃の父親は仕事気違いで、家庭に帰って来ても口数は少なく、ただ、体中から殺気があふれていて、怖くて近寄りがたい父だった。

「男はその後姿で子供に教育する」といわれますが、その意味では、子供心に男は仕事に打ち込まなければならないんだ、と無言で教えられたと思います。しかし、日常生活で親子の対話は余りありませんでした。

むしろ、父の晩年、私が会社の専務になってから、後継者づくりの意味だったのでしょう、事業や人の育成等について話をする機会が増え、色々為になることが多かった。中でも、一番強い印象として残っているのは次の一言です。

昭和五十一年九月四日に父は脳溢血で倒れ、二十五日振りに意識が戻った時、私の顔を見て最初に言った言葉は「仕事は常に二分の余裕をもってやんなさい。余裕がなくなる程、自分の力いっぱいに仕事をしちゃいかん」ということでした。

私は最初、親父は自分には出来るが、まだ息子には出来ないこととして忠告しているんだなと思い、常に心に余裕をもって何事にも当るよう心掛けて来ましたが、昨今そうではなかった

ことに気がつきました。

弊社も一昨年はご多分にもれず基礎素材産業の低迷、それに伴う産業構造の大変革に対する適応が遅れ、会社業績が悪化して大変苦労していますが、その乗り切りに積極策をとり、無理を重ね、傷口を拡げました。この時の自分の心情を今になって反省してみますと、事業家として一番大事な心の余裕を失っていて、更にこのまま無理を重ねると肉体的にもダウンするのではないかと予感がしました。その時にハッと気が付いたことは、父の言葉の意味です。

息子にとってそびえ立って立派に見えた父親ですが、父が脳溢血で倒れた時は、二分の心の余裕が無くなる程忙しくしていたのだなということでした。父親としては自分が失敗したからこそ息子にいえた言葉であったのだ、ということが痛い程わかり、同時に怖かった父が非常に身近に感じられ、自信が湧いてくるのでした。

高田　賢一郎　昭和7年1月22日生　本籍　福岡県
▽昭和30年早稲田大学商学部卒業▽31年株式会社高田工業所入社、52年代表取締役社長就任。現在に至る

正道を行く

髙藤昌和

「めいふぁず」……これは中国語で「仕方がない。もう一度出直しだ」という意味の言葉です。昭和二十年、日本が戦争に負けて私たち一家が商売をしていた韓国の釜山市を引揚げざるを得なくなったとき、父がこの言葉を口にしたのを今でも良く覚えています。

当時父は四十二歳。父が創業した髙藤工務店は一時、慶尚南道でトップの完成工事高を誇るほど羽振りが良かった。だが、敗戦で何もかも失い、私たち一家はボストンバッグ一つで日本に引揚げることになった。

「くよくよしたって仕方がない。過去の栄光に引きずられていては前進できない。裸になってもう一度出直すんだ」

父は「めいふぁず」という言葉にこんな意味をこめて自分に言いきかせていたのだと思います。

当時私はまだ小学校六年生で幼かったが、この敗戦時の引揚げ体験で、営々と築いた事業や資産が一夜にして無に帰するのを目の当たりにして、「形あるものは必ずこわれる」という信念を強く持つようになりました。

土地、財産という〝モノ〟よりも〝人〟とのつながりといった〝無形の財産〟のほうがいざという時にどれだけ身の助けになるかわからない。日本に引き揚げてきた後も、給料もろくに払えないのに、朝鮮時代に働いていた人たちが大勢きてくれました。

まず何よりも人間関係を大事にしなければならないという信念を、父は身をもって私に教えてくれました。

父の後を継いで社長となり、ことしで七年目ですが、今も私は「おやじならこんな時どうするだろうか」と自分にたずねる。難しい判断を迫られた時や、心に迷いが生じた時など、父が私にさとしたひと言を心に思い浮かべて糧としています。それは結局「正道を行く」ということに尽きると思う。やるだけやって、それでだめならあとはきれいサッパリあきらめ、くよくよせずに前向きに対処する。これが経営の正道というものだと思っています。

髙藤　昌和　昭和8年7月3日生　本籍　大阪市
▽昭和31年3月立命館大学経済学部卒業
▽31年3月日本通運㈱門司港支店入社
▽33年5月髙藤建設株式会社入社、取締役総務部長、専務取締役を経て▽54年2月代表取締役社長、現在に至る

約束を守れ

竹村重利

徳山と岩国を結ぶ岩徳線のほぼ真中に位する熊毛町の片田舎で、伝来の「ならや呉服店」から父が大転身を図り、「竹村電気商会」に看板を変えたのは終戦直後の十二月であった。志願した航空隊から帰って来た次男と、何れ中支から復員して来るであろう長男をあてにしてのことと思うが、五十歳にしてよくぞやったと敬服するのみである。

商売は隆盛をきわめ、五年位で株式会社となり、働き者の両親と真面目一方の長兄、番頭さん合わせ十名足らずの所帯であったが、道楽者の次男は一向に仕事に身が入らず遊んでばかりである。入隊迄はハンサムな呉服屋の若旦那で、復員してからは特攻隊くづれの竹さんで手のつかぬ放蕩息子であった。

その次男坊があるとき商用で萩へ行き（当時はバスである）、大仕事をすませ意気ようようと湯本温泉に立寄り、山村屋でどんちゃんさわぎ、三日間も居つづけ集金した金を使いはたし、番頭さんに金を持って迎えに来てもらったが、ミイラとりがミイラとなり、またまた二人で大散財、とうとう仲居頭をつけ馬にタクシーで帰る。

父も兄も小言らしいことは何一つ言わなかった。十八やそこらで航空隊を志願し、死ぬのが

当然と思って居たのに敗戦となり、呆然として帰って来たことに対する思いやりと、そのうち自覚して仕事に身を入れるであろうと長い目で見て居たのだと思う。ただ口ぐせのようによく言われたことは、「人に迷惑をかけるな」、「約束は守れ」、「商人は嘘をついてはならぬ」であった。

十年位たつと、さすがに遊びにも飽きぼつぼつ真面目に取組むようになった。それでも遊びぐせはなかなか直らない。少しでも向上すれば良いではないかと開き直って居たが、三十五年頃父が悪性の病気にかかり療養するようになってからは目がさめたように仕事に看病にはげむ、父が三十八年に亡くなり、跡をついでからは大変心、仕事の鬼となる。

他人には迷惑をかけたことはないが、両親や女房にはずいぶん迷惑をかけ申訳ないと反省しておる今日この頃である。

竹村　重利　大正15年12月21日生　本籍　山口県徳山市
▽昭和18年岩国工業電気科卒直ちに志願追浜航空隊入隊▽竹村電機㈱　フジシステム㈱　㈲竹村商事各社長
▽西日本電友会々長、徳山商工会議所議員
〈好きな言葉〉鶏口となるも牛後となるなかれ

商人の道

田尻栄宏

父は商人の町大阪の立売堀に生まれ、九歳の時、道修町（大阪の薬品問屋街）の医療器械問屋に丁稚奉公に出され、永年商人の道について勉強し続けた人でした。

古武士の風格を持った父は厳格であったが反面、非常に情の深い所があり、まさに明治そのものでありました。

生活は質素で無駄をはぶき、合理的な考えを持っていて、自分自身に厳しい人生を送り、一筋に社業に打ち込んで、まさにチャレンジ人生でありました。

人間には誰でも見栄があり、人に格好よく思われたいとか、自分を大きく見せようとするものですが、そんな事には全く無頓着で、裸で人生を送り、自分自身に忠実であったと思います。

そんな父ですが、「商人の道」ということをよく聞かされました。

「目先の利に惑わされるな。長い損得を考えて商いをするように、コツコツと地味な努力を積み重ねよ」、「相手の弱味につけこむな」とか、「火事場泥棒のようなことをするな。相手が困っていたら速やかに助けるのが商人の道であり、正道を歩け」と教えられました。

反骨精神が旺盛で強い者には立ち向かって行きますが、義理人情に厚く、涙もろいところが

ありました。

私にとって人生の偉大な先生であった父も昨年亡くなり、失ってみて今更その重みを感じます。

これから商売をやっていって何か問題にぶつかった時、壁にあたった時、父ならばどんな方法を選んだか？どの道を歩いたか？ということを自問自答して正しい判断をやって行きたいと思います。

ともあれ、父の教訓「商人の道」を忘れず、これからの人生を送って行きたいと思います。

田尻　栄宏　昭和21年3月11日生　本籍　大阪府

▽昭和39年5月株式会社タジリ入社

▽52年11月同社取締役就任

▽56年4月同社代表取締役社長就任現在に至る

人のお世話をする人に

田中辰治

私は今でも私の父を大へん偉い人であったと尊敬しています。父は大政治家でも、大実業家でも、また優れた芸術家でもなく、平凡な一農民として一生を終わったのですが――。

慶応三年、父は山村（福岡県京都郡勝山町）に生まれ、十一歳で母を、十三歳で父を失って孤児となり、すぐ子守奉公に出され、十六歳からは下男奉公して働きました。こんなありさまですから、教育も寺小屋に二年通っただけと聞いています。明治十年頃は、学制ができて間もなく、学校教育も普及していない時代でした。

二十歳を過ぎて、空き屋になっていた実家に戻り、農業を営んだ父は、文字通り暁に星を仰いで野良に出、月影を踏んで帰る明け暮れの中で、私達四人の子供を立派に育て成人させてくれました。そして失っていた先祖の田畑も全部買い戻して、農業に励みました。

とにかく、父は――もちろん母も――よく働きました。私達子供が目覚めた時には、もうひと仕事すませて食事に帰って来ているという働きぶりでした。ある秋の夜、田んぼにゆらぐ灯りを怪しんで、村人がこわごわと近寄ってみると、狐火とみえた灯りは、なんと麦播きをしていた父の提灯の火だった、という話を近所の人から耳にしたこともありました。

こんな父も九十六歳で生涯を終えました。片時も休む暇もなく働く反面では、人にお金を貸しても、返してもらえぬ時など「とれない時はそれでよい。それほど困っているのだから……」と、あまり気にもかけませんでした。

父は子供の頃から身につけたであろう格言や諺をよく覚えていて、それが父の生活規範であり、また私達子供に対する教本でもあったわけです。こんな父の訓えの中で一番私の心に残っているのは「他人のお世話にならないように、他人の世話ならするように」でした。父はこの言葉を生涯実践して、多くの良き友人を得ました。

私もこの言葉を実践しようと努めてはいますが、なかなか難しい。それでも私は実践したいと思っています。私の尊敬する父のように。

田中　辰治　明治37年2月10日生　本籍　福岡県
▽昭和2年4月福岡県巡査拝命、14年9月警察大学校（本科）卒業▽19年11月から八屋、大隈、前原、博多臨港、箱崎警察署各署長、門司市警察本部長兼門司市警察署長を経て29年3月警視長・依願退職▽37年6月門司自動車学校を設立・理事長▽58年4月財団法人福岡県警友会会長、九州警友会連合会会長、現在に至る

みんなのためになるごとがんばらんば

田中丸　善　郎

昭和二十五年四月、学校卒業と同時に名古屋の松坂屋に就職が決まり、今日から勤務という朝、たまたま名古屋に来ていた父が「善郎、店ではみんなのためになるごと、一生懸命がんばらんば」と一言。「そいぎ（それでは）行きんさい（行きなさい）」と言われ出社した事が思い出されます。このおやじの一言は、長説教を聞く覚悟でいましただけに意外でした。しかしこの言葉こそ、私にとって終生耳に残る何よりも値打ちのある言葉であったと思います。「みんなのために」を自分なりに考え、懸命に、人より早く、人のいやがる仕事を進んで行った若き日を思い出します。

早いもので父が亡くなって三十年になってしまいました。父の偉大さは年をとって、しかも父の年に近くなればなる程生々しく感じ、もっと長く生きて欲しかったと思います。中学入学時の一言、兵隊に征く時の一言、大学入学の時の一言など、数多い一言の中で、私にとって珠玉の一言は「みんなのためになるごと、がんばらんば」という言葉につきると思います。

昭和四十三年ロータリーに入会して出逢った言葉に

一、真実かどうか

二、みんなに公平か
三、好意と友情を深めるか
四、みんなのためになるかどうか

という四つのテストがあります。この四番目の言葉こそ、おやじの一言そのものであったのです。今四つのテストを毎日デスクの上に置いて、このおやじの一言が私を見守っていると信じております。

田中丸善郎　昭和4年1月3日生　本籍　佐賀県
▽昭和25年立命館大卒▽25年㈱松坂屋入社▽30年㈱佐世保玉屋に転じ▽37年㈱玉屋ストア取締役、38年代表取締役▽47年㈲ゼン商事代表取締役▽53年㈱小倉玉屋専務取締役に就任

好況時に心せよ

辻　長英

明治生れの日本人はしっかりしたバックボーンをもっていた様で、父も又典型的な明治日本人で、「人は人なり、我れは我れなり」と、一人ゴーイングマイウェイの人生を通した様です。

そこで子供の教育も、今日の教育ママが聞いたら目をむきそうな放任主義、やりっぱなしの教育法で、子供達にもどうせよこうせよというお説教はほとんどなく、ただ親の経験談の中から子供達なりに学んだ様に思います。

その語らずの父も、仕事の事になると先輩としていろいろとアドバイスをしてくれました。常に言っていたのは、「建設業の危機は好況の時にこそある。仕事が少なくて倒産した例は少ないが、工事を多くかかえ過ぎて倒産した例は数多くある」という意味のことでした。

この言葉が現実のものとして私の前に現れたのは昭和四十七年一月、私が社長になった時のことでした。

それまでは我が国のＧＮＰは毎年毎年一〇％以上の伸びを見せ、業界も工事高が毎年三〇％～五〇％も延びるといった有様でした。

私が社長になって一番に浮んだのは「好況時こそ、心せよ」というこの言葉でした。何か足

が地についてない。社員が足りない、職人が足りない、材料が足りない。しかし売上げは上り、利益は上る。こんな事が長く続く筈がない、というのが社幹部の一致した意見で、四十七年度から新入社員もそれまでの五―六名を二名に、売上の延びも一五％以内と決め、四十七、八年と二年引き締めで進み、その二年目の終りに近く、あのオイルショックがやって参りました。

しかしお陰様で早めの引締めが功を奏して、四十八年度の決算は通常通りの決算ができ、四十九年度の決算は何と史上最高の利益を見ることができました。正に親父の一言のお陰なのです。

ところがこの言葉には実は続きがあるのです、儲けるのは不況の時であるという言葉です。受注生産である建設請負業では、正にそうであるべき筈です。又過去の不況期はそうでした。しかし今回の不況ではなかなかにその場面は出て来ません。親父の後半の言葉が実現する事を念じ、耐えに耐えている昨今です。

辻　長英　昭和7年1月1日生　本籍　福岡県
▽昭和29年西南学院大学商学部卒▽31年熊本大学工学部建築科卒▽同年4月㈱辻組入社。47年取締役社長就任、現在に至る
▽辻　実業㈱、九州土地建物㈱各社長、福岡県建設業協会副会長

石にかじりついて

出口次年

父は製鉄所技師を定年後も関係会社に勤めて、好きな工場現場で働ける事を喜んでいた。所がたま〳〵健診で異常が見つかり、手術する事になった。手術の後枕頭に付添っていると父が何か言い始めた。麻酔の睚めぎわによくあるうわごとのようであった。とぎれ〴〵の聞きとりにくい言葉であったが、「石にかじりついて研究せよ。」と聞かれた。

父は製鉄所在職中、多数の発明考案や特許の実績をもち、入院中も特許申請を続け、私に申請原稿の清書や、弁理士事務所との連絡をさせていた。しかし、当時私は研究開発が父の生甲斐であった事を切実に感じていなかった。

父はその後一時持直したが、翌年亡くなったので、この一言が父の遺言になってしまった。父を失ったこの年、偶然私は張切って勤めていた職場を離れる事になった。すると間もなく或る人が、前の仕事に関係のある宿題を持って来られた。御意向は私達に研究課題を与えて、この頃流行のベンチャービジネスに育て、下さろうとする御親切であったが、私は前の仕事の後始末をさせて頂く心算であった。

宿題は或る装置の故障防止であったが、取組んで見て驚いた。それは大変な問題で、全くの

新技術開発以外に解決の方法がなかった。

先人の足跡をたどる学習でも容易でないのに、未踏分野の研究が簡単にやれるわけがない。これを登山に例えれば、大低の山は既に先人によって登り尽くされ、新しく登る山や道は殆んど断崖絶壁の岩場のような所しか残っていないであろう。研究による新技術の開発とは、即そびえ立つ岩肌の石にかじりつく事であると観念した時、私の運命を予見していたような父の遺言が浮んで来た。

やりかゝった男の意地、成否をこえた生甲斐は、石にかじりつく事にかゝっている。〝親父もそうだったのだ。〟と考えて、無力を省みず遮二無二研究に突込んで行った。

以来二十三年、父の「石にかじりついて研究せよ。」と言う声を背中に聞き乍ら、断崖をよじ登るような毎日を続けている。

出口　次年　大正11年12月22日生　本籍　福岡県

▽旧制九州専門学校に学ぶ。専門学校在学中安岡正篤先生の著述に心酔し、以後40余年師事す▽洞海産業㈱常務取締役から昭和38年サンエス工業㈱を設立、以来トライボシステムのコンタミネーションコントロール関係業務に従事す

無言の教え

寺本　清

熊本の田舎から苦学力行して社会に出た父は、自らを律するところが極めて厳しく、また、殊に若い頃は気迫が表に迸るタイプであったから、家の内外でとかく怖がられる存在であった。父から受けた教育の思い出も、先ず幼児期にビンタで叩き込まれた躰に溯る事になる。

少年期に入っても、父の厳しさは変らない。流石に手が飛んで来る事は無くなったが、その代わり耳にたこが出来る程聞かされたのが努力の大切さという事である。事ある毎に曰く、「世の中に天才なし、唯能く努力する者は存す」、「努力無くして進歩無し」、「天は自ら助くる者を助く」等々、先人訓から今思えばやや陳腐な格言迄聞かされた数に限りは無い。スランプの時にこうした言葉で励まされることもあった。だが、より頻繁に思い起こされるのは、例えば試験や進学が殊の外順調に行き、いささか慢心した折に落とされた雷である。「進級、進学は人生の目的でなく、ほんの小さな節目だ。そんな所で努力を緩めて何とする」という言葉が何とも恨めしく響いた事もあった。

振り返ってみると、これまで未熟ながらも私なりの生き方を少なからず方向付けてくれたのは、そうした言葉もさる事乍ら、むしろ努力とは何かを自ら示した父の姿であるように思われ

る。占領末期から高度成長前期にかけての私の青少年期、父は労働行政から国政、更に故郷での県政に携っていた。後ろから見ていると、為すべき事を考え、それを人に説き実行して行く姿は、将に刻苦精励そのものと映った。努力によって幾多の壁を乗り越えられたについては、それなりの運があったのかも知れない。また、努力が報われなかった事があったようにも窺える。しかし、一つ確かなのは、結果はどうであれ、努力に対する父のひたむきさにいささかの変わりが無かった事である。父にとって努力は一種の信仰であるのかも知れない。

私もともすれば自らの器や将来性の制約といったものに目が向き勝ちの中年族となったが、今や喜寿を過ぎ、すっかり温厚となった父が、なお成長の可能性を信じて心身の鍛練に努める姿を見て、自戒の念を新たにしている次第である。

寺本　清　昭和15年8月8日生　本籍　熊本県
▽昭和38年東京大学法学部卒▽日本銀行ロンドン事務所、人事部、外国局、業務管理局等を経て、59年同行北九州支店長

無言の「宏如海」

友貞睦夫

小学校二年の時父に夏休みを郷里の佐賀で過すことをすすめられた。郷里には祖父母が健在で、又小学校に入るまで過した所でもあり大いに食指が動いたが、問題は東京から佐賀までの長旅だ。父は兄と一緒だからと云うが、私としては子供ながら心配だ。兄は小学六年生だった。

三等の堅い座席で一昼夜を過すのは楽ではない。冷房など考えられない当時の客車は一日中窓を開けて走るので蒸気機関車の媒煙で顔は真黒くなるし、目には何度となく石炭の粉が入った。ただし東京―沼津間は七・八キロの丹那トンネルがあるので電気機関車が走っていた。門司と下関との間は連絡船だ。今では連絡船といえばロマンチックに感じるが、現実は席をとりたい一心で長いホームを足ばやに乗り継ぐのは決してロマンチックとは云えなかった。

色々と子供ながら考えた末、夏休みを郷里で過ごすことに決めた。我々が東京を出てから余程気になったとみえ、何度となく「電報はまだか」と母に聞いたとか。しばらくたって母が話してくれた。表面は平静な顔をしていても心配だったらしく、滑稽でもあり、有難いとも思った。

父は日頃の言動では説教がましい事を云うのではなく、むしろ茶化したり冗談が多かった。

「宏如海」と書かれた額が残っているが、宏い心でみつめていたのではなかろうか。

中学二、三年ともなれば、将来の進学を決める年頃となる。当時の世情と土地柄から軍関係の学校を目指す者が多かった。

昭和十五年四月、ヒットラーのドイツ軍は突如としてデンマーク、ノルウェーに進撃し、五月末には三十万のイギリス軍をダンケルクに追い落とし、六月にパリーを占領した。日本は日独伊三国同盟の締結のもと南部仏印に進駐するなど軍国主義の横溢する世情であった。

父は職業軍人になるなとは云わず、「これからは百年戦争はありえない」と云ったことを覚えている。目先のことにとらわれず先をよくみきわめ、自分で決めさせようとしたのだと思う。

このように言葉としての薫陶といえるようなものは記憶に少く、むしろ体全体で感じることが多く、宏い心と宏い視野から子供をみつめていたのではないかと有難く思っている。

友貞　睦夫　大正14年10月4日生。本籍　佐賀県
▽昭和23年九州大学工学部卒業▽同年日立製作所入社、50年中条工場長▽51年日立西商品エンジニアリング㈱取締役、55年同社代表取締役

らしくあれ

夏川和造

私は学生時代に入学の際、校長先生から、「学生は学生らしくあれ」との訓示をうけた。先生は漢学者で文学博士の渡辺龍聖さんで、一九一二年中華民国の初代大統領・袁世凱（えんせいがい）の顧問をされた名僧智識である。

当時の専門学校以上の学生達は頭髪を長く伸ばしたものだが、我が校では「学生は学生らしくあれ」との指導の一つとして、学生の頭髪は五分刈りがふさわしいから「五分刈り」だと決められていた。体操の時間では、軍事教練が主であって、佐官級の将校が教えにこられた。挨拶の脱帽の際に、髪を伸ばした学生は、見つけられて注意をうけたが、時には「君は小遣いがないのだろう。これで明日は頭を刈ってこい」と散髪代を出してくれる温情ある教官もおられた。

大正の晩年から昭和の初めにかけて、不況は益々深刻になり、所謂「大学は出たけれど」と言われる不景気な時代で就職には困ったが、我が校の学生は先輩達の信望も厚く、且つ「学生は学生らしく」で鍛えられていたので、その真面目さが買われ、殆ど全員が採用されるに至ったので、新聞にも報道され大変喜んだものであった。

やがて社会に出て実業についてから、父宗吉の訓話は「商人は商人らしく」「店員は店員らしく」「店主は店主らしくあれ」で、それが人材養成指導の骨子であった。

先生と父と二人から偶然にも同じ言葉で教えられるに至った「らしくあれ」の言葉は極めて身近な平凡なもので、その意味は、それぞれの立場にふさわしい行動が——それは言葉にも態度にも——求められるものであり、要するにそれぞれの本分を全うすることであると理解するるものであります。

このように「らしくあれ」の言葉は私の頭に固くこびりついた正に至言であり、「らしくない」ということのなきよう常に自戒したい言葉なのである。

夏川　和造　明治38年2月21日生　京都府出身
▽昭和2年名古屋高商卒業
▽㈱夏川本店会長
▽下関商業開発㈱副社長、ハリウッド化粧品北九州販売㈱、山口花王製品販売㈱各取締役

嘘をつくな

鍋島　良太郎

西南の役で日本国中が騒然としていた時、私の父は数えで四つだった。生地大分の中津もその洗礼を受けた。元中津藩士、福澤門下生の増田栄十郎が西郷吉之助を慕い、薩軍に合流すべく、疾風の如く街道を駈け抜けた。その道筋には放火、殺戮の嵐が吹き荒れたという。

父の祖父は畳を剝がして家中の要所々々に立て掛け、鉢巻襷掛けで日本刀の柄を握りしめていたそうである。おやじは、大根畑に身を隠す様命ぜられ、三日間というもの畑の中で這い蹲(うず)踞(くま)った儘だったという。

大根と言えば、明治初年までは、中津では田が少なく、ために主食は米ではなく、大根菜の乾したもので、それを湯掻いて食したと聞いている。従って決して豊かな農村ではなかったと言うことになろうが、それだけに誠実に、地道に生きてゆくことが、人々の生活信条になっていたと想像出来る。よくおやじは言っていた。「嘘は泥棒の始まり」「嘘は絶対つくな」と。とは言え、そこは商売人のこと、生き馬の目を抜く虚々実々の遣取りの場面もあった筈である。中津の片田舎から馬車を乗り継ぎ、決死の覚悟で門司に店開きしたからには後へも引けず、自分のモットーとのディレンマに苦しんだに違いない。そこで、おやじは、信頼できる番頭を要

所に配置して対外折衝をさせ、自分はその報告を聴いた上で判断、決裁をする方式を採り、自分は極力表に出ない様にした。それ程までに嘘が嫌いだった訳で、巷間商人らしからぬ御仁との評判を頂戴していた。福澤諭吉の心訓にも、「世の中で一番悲しいことは嘘をつくことです」とあるが、中津の風土がこの心構えを造り出して来たのであろうか。

自分もはや「嘘をつくな」と口を酸っぱく諭していた頃のおやじを大分上廻る歳になった。近頃は、社員や子供達に「嘘は絶対つくな」と説教している自分に気付き、ハッとすることが良くある。小体ながらも、弊社が今日まで永い間に亘り多くの方がたに御愛顧を蒙っているのは、この嘘をつかないという信条がその背景にあるからだと、我田引水ながらそう信じている。

おやじは、頑なに自分のモットーを貫き通し、九十四歳で天寿を全うした。

鍋島　良太郎　大正2年11月27日生　本籍　大分県中津市
▽昭和14年早稲田大学法学部卒業。同年日本勧業銀行入行▽昭和16年同行退行
▽合資会社鍋島商店代表社員、鍋島物産株式会社代表取締役社長、鍋島不動産株式会社、株式会社鍋島産業各役員

計画は細心、行動は大胆

西井哲朗

私の父は所謂謹厳実直な紳士タイプではなかった。

父に関りのあった人達の中には、仕事の関係の方であろうと、友人であろうとを問わず、父から一喝された経験者が多い。父を語る人達は、必ず誰もが「おごられた（叱られた）」と言う。

それでいて誰からも「西井のワーしゃん（和三郎）おっちゃん」と慕われていた。

今でも、かつて叱られた人達は誰彼となく異句同音に「西井さんにおごられても、不思議に腹が立たなかった」と言って下さる。

歯に衣着せぬ天衣無縫の男で、誰彼なしに叱りながらも、一喝する父の心底に暖かい人間味が秘められ、人徳を備えていたからだろうと思う。

私も当然父からよく怒鳴られたが、叱られたのは決まって私が後向きの発言をした時で、その考え方をひどくいましめられた。

父から聞かされた語録は多いが、私は次の言葉を経営上の座右銘にしている。

「細心な計画を樹て、行動する時は大胆に素速く実行せよ」

「信用を最重要と考え、なによりも優先せよ」

父は酒豪でも知られていたが、誰彼の隔りなく、みんなと一緒に気勢をあげ、飲む程に陽気、談論風発が父の真骨頂であった。反面、経済人として信頼をいただいていたようで、商工会議所副会頭におされ、相談事も多かったが、親身になって協力、援助を惜しまなかった。

また義侠心にも富み、弱い者、正直者には頑な迄に協力していた姿が懐しく思い出される。

父から受けた教訓の数々は私の今日の企業経営に力強い支えとなっている。

西井　哲朗　大正15年2月5日生　福岡県出身

▽昭和22年株式会社西井塗料産業に入社

▽30年専務取締役、46年取締役副社長、47年取締役社長に就任、現在に至る

▽日本塗料商業組合理事長、九州塗料商業会会長

お前は天才ではない

西野憲次

波が静かに岸を打っている。北海道の北、天塩川が涛々と流れ、川口の向うには日本海が展がり、利尻島、礼文島をはるかに望んでいた。

当時の天塩町は人口五千人位で、川口には木材が山積みされ、或は浮いていた。電燈は田舎の町としては早くからついていた。

大正十年の頃である。北転船が木材を集めに来たり、町はかなり賑やかで、茶屋もカフェーも数軒あった。木工場、電灯会社が並び、町の北はずれにお宮があって、正月には篝火が白い雪の上に長く続いていたことを思い出す。

父はこうした町に住み、私は長男として生れた。下駄のスケートをはき、スキーですべり、コールテンの服を着て小学校に通っていた。

春になれば雪解けを喜び、夏、秋は利尻、礼文島に夕陽が美しく映えていた。

「お父さん、この町が好きなの」と、私はよく尋ねた。「うん、北海道の自然は雄大でいいね」と父は答えたものである。土木技師であった父は、当時樺太の測量に行き、白系ロシヤ人と友達になり、彼と米国行きを計画していたが、祖父に許されなかった、と後になって聞いた。

父は堺の出身で地主の家に育った。私は父と同じ堺中学に行くことになり、堺八田荘村家原寺に祖父と住むようになった。

天下三文珠の一つ、知恵の文珠を祀った文珠さんには山門に大きな仁王像があった。

中学からの進学を決めるため久し振りに父が堺にやって来た。私は文学を好み、漱石、芥川、倉田、カント、ヘーゲル、西田哲学を読み、三高―京大哲学科に行きたいと思っていた。

「お父さん、僕は京大の哲学科に行きたいと思います。どうぞお認め下さい。」といった。父は、「おい、お前は哲学科に進むというが、一応もっともと思う。然しお前は天才ではない。真の哲学者は天才でなければならない。」といった。

私はショックであった。私が文学に没頭するのを心配し、将来を思っての父の優しい言葉であったことを今は感謝している。そんな父であった。

西野　憲次　大正5年5月14日生　北海道出身
▽昭和17年北海道大学医学部卒▽25年北九州市八幡東区に開業

世の中は毎日が競争だ

野畑彦蔵

私は大分県中津市和田村の海に近い農家の次男に生れた。小学校四年の義務教育を終り、さらに上級の高等小学校で四年の課程を終了した。次の五年制の中学に進むには家の経済事情が許さず迷っていたある日、担任の先生が遠くから来宅し、両親に是非五年制中学に進学させるようにと勧めた。

父も困っていたが、幸い祖父が当時、田舎にしては珍しく漢学の素養があり、村の有志と相談した結果、中津市の留心学舎と稱する漢学塾への入学手続きをとってくれた。ここで勉学を続けながら就職の問題を考えていたとき、同村の先輩で門鉄に勤務する人から、国鉄には局単位の地方教習所と、その上に全国中央教習所の制度があり、官費で勉学して昇進できる途がある。近日、門鉄教習所の入所試験があるから受けてはどうかと耳よりな話があった。

そこで両親や祖父の了解を得て明治四十三年合格とともに葛葉の合宿所から大里の教習所まで、乗り物がないので毎日徒歩で六ヵ月間通学し、首尾良く首席で卒業した。直ちに門鉄本局所在の門司駅（現門司港駅）勤務を命じられ、日給三拾銭也の辞令をもらい、職業人としての人生のスタートを切った。幸い無賃パスをもらっていたので、休日には時おり中津に帰郷し、

一家団らんを楽しむ中で、いつも変らぬ両親の細心の処遇は今も忘れることができない。

元来、酒好きだったが、働き屋の父がいつも「百姓はどうして収穫を挙げるか、毎日必ず現場を見回る努力が要る。世の中は毎日が競争だ。都会には大学出の偉いのが大勢いる。人並み以上に頑張らねば成功できぬ。そのつもりでしっかりやれ」と励まされた。

当時は第一次世界大戦で日本海運界は大好況時を迎えていた。私は将来について真剣に考え、また同郷の縁故者の勧めもあって、国内輸送の国鉄から国際的な海運に関連する事業に転向を決意し、大正七年四月、新しい職場へ就職して活動を始めた。

今は思いもよらず満九十歳の誕生を迎えたが、なおいまだ健康に恵まれ、日々事業経営に、また応分の社会奉仕活動のできることは感慨無量であり、亡き両親の厚恩に深く感謝している。

野畑　彦蔵　明治28年4月7日生　中津市出身

▽昭和22年関門船舶荷役（株）社長

▽24年門司港運（株）社長

▽49年同会長（現在）

▽元日本港運協会副会長、元門司市議会議員（二十三年間）昭和50年、勲三等端宝章

だまされても人をだますな

野村勇治

父は無類の御人好しであり、大変な世話好きでもあった。随分と長い事お寺の総代を務めていた位である。穏やかな人で殴られた事は後にも先にも一度きりである。

実家は宇部村（現宇部市）にて代々農家であった。私が生まれた頃、宇部は石炭の発見で沸き返り、父もヤマッ気を出したらしく、個人経営で炭鉱業に乗りだした。しかし経営者にはやはり不向きであったとみえ、やがて訪れた不況の際にあっさり倒産してしまった。おかげで先祖伝来の田畑を全て手放す羽目となり、私も小学校卒業後、大阪で軽金属の工業所を経営する叔父の所へ預けられた。叔父は私を見込んで工場を継がせるつもりであったらしい。ところが父が病に倒れ、私は又、山口へと戻った。

当時父はタクアンの製造を営んでいた。そのせいで以後私は漬物業界へと足を踏み入れ、やがてはそれが現在の丸食へと至る訳である。

昭和十年、二十六歳の時に私は自営を始め、商人として生きて行く事を決意した。その時父は私にこう言ったのである。「だまされても人をだますな」と。つまり商人になるならば正直で信用される人間になれ。誠実であれと言う事だと思う。私は忠実に守った。社員にも事ある

毎に身をもって示してきたつもりである。父の言葉は私の商人としての基本となったばかりでなく、今なお丸食という会社の中に生き続けているのである。

さて、一度だけ殴られた話である。十歳の時だった。当時の事だから毎日、戦争ごっこをして遊んでいた。私は隊長となるべく父の勲章を持ち出し、胸に飾り立てたのである。その挙句、何処かえ落として失くしてしまったのだ。父は別人かと思う程怒り、さんざん殴られた。父に手を当てられた唯一の、忘れ得ぬ想い出である。

先般、由あって私も叙勲の栄に浴した。もし孫が私の勲章を持ち出して失くしたとしたら、私は一体どうするであろうか？二十年前に逝った父を折にふれ懐かしく想い出すのである。

野村　勇治　明治43年山口県吉敷郡西岐波生まれ
▽大正12年山口県西岐波尋常小学校卒業▽昭和10年食品製造卸の自営を始める
▽昭和27年小売業に進出し、丸食各社の設立に参加、社長を歴任する
▽昭和55年丸食グループ本部長に就任、現在に至る

ファインプレーはいらない

芳賀晟寿

父は、私の身近な人の中で、不名誉なことをし乍らも、高潔さを維持出来る数少ない男であったように思う。高潔さを維持する必要性を知っている男だと云えた。

七十歳近くなって、結婚して五十年近く経った夫婦は、夫も妻も相手の前で身の緊張など保つことは無駄、そして二人共死ぬ迄隋性で一緒に居るだろうと想像されるのが普通ですが、この現実の上に安住している心情が、実に佗しいと、云うのである。

父と母とは、この晩年において、本気で別居を始めたのである。七十歳の老年になっての男の一人生活（ぐらし）は、大変厳しい内容をもっている。階下に私共一家が居るとは云え、二階に台所、風呂を造設し、通いの手伝を相手に、死ぬ迄一人生活をしたのである。

「人間の人間らしさ」は、何の尺度でとらえるのであろうか？

父はそれを、その人が自分以外のことに心を使っているか、どうか、で計ると云うのである。しかし、それが自分の利得の為では駄目なのであり、本当の魅力に欠けると云う。人間が、人間しか出来ないことをしていることにならない。自分が、他人に迷惑をかけないと云うのは当然のことで、少しだけでも積極的に社会の為に役立つことが必要だと云うのである。その意慾

のない人は、どうも人間らしくないと云うのである。

この父が「ファイン・プレーは、最善のプレーではない」と云うのである。ファイン・プレーは、その意外性の為に世の人の感歎をかうことになるので、事前の準備がちゃんとしている場合は、ファイン・プレーは起こりようがない。「名人に名手なし」と云うのは、このことを云うのである。名人は名手を使わなければならない様な局面に陥らないよう手を打つから、名手を使わずに勝てる。つまり「ファイン・プレーにはミスがある」と云うのである。

この様な父であったから、自分の葬式の在り方も、導師を誰に、どこで葬式をするかに至る迄私に指図して、その二日後に死んだ。

私は、ビジネスに特に精を出す父を識らないが、男の生き様を、その全身で教えてくれた父はもういない。

芳賀　晟寿　昭和13年6月26日生　北九州出身
▽昭和37年京都大学法学部卒
▽芳賀ビル総業株式会社、鞘ケ谷アスレチックス株式会社社長、財団法人芙蓉教育振興会理事長

利己主義はいかん
人さまのお蔭を忘れるな

長谷川　裕一

父の生まれた故郷（ふるさと）は直方市の隣町、赤池町市場伊土である。長谷川家はこの土地に六百年。それ以前福智山麓、鷹取城城主長谷川善四郎を初代に三百五十年、ほぼ千年に近い間、赤池町の前身・上野村に家を伝えてきた。

父は小学一年にして父を、小学五年にして母を失った。十二歳で奉公に出て、二十二歳の時独立を志したが、その時既に肺結核に冒されていた。志をたてた矢先の失意を思う時、さぞ辛かったことと思う。

父が三十三歳の時、母タツとの間に私は生命をいただいた。子供の時の父の思い出は母にいつも大きなカルシュームの注射を打ってもらいながらコツコツと働いていた姿である。又、躾に厳格で頑固でもあった。毎日耳にタコが出来るほどに論されたことばは、「利己主義はいかん。人さまのお蔭を忘れるな」であった。利己主義はいかんといって何度叱られたことか。

父が亡くなる四、五年ほど前だったか、こんなことを言って笑ったことを思い出す。「お前は人一倍欲が強かった。子供の頃は人に嫌われる子になりはしないかと心配した。けれど今となっては欲が強うて良かった」。

今思えば父の生涯は私のための生涯であった。私がもの心ついた時以来、父がガンにおかされて勢いつけて死んで行くその日まで、全て身体をもって私を教えてくれた、一つ一つの思い出、私を棄て、公を常に優先していく生き方、みんなのために生きていく生きざま、父亡き今父は仏となって生前のようにかた時も休まず私を守ってくれている。

私は素晴らしい多くの方々、人生の師に教えを受け、社員の皆さんに支えていただいている。神仏のお加護、先祖の加護、父の徳をいただいてのお蔭としかいいようがない。私も子や孫に「利己主義はいかん。お蔭を忘れてはいかん」と今後伝えていこうと思う。

長谷川　裕一　昭和15年10月10日生　福岡県出身
▽昭和38年龍谷大学文学部仏教学科卒
▽株式会社はせがわ社長、日本唐木仏壇製造卸懇話会会長
▽昭和54年度日本青年会議所副会頭▽著書『仏壇の本』『商人道　後姿に学ぶ』
〈好きな言葉〉苦難は妙薬なり

自分の立場をはっきり主張せよ

花田　宏

私は次男で、八歳年上の兄が居たが、夭折した。長男が若い時から病弱であったせいか、早く事業の後つぎを育てたいとの気持が父には強かった様である。私は、学校を卒業して直ぐ父の手伝いを始めたこともあり、いつも厳しく指導を受けた。

父が私に云った事は人に対してはまず自分の立場を百パーセント主張せよであった。気弱な私の性格、お人好しの性格を見抜いての教えであったろう。私は、つい気の弱さ（気の良さ）から妥協的、人の気に入られる様な事を云おうとする性癖がある。父が云うには人（相手）は向うの主張を百パーセント要求してくるのだから、こちらもこちらの立場を百パーセント主張して始めて中を取って正しい妥協、折り合いがつく。それなりに始めから此方の主張を一歩引いて主張すれば相手の百パーセントの主張と此方側の一歩引いた所との中間を取られ、結論は此方の不利な結論を押しつけられるとの事である。これは私の性格を見抜いた適切な助言であると思い、今でも時に思い出し有難い事だと思っている。

それと、これは父自身も花田家からの代々の云い伝えとの事であるが、「人から金を貸してくれと頼まれれば金を貸さず、その何割か返ってこなくとも悔いの残らぬ程度の金を与えよ」と

教えられた。昔から金を貸せば金と友とを失うとの諺もある。保証人になる事など論外だが、金も貸してはいかぬ。返ってこずとも腹の立たぬ程度の金を与えよというのは、やはり財産保全の知恵として妙案と思える。世間から云えば、「けち」と云われる事もあろうが、世間様が喜ぶ様な金の使い方をしていては一代も持たぬであろう。

きざな様だが、論語の中の「人の己を知らざるをうれえず。己のよくすること無きをうれうるなり」を座右銘として、毎日、父の求めたものを求めて進んで行きたいと思っている。

花田　宏　昭和7年7月21日生　本籍　福岡県
▽昭和32年早稲田大学政治経済学部卒、父の経営する九州米油株式会社に入社▽47年代表取締役社長
▽北九州青年経営者会議初代会長
〈好きな言葉〉百萬人と云えども我往かん

おやじと共に

原田　篤

我家は私が生れた時からの商家で、私は四人兄弟の次男坊として生れ、今日迄商人の苦労は私なりに見てまいりました。今、幼少の記憶をたどってみますと、敗戦の昭和二十年、我家は空襲で焼け、家族全員、山口県都濃郡鹿野町に疎開致しました。そこへ父が復員して帰り、自分の食事の粟飯をおみやげとして私共兄弟に食べさせて呉れた事が一番印象として残って居ります。私が四歳。その時が初めての父との出会でした。

父は徴兵検査で丙種合格位ですから体力の方はさほど無かったのですが、私達が朝、目を覚した時にはもう勤めに出ていなく、夜は寝静まった頃帰って来ると云う日々が何年も続いて居りました。

昭和二十五年都市計画が進み、我家の店舗も焼野ヶ原に又出来上ったものの商売だけでは家族全員食べて行けず、父は食糧関係の仕事にたずさわっておりました。店舗の方は母と祖母にまかせ、又早出、遅帰りが続く毎日が始まりました。父は働くために生れて来た様な人で、私達兄弟に男は無言で仕事をしろと言う事を教えて呉れました。

他の兄弟はそれぞれ東京の大学へ行き、家業は私が継ぐ事になり、九年間、東京・広島と修

業に行ってまいりました。以来十三年、父の下で商売術を学び、父は昭和五十七年八月病で他界致しました。父は私に商人は信用を得る事は十年の歳月がかかるが、失う事は一日だから、一日一日を誠実に生き、人に恩を着せず、蔭で人を助け、温い人間になる事を身を以て教えて呉れました。

明治十二年創業した弊社は、こうした父の訓えを守って、従業員達が盛り上げて呉れております。「おやじと共に」歩んで来た道は、今後益々厳しい茨の道を照らす灯火になると思います。

原田　篤　昭和16年6月25日生　本籍　山口県徳山市
▽昭和35年3月高等学校卒業、
同年4月瑞穂糧穀入社▽43年日本菓子専門学校卒業、
株式会社原要入社▽57年9月株式会社原要代表取締役
就任、現在に至る

習字を勉強しよう

日向安次

父は子供の教育、躾には厳しい方でした。小学三年になった或る日、「習字を勉強しよう」と、庭に面した廊下に座机を持ち出し墨を磨り始めました。〝父唱子隨〟で父子の〝手習い〟が始まりました。毎朝五時半起床、登校前の一時間が父子の習字の時間でした。姿勢が崩れて文字が乱れ、怠け心が形に表われるのを感じとると、父は容赦なく左手首に制裁のシッペを二発くれました。

続ける事は良い事で習字に興味が湧き、興味が湧くと字も上手に書けるようになり、通信簿の習字の欄には〝甲上〟と記されていました。小学六年から中学二年までの習字、書道の時間は先生方は殆んど教室に来られず、私が筆法、運筆を説明しました。中学時代は鳴鶴流の三体千字文（楷行草書）を、高等学院、大学時代は鵞堂流（假名）を習いました。毛筆の手紙は学友よりも学友の両親に賞められ信任を得て良き友人を数多く持つことが出来ました。

軍隊生活では、初年兵の時から中隊事務室で書記の仕事をさせられ、掃除雑用の使役は免除、消燈後の気合注入のビンタは貰わずに過ごせました。正に〝藝は身を助く〟？でありまして、父に感謝し、親の恩を沁々と痛感致しました。

父は、「文字を習うことは精神の統一、修養に役立つ。心は形に表われ、形は心に表われるものだ。神経が喬ぶってゐるとき、落着きのないときの心の乱れは文字にも又乱れがある。文字はその人物の性格を表現するものだ」とよく言われました。誠に実感でありまして、心が和むにつれ文字も整って来て心も治まり、自分乍ら「上手に書けた」とニンマリ微笑を禁じ得ないことが屢々であります。

幼少の頃、父が「習字を勉強しよう」と身を以て私に体得させて下った教訓は今でも耳朶に残って居り、今にして思えば〝恩愛の鞭〟であったと感謝しています。

又、社会人としての門出に際しては、天金の皮表紙の部厚い一冊の本を差出し、これを熟読しなさいと言われた。表題は『商道の極意』とありました。その見出しに「信義を重んじ節操を守ること」とありました。此の言葉は現在に至るまで私の座右銘と致しております。

日向　安次　大正9年4月21日生　本籍　福岡県
▽昭和18年早稲田大学政経学部卒。山城屋商事㈱営業課長、イカリソース㈱東京支店長を経て▽昭和45年父の事業を継承し、昭和52年戸畑港運株式会社取締役社長に就任、現在に至る
▽洞海港運協会副会長、福岡県トラック協会北九州支部長

父の肌

広川正三

「キャーツ」と、自分の悲鳴で目が覚めた。ガツガツと歯がなり、ベットリ冷汗をかいて震えていた。ミイラが、笑いながら、私を追いかけてくる。一転して、誰かが私の頭蓋骨を、錐と鋸で開いて、脳をつかんだ……。

八歳か九歳の頃だったろうか。父に連れられて、九大の記念日に行った日の、夜のことである。生々しい姿態を保ったミイラの展示と、脳外科の手術の映画は、私にはまだ、理解できぬままに、ただ恐怖の悪夢となって、その夜の私を襲った。うなされて、しがみついた、裸の父の背なかがとても熱かったこと、「こいつは、医者にはなれぬわい。」と、父がつぶやいたことを、私は憶えている。熱い父の肌を、冷汗で濡らすと、安心して、私は眠りに入った。

七人の子供のうち五番目の私は、二人の兄が若くて死んだために、健康の点で特に気をかけられた。中学時代、一夜漬けのガリ勉をしていると、「勉強して成績がよいのは当たり前、勉強せずに成績をあげろ。」と、無理に寝かされた。後日、「常日頃の努力が大切だ。」との教へと解った。

日本の敗戦で私の頭は困乱した。人間を具象的に知ろうと、九大医学部へ入った。父は何も

言わなかった。卒業後、年老いた父より離れて、自分勝手に名古屋大学へ行った。父は無言だった。脛だけ噛らせてもらった。

間もなく父は、胃癌に倒れた。恩師の今永教授が名古屋より下関にかけつけられて手術をして戴いた。術後のベッドで、「ホウ、お前は医者になるのか。」と、父は微笑んだ。

少年の日の、熱い父の肌の感触と、最後の父の微笑が、私には今もなお、何か教へを語りかけているように思われる。その何かを、まだ、はっきりつかめない。いまだに親不孝な息子のままでいる。

広川　正三　昭和2年1月13日生　福岡県出身
▽昭和28年3月旧制九州大学医学部卒
▽29年名古屋大学今永外科入局▽名鉄病院など勤務を経て▽43年10月北九州市門司区に外科医院開業

大胆細心

深町　龍太郎

林芙美子の出世作といわれる『放浪記』の序章でこの町のことをこう書いている。

―直方の町は明けても暮れても暗い空であった。この町直方は南の飯塚、東の田川とともに筑豊炭田の勢力を三分する炭鉱町として発展し石炭全盛時代は繁栄を極めたものである……。

父はここ鞍手郡下境村という寒村で大正四年二月十五日に生れ、その風土と人間とのふれ合いで育った。父の行動力、胆力はこのような環境風土で培われたものと思われる。

下境小学校に通学し、小倉経理専門学校に学び、十三歳の時に祖父芳太郎が小倉日明に居を定め、十五歳で大沢商会に入社。夜学で勉強、しばらくして退職。後、黒崎化学工業社をおこし、昭和二十三年に旭興産㈱を設立して今日の旭グループ六社の基礎を作った。

父はつねに義理を重んじ、敬神崇祖、報恩の念に厚く、人一倍感謝の念が強く、人に対する親切さは徹底的で、しかもそれを誇示しない人であった。これも祖母ヨネが菩提寺である西教院の出という因縁によるものと思われる。行動的で緻密な計画性と大敵をおそれぬ胆力と旺盛な活動力で生涯を邁進した大胆細心の人と言えよう。もののケジメを通すことも信条であった。

「仕事というものは食わんがためにするけれど、その食い方が大切だ、人の茶碗に手をつっこ

むようなさもしい食い方、卑しい生き方はしたくない。堂々とした態度で世の中を渡ってゆきたい」とも言い、五つの座右訓を持ってこれを終生自分の行動基盤とした。『計画』『実行』『努力』『倹約』『決断』である。

死の半年位前に私を呼んで経営について次のことを基本とせよと懇々と話した。

一、人を愛することが出来るような人になれ。

一、人生は社会の為にあるもので自己のものでない。

一、義理をはたせ。

一、銭を残すより企業を伸ばせ。

一、先祖を大切にせよ。

いろいろ指導をうけたが、私なりに努力して親父の遺訓に報いたいと思っている。

深町　龍太郎　昭和14年2月17日生　本籍　福岡県

▽昭和37年日本大学理工学部工業経営科卒▽㈱横河電機製作所を経て昭和40年5月旭計器工業㈱入社▽現在旭興産㈱旭計器工業㈱代表取締役社長、国際計器㈱代表取締役副社長。旭エレクトロニクス㈱代表取締役会長

成功するだけの努力を

福嶋一雄

誰もが、人それぞれの中学・高校の想い出、そして恩師を忘れることが出来ないように、私も旧制中学・高校と長きに亘って指導を受けた恩師の教えを心に刻み込んでいる。

全国の中学・高校の全球児が夢として憧れている甲子園出場――。私自身、心身の鍛錬のため取り組んだ野球ではあったが、幸運にも春夏連続六度、甲子園のプレートに立つことが出来た。しかも二十二年春に準優勝、二十二年夏と二十三年夏には連続優勝することが出来、学校教育のみでは得られないさまざまな体験を得たことを深く感謝いたしております。

こうした成果を挙げることが出来たのは当時の監督を初め、チームの力が優れていたのは勿論ですが、厳格な教育者でありました恩師、故山中長一郎先生に巡り会えたお蔭だと思う。先生は私共の担任であると同時に野球部長でもありましたが、野球については全くの素人でした。しかし一度取り組まれた責任感と情熱は他を寄せつけなかった。放課後誰よりも早くグラウンドに姿を見せ、練習終了後は最後の生徒がグラウンドから立ち去るまでベンチで不動の姿勢で我々の練習を注視、無言の激励を受けました。この先生の姿勢と信念が、ともすれば挫けそうになる我々を支えて優勝への原動力となった大きな要因であったと思っております。

先生の教えは全国初制覇以来更に厳しく、私共にチャレンジ精神を植えつけたのです。先生は「優勝することは難し、されどこれを維持することは更に難し」と、頂点に立った者への警鐘をならし、これを克服するには「同じ努力するなら成功するだけの努力をせよ」と叱咤激励されたのです。勝利者は追われる立場となり、これを守らんとすれば受け身となり、精神的重圧を感じ萎縮しがちになります。それを、より高い目標を提示することにより、選手各人に課題を与え、役割分担をより一層明確に認識させ、無限大の努力をさせることにより、より強靭な布陣を創造出来、二連勝が出来得たものと思う。

恩師のやれば出来る、やらなければ産物はないの積極果敢な精神は忘れることが出来ない。

福嶋　一雄　昭和6年1月6日生　本籍　福岡県
▽昭和29年早稲田大学教育学部卒、同年八幡製鐵㈱入社、新日本製鐵㈱光製鐵所労働部長を経て58年1月日鐵運輸㈱へ出向、現在同社常務取締役輸機部長▽60年5月日本野球九州連盟理事長▽22年春選抜大会（甲子園）準優勝、同年夏（甲子園）優勝、23年夏（甲子園）優勝、25年秋、26年春、27年秋（いずれも神宮）の東京六大学優勝、29年夏都市対抗（後楽園）優勝

人に恩をうるな

福山庸治

私には二人の父がある。一人は実父であり、一人は養父であります。実父は現在は防府市に合併しましたが、かつては右田村という村の小地主の子として生れました。しかし、曽祖父の道楽と母の死等で、せっかく中学校（現防府高校）に入りながら三年で中退し、一時期熊本の親戚筋の運送屋に丁稚奉公をしたかなり苦労人でもありました。そのせいか本を読むことと宗教心は人一倍強かったように思います。また、よく人の世話をしておったようで、人に頼まれればとことん面倒をみていたようである。父はよく世話をしても「人に恩をうるな」といっておりました。そのせいか、死ぬ時は何んの苦しみもなく、一日の仕事を終え、夕食をすませ、知人に手紙を書き、風呂に入ったのが最後でした。

父にひどく叱られた記憶もないが、受験に失敗し、落ちこんでいる時に言ってくれた言葉は未だに忘れることが出来ません。「天のまさに大任を是の人に降さんとするや、必ず、先ず其の心志を苦しめ、其の筋骨を労し、其の体膚を餓えしめ、其の身を空乏にし、行い其の為すところを払乱せしむ」――後にわかったことですが、孟子の言葉でした。私は今でも仕事などにいきづまったり、苦しい時には常にこの言葉を口ずさみ、天が大任を降す前だと思って頑張っ

ております。

いま一人の養父（現丸福ホテル会長）は私と三十年余り一緒に住んでいますが、小言一つ言ったことのない人です。仕事でも任せたら、少々の失敗があろうが何一つ小言をいわない。世にも珍らしい人だと思います。無言の言葉は有言に勝るのかも知れません。茶道の中に「無用の用」ということばがあると聞かされましたが、まさにそのような境地におるのかも知れません。私は二人の父から限りない愛と教えをうけたことに感謝しております。

福山　庸治　昭和6年1月23日生　本籍　山口県
▽昭和29年関西大学文学部卒。八年間、県立徳山商工高等学校教諭▽37年4月丸福ホテル入社、52年10月社長、徳山商工会議所常議員、徳山市観光協会副会長、山口県旅館組合副理事長、徳山地区食品衛生協会長、裁判所調停委員

エライ人間になるな、リッパな人間になれ

藤井敏哉

今も私の脳裡に焼きついてはなれることのないこの言葉は、実は祖父の言葉である。幼い時から祖父が私に言い含めてくれた言葉である。

私の生まれた石見（いわみ）の僻村の寺は代々養子つづきであった。私の祖父も父も養子であった。私は曾祖父からつづいた養子寺に久しぶりに生まれた長男であった。

父は養子の身のつらさから、殆ど年中布教伝道で不在、遂には外地にまで足をのばす程であったから私にとって父に対する幼時の追憶はさだかでない。祖父が父親代りに私を訓育してくれたのである。

この言葉はいったいどういう意味なのか。私にとって長い間理解しにくい謎のようなものであった。しかし、少年期から青年期にかけて、人生に対する理想と願望が芽吹きはじめる頃になると、ようやく祖父の意図が私の胸中にひとつの生き方を示唆するものの如く迫ってくるようであった。

やがてそれは支配や権力の座に据って、人を見くだすような思い上った人間になるな、うらおもてない誠実な人間になれ、いつも仏さまが見ておられるぞ、ということであろうと自分な

がらに受けとれるようになった。

冷たい冬の晨朝、仏参をすませると、きっと祖父は私を見つめながらこの言葉を言うのだった。私の幼い胸中に祖父は一本の心の杭を打ち込んでくれたのではなかったか。それが祖父の教育であったのだろう。

祖父の言葉通り私はエライ人間にはならなかった。しかし、私はこの歳になってもなおリッパな人間になることができない。人間が人間になる道のなんと遠いことか。

藤井　敏哉　大正14年3月14日生　本籍　島根県
▽昭和23年龍谷大学文学部卒業▽昭和25年同研究科修了▽昭和28年文部省民間科学研究助成金を受け、東洋教育思想史を研究。以来、青少年に対する宗教教育の実践を生涯の仕事と考える▽昭和45年から門司鎮西女子学園長在任今日に至る
▽著書＝『いのちに目ざめる教育』『仏法への道標』他
〈好きな言葉〉宿縁深厚

父がつけてくれた名前

藤嶋吉郎

私の父は私が小学校三年生の時に死んだ。だから私は父の事を余り憶えてはいない。五男二女の真中に生まれた私は、幼なかったせいもあって、残念ながら父から特に何か教わったとか、感銘を受けたという記憶はない。しかし父が人一倍子煩悩であった事は感じている。博覧会に連れて行って貰った時、雑沓の中で私一人がはぐれてしまい、私は親切な見知らぬ人に送って貰って、結構平気で帰宅したのだったが、家では大騒ぎになっていて、父が母から貴方がついていながらとやかましく云われているのを子供心に済まなく思った事を思い出す。

父が夜中に急に倒れた時、私達はオロオロと父の体に取りすがり、段々冷えて行く手や足を懸命にこするばかりだった。兄が迎えに走った医師を乗せた車が門前に停まる音がした時、私はホッとした。これで父は助かると思った。然し父はもう此の時死んでいたのだった。

私は父の死後まもなくして父の生家を継ぐことになり、母や兄弟達と別れて福岡市から山口県へ移って来た。こういう因縁のせいもあって私は若い時から何となく父と同じ様に四十歳台で死ぬ様な予感がしていた。然しいつの間にか馬齢を重ねて還暦を目前にする年になってしまった。私の二人の息子は私と同じ職業につくことになったが、私は彼等に誇るものも教えるも

のもない。唯平凡な市民として、自己の職業に誠実に努力してほしい。父を乗り越えて行ってほしいと願うのみである。

私の吉郎という名は父が姓名判断を基にして選んだと母から聞いた。私は勤労動員で働いていた彦島の工場での爆発事故や終戦後の大病、医院開設の際の土地探しや資金準備の困難等々何度も人生の重大な岐路に立たされたが、その度に思いがけない幸運や人の好意に恵まれて何とか乗り越えて来る事が出来た。今にして思えば、命名にこめられた父の愛情が私を護ってくれたのではなかろうかと思うのである。

藤嶋　吉郎　昭和2年生　本籍　山口県
▽旧制山口高等学校、九州大学卒、医学博士
▽藤嶋内科医院院長

男なら泣き事言うな

藤本新二

私が生まれた頃、両親は韓国のソウル（元朝鮮京城府）で、警察医をしていた伯父の支援を受けて、郊外の田舎に牧場を、市内に冷凍製菓工場を経営していた。

働らき者で有能な妻に恵まれた父は、経済的にも豊かで、本を読んでいるか遊びまわっているかのどちらかの生活。熱心に仕事に勤しんでいる父の姿は全く記憶にない。

私と姉は、多忙な母の許を離れて、従姉の開業する病院での下宿生活のようなものだった。今思うと、カギッ子の戦前版である。

第二次世界大戦終結の昭和二十年、私は小学校四年生だった。日本に引揚げてから後も、主に母が一家を支え、父はあまり働らかなかったように思う。私の記憶に残っている父母との共なる生活は、小学校四年から高校卒業までの八年間しかない。

その八年間も父に対する良い思い出はない。相変らず本はよく読み、口下手な分だけ字はよく書いていたものの、一家の支えとなるべき父が母に支えられていた毎日の生活の中で、母に対する感謝と尊敬の念とは裏腹に、父に対しては軽蔑の眼を向けていたようだ。だから父と私は仲が悪かった。

その父が私に言っていた言葉が「男なら泣き事言うな。強く正しく、とことんやり通せ」である。「子供に言う前に自分でやったら。あなたも男親なら、これ以上おふくろに苦労かけるのは止めろ」と、私の反論のさそい水、親子げんかの種にもなった言葉である。

自分の出生と育ちの良さ（その割に気品に欠けていたが）を語り、過去の栄華に生きる父と私は、父の死の時までかみ合わなかった。

頼りにならない父親、時として心底からの憎しみの対象でもあった父親が私に言い続けた言葉「男なら泣き事言うな。強く正しく、とことんやり通せ」を、我が息子に言い始めている自分に気付き、親子の絆の恐ろしさを思う。

藤本　新二　昭和10年6月26日韓国生　本籍　北九州市
▽熊本大学法文学部法科卒　▽熊本、研究所、東京、日本YMCA同盟等のYMCAを経て　▽昭和38年北九州に赴任　▽現職　財団法人北九州YMCA総主事　学校法人北九州YMCA学園長　▽著書『日常生活と外来語』他

道ばたの石ころ

二田義松

私が育った福岡県浮羽郡水縄村（現田主丸町）は、耳納連山の北側にだかれた山村である。海抜三百七十米からわく清水は、せせらぎとなって落ちる。なだらかな山すそを下ると、穀倉、筑後平野が広がり、筑紫次郎の筑後川が帯となって、きらきらと光って見える。

そんな田舎だったので、四季の移ろいもきびしかったが、いまも変わらぬ平和で、のどかなたたずまいは、ふるさとへの想いを熱くさせる。九州財界の大御所、瓦林潔氏は同郷の大先輩である。

小学校まで一里の道のりだったが、徒歩で通った。でこぼこの山道だから砂ぼこりが舞い、馬車はガタガタと揺れる。そのころ、父は農業のかたわら、久留米絣の行商をしていたので、長男の私は荷車の後押しをたびたび手伝った。

ところが父は荷車を止め、道ばたの石ころを一つ、一つずつ拾って取り除くのだ。あとから通る人や車の邪魔にならないように…。連れ立って歩いているときも、転がっている石をみつけると必ず拾った。

父の名前は松三郎。無口だったが、誠実で勤勉だった。〝馬鹿正直の松ちゃん〟といわれて

も、気にしているふうでもなかった。まずしいなかにも、七人の子供のためにがむしゃらに働いた。村の人に信用され、尊敬されることはあっても、後ろ指を指されることはなかった。

おやじに叱られた記憶はない。ただ酒が好きだった。酒代に苦労しながらも、よく飲んでいた。こんなおやじだから、子供のしつけや教育の役目は母に回っていたが、それでも立派に一家の大黒柱におさまっていた。病気がちだった母は六十五歳でなくなったが、父は八十九歳まで長生きした。

私はこんなおやじを見て育った。こつこつと働くだけで、商売のことも何一つ教えてくれなかった。しかし、〝道ばたの石ころ〟を拾う父の後ろ姿が、いまでも強烈な映像として、まぶたに焼きついている。それは、私に商人としての道を教え、また心の支えになっている。

二田　義松　大正15年9月3日生　福岡県田主丸町出身
▽福岡県立久留米中学卒▽昭和27年久留米市に紳士服卸業「二田商店」創業▽33年取締役社長、現在に至る

男だからな

堀川伝夫

戦争は親子の絆さえ簡単に引き裂く。昭和十九年六月、一枚の紙切れが三十六歳の父の運命を変えた。そしてそのあくる日、〝祝出征陸軍二等兵堀川昇君〟の真新しいのぼりが長屋の一角に立った。次の日父は出て行った。

「お前は男だからな!!」

慈愛に満ちた父の目は、淋しくほゝ笑んでいたが、その心の底はどんな思いであったか、十四歳の私にはよく分かった。

「ウン」

ニッコリ笑って返した。「吾れ死して皇国の礎とならん」――私達の学校の教育は徹底し、私もそれが男児の本懐だと思っていた。

私達はそれより三カ月後、岡山に疎開し、父の生家より八粁離れた甲浦村に住むようになり、母と二人の妹と私は、戦争末期、終戦、戦後の混乱期を必死に生き抜いた。

行った事のない土地の、田舎の冷たい目と空腹にじっと耐えながら、父の帰りをひたすら待ったが、空しく終わった。

母は父の出征の後、家の中に何かあると私に相談した。私の結論が家族の方向を決めた。何度も挫けそうになった私に「お前は男じゃないか」、父の言葉が何度も私をむち打った。

四年間を岡山で過ごし、私達は再び下関に帰って来た。或る知人の紹介で彦島印刷に勤めるようになり、社長の長女と結婚、平穏な生活がよみがえったかにみえたが、私の不始末から彦島印刷を退社し、独立の方向へと運命は百八十度転換してしまった。

独りが、どんな小さな事業でも始めるとなるとたいへんなことで、思わぬ障害に悩まされ続け、沈没寸前の危機を「くそ!!おれも男だ」と何度も云い聞かせ危機を脱した。

今は私より年下の父の遺影だが、その目は今も昔も変らない。家族をみる責任を全う出来なかった悔やみか、我々家族の行末をじっと守っているようでならないし、会社の存亡にも大きな力を貸してくれてるような、そんな気がしてならない。

堀川　伝夫　昭和5年4月4日下関市に生まれる
▽岡山県立工業学校卒▽昭和23年彦島印刷株式会社入社、38年同社営業部長
▽昭和42年アロー印刷株式会社設立・代表取締役
▽株式会社アロービジネスフォーム、有限会社アルファデザイン代表取締役▽山口県印刷工業組合理事

天知る、地知る、人知る、我知る

本田太郎

私の父は文久三年の生れで昭和十五年に熊本で没しました。子供の頃の生活を回想しているうちに親父が云ったと思われる言葉を、私自身が現在、社内的に使っている事に気が付きました。それは

一、天知る、地知る、人知る、我知る

二、襤褸（ぼろ）は着ていても心に錦を飾っている

と云う二つの言葉であります。

一は誰も知らないと思って悪い事をしても必ず露見すると云う事。

二は（歌の文句にもありますが）後藤新平氏が学生の頃、ひどい襤褸の服装で毎日学校に来るのを先生が注意したところ、毅然として黒板に所信を書いたと、再三聞かされた記憶であります。

それは、私が物心ついた頃のことです。父は鹿児島県伊佐郡の金山の失敗で熊本に夜逃げ同然で引揚げて来たばかり。兄達は親類に預けられ、母も亡くなり、親父と二人丈けの生活の時もあり、貧しくて欲しい物が買って貰えず、不平、不満を云い、親父を困らしていた折りに、人の道と、物質的な面に対する考えを親父は怒鳴り度いのを我慢し乍ら諄々と云い聞かせたも

のと考えます。

現在、私は不正、嘘言、見栄等に対して、この二つを引用し、使用致しております。

本田　太郎　大正9年8月1日生　本籍　熊本県

▽昭和13年熊本工業機械科卒、中島飛行機（株）発動機設計入社、終戦（社名変更）富士重工業（株）勤務。設計課長、サービス部長

▽昭和47年北九州スバル自動車（株）創立、代表取締役として出向就任、社長として現在に至る

〈好きな言葉〉人の一生は重き荷を負うて遠き道を行くが如し、急ぐべからず

鉄の意志と火の精神力

眞玉　仁

父は頑固で無口であり、努力家であった反面、慈悲深い人であった。私が大学を卒業して家業の酒、食料品卸小売業の合名会社眞玉商店に入社した昭和二十二年三月、その時の第一声が「男は酒は呑め、唯酒に呑まれる事と、女に溺れる事は決してするな」であった。

尋常高等小学校しか卒業しなかった父は、子供は全員、大学を卒業させたが、随分と学歴に対する社会の辛さが身にしみたのであろう。

父とはよく喧嘩をしては家を飛び出した事もあった。「自分から出て行った者には一切援助をするな」と、父も子も一分を通した。十三年間大阪の地で辛抱した苦しみや悲しみも、今では楽しき懐しき思い出となった。もっとも、母は陰から援助してくれた。

今日では〝家〟という観念は分かりにくいが、明治の人間にとって、最高の倫理は国家と家の隆昌で、衰亡した庄屋の家を再興した事は、祖先に対しては立派な男である。晩年、昭和五十一年九月、黄綬褒賞を宮中で戴いたことを一家の誉と喜んだが、翌年三月、他界するまで現職を守り抜いた。八十歳であった。

生前より父は己と母と祖母の同一型の三基の墓を郷里眞玉町（大分県）の丘に建てて居た。

その時に「家訓」と銘し石碑を刻んで居る。碑には

「祖先に対する最上の祭は、道を守り業を励むにあり、堅持せよ鉄の意志と火の精神力、断行せよ信念の前に不可能なし、安心と自惚と油断は禁物、心の弛みは強盗より恐い、希望なきは死なり、満足は腐敗なり、勇気なきは精神的死者なり、一も努力二も努力、努力なくして家庭の繁栄なし、平和なし幸福なし」とある。

詩人、サトウハチローさんと親交があり

・眞玉氏の　陽炎の如き心に　ひたりて呑む

・酒に喜び　酒に悲しみ　酒に祈り　酒を唄う

のほか、「情深く　厚く　愉しき泪の持主也」とも詩ってもらったが、泪の持主でもあった。

眞玉　仁　昭和2年2月10日生　本籍　大分県

▽昭和22年3月東洋大学国文学部卒▽同年合名会社眞玉商店入社、52年4月株式会社マタマ代表取締役に就任

〈好きな言葉〉眞実一路

一人では育たない

松井　薫

私の郷里は門司の裏側にあたり、今は車も多く通うようになりましたが、子供の頃は静かなところでした。

小学校を卒業する迄はそこで過し、中学校は母親の実家近くにある豊津中学に入り、五年間、母の実家から通学しました。その後は進学、社会人となり、我家で家族と生活を共にしたのは小学生迄でした。

父は自身が早く父親を亡くし、若くして家を継いだこともあってか家族に対する気配りは子供心にも感ずる程で、特に祖母には何一つ逆らうことなく親孝行でした。外での出来事はその日の中に夜遅くなっても一つ一つ話していたのが印象に残っています。

父親からうけた特別な教えは記憶にありませんが、シツケには厳しく、日常の生活の中から男としての独立心と家族とのキズナを大切にすることを学んだように思います。四人兄弟の次男の私を中学時代母の実家にあづけたのもそれなりの考えがあったのではないかと思います。

又折にふれ思い出されることは、父は兄と年齢の近い私の二人を連れて時たま山林を見廻ることがありました。

植林して間もない山では雑草が下刈りしてあり、四～五年たった山でも適当に下刈りし、蔓物類は取り除かれて、幹一本が真直ぐ育つように手入れされていました。

大きく育った山林では、外から見る木々は緑一色ですが、中に入って見ると、柱が立ち並んだ感じで、陽差しは少なく、雑草はあまり生えていません。育ちの遅れた木は陽当りが悪く、同じ時期に植えられたものとは思えぬ細さです。

父は「立派な木を育てるには、雑木雑草に負けないようになる迄よく手入れしてやることが大切で、大きくなってからも強い蔓物が巻きついてないか、気をつけてやらないと良い木は育たない、又若木の時に育ち負けた木は育ちが悪い。人間も同じだ」と話していた。年と共に思いあたることばかりです。

松井　薫　大正15年5月15日生　本籍　福岡県
▽昭和22年水産講習所（現水産大学）卒業、同年ニチモウ株式会社入社。工場部、戸畑営業所、貿易部長を経て47年取締役、54年代表取締役社長

頭の良い人より信頼される人に

松村周典

私は小学校のころ、読方（現在の国語）は比較的に苦手であった。学校から帰ると必ず三十分は復習、予習をしないと遊びに行くことが出来なかった。

読方は父の前に机を置いて大きな声で音読させられた。父は机の向こう側で自分の読み物に目を通しながら煙管でタバコを吸って聞いている。私が難しい漢字や熟語を不明瞭な読み方でごまかすと煙管の頭がこつんと一発飛んできて、正しく読み直すまで遠慮なく何度でもくり返す。到頭わたしは泣き声になって読み返すが、なかなか合格しない。友達と約束した遊ぶ時間がとうに過ぎて友達はどこで何をして遊んでいるのか心配でますます本の字や意味など判らなくなり、泣き出す一歩手前であるが、煙管は遠慮なく私の頭に飛んでくる。母が「教えてやったら」と口添えすると、「読書百遍、意おのづから通ず」と言って応じない。それでも判らない漢字があると、辞書を持って来て、時間をかけて辞書を引き、正確に覚えるように指導し、「楽に教えられたことはすぐ忘れる」、「苦労して覚えたことはいつまでも忘れない」と平然と言っていた。

私は七人姉妹の中で三番目で男一人でした。家業は酒造業であったので税金は直接下関税務

署に納入のため父の出関につれて行かれた。当時は交通も不便な田舎のことで、人馬車から軽便鉄道に乗り継いで三時間以上かかるので一泊二日となり、ときどき用件が早く済んだ時には長府の乃木神社に参拝し、神社の横裏手にある乃木大将の生家を見学して将軍の幼少のころの話をしてくれた。

将軍が人参が嫌いと言われたらご両親は毎日人参ばかり食べさせられた話とか、厳寒の日に将軍が寒いと言われたとき、裏庭の井戸ばたで雪の降る日裸にされて頭から水を浴せられて心身の鍛練をさせられた話など聞かされた。こんなことから、いつの間にか私のなかにも「頭の良い人」より「人に信頼される人」、「この人でなければと云われる人」になることの希いが芽生え、生涯の私に大きな指標になったように思います。

成長して、色々な仕事をするにあたり、父の教訓が非常に役立ったと感じております。

松村　周典　大正4年12月7日生　本籍　山口県
▽昭和33年2月学校法人下関理容美容学校理事
▽昭和54年4月同理事長▽昭和60年4月学校法人・下関理容美容学園理事長・現在に至る
▽日本山岳会・下関山岳会会員
〈好きな言葉〉この道より我を生かす道なし、この道を歩く

体をきたえろ、病気は新芽の内に徹底してつみとれ

松本　攻

父、馨は、私が中学四年のときになくなりました。

すでに私は父の年齢をこえていますが、最近、父母やふるさとを思うことしきりなのも年齢のせいでしょうか。

父は私に口ぐせのように、「健全な精神は健全な肉体に宿る。体をきたえろ」と言っていました。

父のすすめるまま、中学時代は剣道部に入り、きびしい寒稽古も皆勤しました。

熊本県玉名中学まで、自転車で五十分ぐらいかかりましたから、朝は五時前に霜でまっ白の道を走るのです。剣道着や防具をつけると、昨日の稽古で流した汗が凍てついていて、びちゃっと身をさすでしょう、つらかったですね。よくやり通したと思いますが、あれは父の眼、父の言葉に支えられてでしたね。

結婚して、義父となった四島一二三にも多くのことをうけました。九十五歳まで現役会長だった人で、「病気は新芽の内に徹底してつみとれ」が口ぐせでした。これは銀行の行訓にもはい

っていますが、先年、ちょっと病臥の折は、二人の父の言葉をしみじみと思いかえしたものです。

松本　攻　大正12年6月16日生　本籍　熊本県

▽昭和21年旧福岡経済専卒

▽31年㈱福岡相互銀行に入行、38年本店営業部長、39年取締役、42年常務取締役、45年専務取締役を経て54年取締役副社長に就任

努力、思いやり、誠

三島正一

私が小学校六年の時、父は私に突然、人間は神様を信じなければ心の強い人間にはなれない。行きたければカトリックの学校に行かないか、という事で、戸畑の私立学校に入学した。当時会社は赤字続きで、給料は遅配、そのため月謝が払えないので、おふくろは結婚指輪を質屋に持って行き、それで月謝を納めたりしながら、なんとか無事卒業することが出来た。いつかは、学校を止めなければならないと思っていたので、本当にうれしかった。

子供心にもその時、「一生懸命努力すること」「思いやり」そして「誠」ということの大切さが分かった様な気がした。父は私に教えのようなものは何も言ってくれなかったが、父の仕事を通じて、この三つの言葉が生かされていることが最近分かってきた。

例えば、戦前、現新日鐵から飛行機用軸受鋼の旋削の仕事をいただいた。そのスクラップは返品する様になっていたが、戦争も激しくなってきて、スクラップを勝手に処分しても分からない時であったが、終戦後、事情を話し、その残材を返品したのであった。

その事がひどく気に入られ、新日鐵とのご縁もここから始まり、今日に至っているが、父の「誠」がお客様に通じたものと思っている。

又、今では安全を蔑ろにする会社はどこにもないが、まだ昭和四十三年頃は安全に対する取り組みが必ずしも充分とは言えなかった。そこで毎月の安全祈願祭の時に、皆に自分の好きなタバコとお酒を断って事故が起こらないよう祈願すると言って丸一年、あれほど好きなタバコと酒を完全に止めてしまった。社員への「思いやり」がそうさせたものと思っている。

又、我社と取引のある会社の役員の方から、おたくの会社は正直の上にバカがついてもおかしくない位ですねと言われたことがあった。誠心誠意、努力をする会社であることを、こう言われたものと思って、むしろ自負しているが、これからもこのことを信条として頑張っていきたい。そして、これまで大きな転換期にさしかかった時に必ず、父の無言の三つの言葉が、私の心の支えとして生きていることを感謝している。

三島　正一　昭和14年8月22日生　本籍　北九州市
▽昭和37年中央大学経済学部卒
▽三島光産㈱入社▽昭和51年社長就任
▽趣味　ゴルフ、茶道
〈私のモットー〉怒らない、愚痴を言わない

「一言」の無かった父

水野　勲

父を語れ、父は子に何を教えたか、と問われるくらい、困ることはない。私の父は明治の一ケタ生れ、存命ならば百九歳になる。武士の出で、若くして軍人を志した程だから、ふつうなら旧弊で頑固、しつけも厳格の筈なのに、私から見た父は、ハイカラ好みの新しがり屋で、折檻はおろか小言を食った覚えもない。

昔風に子供の教育に関して、父親と母親との役割分担があったかどうかは知る由もないが、礼儀作法とか健康法とか、将来への志望とか、姿かたちを正して承わるような話など、父から聞かされたことは全く記憶にない。喧嘩に勝って誉められたこともなければ、負けてたしなめられたこともない。

従って私にとっては、幼少の頃の父の想い出は極めてうすい。父と語り合った記憶といえば、私が旧制高等学校に入った頃からではあるまいか。それも酒を飲みながらの対話だ。父は量はそれほどでもないが、酒を愛した。私の高校入学を待ち兼ねたように、父は私に酒を勧めた。未だ満十七歳にもならぬ私だったが、素質があったのか、家でも飲むし、小料理屋へも連れて行かれた。父親との対話の記憶が酒席だけというのも変だが、私は子として父の後姿を見て育

ったのではなく、私たちはいつも面と向かい合った親と子だったことは確かである。

私には四十歳になる伜がいる。この伜に対して、私はどんな父親なのか。私も伜に対して、しつけとか薫陶とかいう鹿爪らしい接触の記憶はない。そして幸いなるかな、伜も酒を好む。二人して酒を酌む楽しみを味わっていること、まさに父と私との関係そっくりである。伜も私の背中を見詰めて成長したとは思われない。父と子、そしてその子と、親子の触れ合いには相伝のものがあるのか。この父を想い、伜を見ていると、我が家の家風の善し悪しなど、私には全く無意味なことでしかない。

私の父に対して抱く思いは、尊び敬うというものではない。むしろ友人に対する親愛の情に近い。何れにしろ、父と別れて三十数年を経た今日でも、時折り夢の中で出会うことがある。夢の中でも二人して酒を飲んでいる。それ以外の夢は見たことがない。

水野　勲　大正3年8月10日生　本籍　福岡県
▽昭和12年旧制東京帝大経済学部卒
▽同年日本製鐵株式会社入社、八幡製鐵所勤務。爾来八幡製鐵、新日本製鐵の本社、各製鉄所に勤務。製鉄一筋に四十八年、現役を新日鐵副社長・八幡製鐵所長にて終え、現在同社顧問

気張れや

御手洗　博

父は私にとって重みのあるすべてであり、母を介することなしには近寄れぬ存在であった。その父の姿を私の心のカメラがとらえた幾百枚という映像の中で、今でも鮮明な印象として残っているものが三枚ある。

最初の一枚は、今から四十年前の、雪深い寒村のわが家の、うす暗い朝餉の卓が背景である。当時、父は三十八歳、私は十二歳で、小学校の卒業を目前にひかえていた。父は未だ家督を許されておらず、食卓の帝王は祖父であった。祖父は一日の仕事の分担を命じ、次いで私の身の振りかたに話題を移していった。祖父は私の他家への養子縁組を提案し、それが一家の幸せにつながると説いた。母を通して進学の意向を洩らしていた私は、必死の眼差しで父をみつめた。暫時の沈黙の後、父は「おれが気張って働くから」と、一言いって席を立った。

祖父に逆らう父を見たのは、この時が初めてであった。その年、私の村から進学した者は二名であった。私の学校での成績は上の下、わが家の経済的位置は中の上であったであろうか。

二枚目は、それから十三年後のものである。父は五十一歳。既に家督を兄に譲っていた。私は大学を出て公立高校に奉職し、三年が経過していた。私が身を固めるのを一日千秋の思い

で父が待っていると、私は母から聞かされていた。だが、私はその頃、大学院への進学を考えていた。私は無断で職を辞し、それから父に打ち明けた。父は終始無言であった。出発の日、父は「気張れや」といって一枚の封筒を差し出した。中には三万という大金が入っていた。兄を説き伏せ、立木を売って拵えた金であった。

上京して三年目の春、私は妻を娶った。三枚目の映像はその時のものである。形だけの式を終えた私たち夫婦は、その日の夜行列車で帰る父を送って東京駅へ行った。途中、口数の少なかった父は、発車のベルが鳴ると、私の耳元に「気張れや」とささやいて笑った。私は顔のほてりを意識しながら、その時初めて、母の仲介なしに父に近づけたと感じた。

今、私はその頃の父の年齢にさしかかっている。身心の衰えはおおうべくもない。だが、未だ学業半ばの身として、今一度気張らねばならぬと思うこの頃である。

御手洗　博　昭和8年11月21日生　本籍　島根県
▽昭和31年北九州大学外国語学部卒
▽昭和40年早稲田大学大学院文学研究科（博士課程）修了
▽現在北九州大学教授、外国語学部長

みんな阿弥陀様の子なき

皆川節夫

「…なき」とは「…であるから」という福岡県田川郡独特の方言で、私の祖父（一八六二～一九四二）が好んで使っておりました。「みんな阿弥陀様の子であるから」という意味です。

祖父母も父母も共に浄土真宗の信心篤く、祖父は出雲の浅原同行にも匹敵する妙好人ではあるまいか、と、後年ひそかに私は追慕もし矜にも思っております。

父が四十六歳で若死したとき、三男坊の私は十歳でした。幸にも四人の孫は心ゆたかな祖父に育てられました。祖父の念仏が、正信偈や阿弥陀経が耳の底にひびき、折々に聴いた子供むけの仏教法話を五十六年後の今もヒョコヒョコ思い出しては祖父の現存を感得しています。

鎌をふりかざし祖父と通った一粁の山道のこと。祖父母の隠居所となっていた果樹園での明け暮れ。祖父との交流にはいつも真宗信仰が根底にあったこと。魚とり・山芋ほり・罠かけ・果物とりなどの他、自然に接する作法を通じて私たちは知らず知らずに仏教的情感や霊性を養われました。

やがて決定的に私の思想の根源となった出来ごとが起りました。それは昭和三年、父の亡くなった年の酷暑の或る日のことです。

祖父を中心におひるの食卓についた丁度その時、一人の朝鮮半島出身の物売りの老婆が私の家の戸口に立ちました。すると祖父に促された母はスーッと立って老婆を裏井戸に案内し、愛語と共に体の汗を拭き手足を濯ぎ終り、並んで食卓に座りました。

これは昭和初年の世相の中での農家に起きた平凡事にすぎません。しかし子供心にも私はこの光景の中に祖父の真骨頂が現前したものとハッキリ感じ取らされた謂わば「他力の覚証」と呼ばれるものでしょうか。D・M・P・青少年訓練の際に度々ご父兄へ「子供の意識は幼いながらもその霊性は大人と全く同じです。油断を戒めましょう。」との提言は、十歳時の私の体験に基くものです。

長じて市ヶ谷台に学び、戦場往来六年の間、或いは戦後米駐留軍勤務の七年や、職業を通じて持った西欧人やアジア人との接触の基本に確乎として在るのはこの「ぢぢの一言」です。

皆川　節夫　大正8年2月11日生　本籍　福岡県
▽昭和15年陸軍士官学校卒業・第54期▽北支・西部ニューギニア歩兵小・中・大隊長、通信参謀▽昭和24年小倉外事専門学校（現北九州大学）卒業。
▽米陸軍経営コンサルタントを経て▽32年株式会社皆川経営研究所を設立・DMPを普及、現在に至る

田舎の人

柳田千殼

父は中学時代まで故郷で村長を勤めていた祖父のもとで過したが、山村でのびのび育ったせいか中学時代は相当の悪ガキだったらしい。人並優れた体格で腕力もあったのか、弓と相撲が得意だったと聞かされた。

父は晩年よく宇佐神宮に参詣したが、境内の相撲場の前で、同行する私や妻に少年時代の懐古談を話した。頑固者と言われた父だが、そんな時の父は実にいい顔をしていた。

今でも歳の暮になると私は妻を伴って宇佐参りをする。別に理由もないのだが、嬉しそうに腕白時代の自慢話をしていた父の面影がそこにあるせいかもしれない。

私は親不孝で父とは性格が合わなかったせいか、若い頃親しく会話を交した記憶がないのだが、心に残っている言葉が一つだけある。

あれは私が開業して二週目位だったろうか。折角揃えた医療器具をそっくり盗難に遭ったことがある。開業早々で落胆し切っている私に父はこう言った。「泥棒は家迄持っていかん。火事は隣人に迷惑を掛けるから火災には注意しろ」と。今にして思えば、「盗難はお前だけの災難で、火事の様に人様にご迷惑を掛けずに済んだではないか。家は残っている。早く再起せよ。

禍転じて福となせ」と、教訓を含んだ慰めと励しをしてくれたのだろう。ぶっきらぼうな父の言葉に秘められた愛情を感じざるを得ない。

そういえば、父は官吏だったので、私達は転校の連続だった。終戦直前父の故郷に転居したことがある。それは胸を病んだ私の姉と妹の療養が目的だったが、薬とて満足にない時代のことで二人はやがて亡くなった。

その後の父は母が着物の虫干をすることを大変嫌がっていた。おそらく夭逝した娘のことがいつも胸中にあってのことだろう。優しさを持ちながら頑固な態度しかみせなかった。

父も母も晩年、私に対して故郷に帰ってこないかとよく言っていたが、生前自分達の住いの隣に私達の墓場を作ってくれた。来世は父の愛した故郷でまた一緒に暮すことになりそうである。

柳田　千殻　昭和2年3月20日生　本籍　福岡県

▽昭和24年3月福岡県立歯科医学専門学校卒業

▽31年門司港にて歯科医開業現在に至る

▽福岡県歯科医師会理事、北九州歯科医師会監事、門司歯科医師会長

〈好きな言葉〉己の常識で人を判断するな

指輪が語る父の言葉

山内大介

いまから三十一年前、当時毎日新聞欧米部員だった私は、ニューヨーク支局勤務を命ぜられた。それも、アメリカ大陸をバスで横断して赴任せよという願ってもない命令である。

そのことを父に報告に行くと、父はやおら立ち上って奥の箪笥の中から祖父の形見だという金の指輪を持ち出してきた。「そうか、大介もアメリカ大陸を渡り歩くことになったか。お守りがわりにこれをはめていけ」と父は云った。

二十四金のその指輪には、円形の背の部分に「山内」という、やや図案化された字が彫ってある。腹の部分はただ重ねあわせただけの、したがって太さを自在に調節できる、取りはずし自由なぶ厚い指輪だった。祖父はこれを実印に使っていたようである。

祖父の名は大吉といい、四十九歳の若さで世を去ったが、裸一貫、中国大陸を股にかけて仕事をし、いささかの財もなした。その祖父が死ぬまで大切にはめていたのがこの指輪であった。

私はいったんサンフランシスコで飛行機を降りたあと、グレイハウンド・バス会社の、帯のように長い周遊切符を手に、ロサンゼルスからアリゾナ砂漠を越えて、メキシコ国境沿いにテキサス州に入り、ルイジアナ州、ジョージア州などを通り、首都ワシントンに立寄ってニュー

ヨークに赴任するという異例の長期バス旅行を試みることができた。要所、要所で一、二泊しながら任地ニューヨークに着くまで二週間をかけたが、その時の拙い連載ルポが私のアメリカ特派員としての初仕事となった。

私の父は、郷里福岡の中学・修猷館を出たあと、自らの意思で旅順工科学堂（のちの旅順工大）に学んだ技術屋だった。旅順工科学堂を卒業後博多に戻って結婚すると、こんどは旧満州（中国東北地区）の本渓湖煤鉄公司に勤め、やがてまた内地に戻ってきた。

父は、中国大陸でエネルギーを燃焼させた祖父のこと、そして、海外雄飛を夢見た若き日の自らの熱い思いなど万感を胸にたたんで、その指輪を私に贈ってくれたのだと思う。口下手の父は特に気のきいた言葉はいわなかった。しかし、私はそれ以来三十年以上も右手の薬指にはめ続けてきた指輪を見るたび、言葉にならぬ父の一言が私の胸に痛いほど響いてくるのである。

山内　大介　大正14年2月26日生　本籍　福岡県
▽昭和24年東大法学部卒、毎日新聞社入社、ニューヨーク支局、ロンドン支局、外信部長、北米総局長などを経て昭和55年代表取締役社長　▽34年アフリカ報道で「マイルズ・ボーン賞」受賞
著書＝「黒い大陸」「アメリカ感傷批評」他

〈好きま言葉〉平凡は非凡に通ずる

何事も一所懸命にやれ

山田宜弘

昭和二十七年、皇居前のメーデー事件が起きた時、私は早大の新入生だった。世の中は騒々しく、学生運動の全盛の頃だった。同じ下宿にいた予科練帰りの先輩がいて、当時十八歳だった私にこう言った。「反抗している連中は、現状に不満を抱いて反抗しているんだ、そんな反抗なら誰でもする。本当の反抗は現状満足の中から、不満を見出して、現状改善のために反抗するものが、眞実の反抗だよ。今、やっている彼等の反抗は不満だけが源でやっている。あんなのは本当の反抗じゃないよ」学生運動には門外漢であった私だが、何か感ずる所があったのは事実であった。

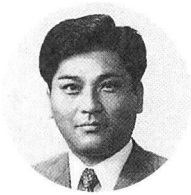
それから半年ぐらい経て、私は大学を退めた。それから二年余、私は浪人の姿で、アチ、コチと自由に生活をさせてもらった。父は何も言わず、仕送りをしてくれた。

当時、一人で学んだ事、考えた事が今でも一番、我が人生観の形成の糧になっている。サラリーマンはいやだし、家業を継いで呉服商になるのもいやで、好きな歴史でも勉強して、学者になろうと思って、再度、早大の文学部に入学した。

人生とは面白いもので、学者になろうと決心したきっかけは、面白半分でみてもらった街頭

の老易者先生にある。易者は将来の事について、一言「勉強しなさい。自分の好きな事を決めて勉強しなさい。」と言った。私は物足らなかった。俺の将来はどうなるのか、私はそれを問うた。彼の易者先生曰く、「関係ない。あなたは今、勉強をするだけだ。」と繰り返えされただけだった。歴史を勉強してみようと思ったのは、それから間もない時期だった。

父親にそう言って、文学部に入ったが、そのおり、父が言った言葉がある。「いづれの道へ進もうと、何事をしようと、やる以上は一所懸命やれ、一所懸命やったものは必ずお前の身につく。その時は、無駄で、役に立たないと思う事が多い。でも、それはお前の一生の中で、必ず何処かで役に立つ。」と。その後、学を終え、学者への夢を捨てゝ、公務員を十年程務め、乞われて今の会社に入社、現在に至るまで、その時々、他人に負けぬよう一所懸命を守って来た。廻り道して、多かった一生懸命が産んでくれた無駄が今は重宝なものになっている。



山田　宜弘　昭和8年12月9日生　本籍　福岡県
▽昭和34年早大一文卒、同年八幡市に入職、43年退職
▽同年九筑工業入社、54年同社々長に就任、現在に至る

商いするより考えせよ

百合野　保　文

私が生まれ育ったのは門司港である。

今は小倉に住んでいるが、バナナの叩き売りが盛んに行われていた少年時代の朝日に輝く満珠・干珠、夕日の美しい巌流島の見える関門海峡、桜の名所和布刈の山等々……現在の門司港はトンネルが掘られ、橋が架かり、港の風景も随分様変りしたが、多感な頃の印象は鮮明に残っている。

父は弓引きである。範士十段。今でも門司港に住み、卒寿を迎えた今尚健在である。

つい先年迄全日本弓道連盟会長として斯道に活躍した。お陰で青果業界での功績もあって勲三等瑞宝章を戴いた。有難いことである。

その父は若い頃から青果業界で働いた。北九州青果㈱の創業者である。私は父に倣って弓を引いた。そして仕事も……。父は私に厳しく、格別の事は何も教えなかった。「自分の道は自分で切り拓け」である。

そう、一つだけ印象に残る言葉がある。「商いするより考えせよ」――含蓄のある言葉だと思っている。

高齢のため全ての仕事から手を引いた父であるが、いつ迄も元気で見守って欲しいと思う今日此の頃である。

百合野　保文　大正15年8月23日生　本籍　福岡県
▽昭和25年東京農業大学農学部卒、同年北九州青果株式会社入社、39年取締役、54年代表取締役社長就任
▽丸北産業（株）取締役社長、全九州バナナ貿易（株）取締役社長、関門九州バナナセンター（協）理事長、北九州信用組合理事、（社）全国中央市場青果卸売協会理事、（社）日本青果物輸入安全推進協会副会長理事、弓道練士五段

健康管理は自分でやれ

吉川八郎

私は名の通り男兄弟の末っ子の八男坊主。母は一歳の私を遺して病死したので、私には実母の気憶は全くない。三、四、五男も夭折した。

父は婿養子で、その為か所謂ガミガミ親父ではなく、至極おとなしい口数の少い人だった。常に静かに横から見ていて、余程思い余った時に「あゝしたらどうだ、こうしたらどうだ」と云うタイプであった。学歴はなく、子供達が自分から進学を希望すれば積極的にそれに応えてやると云う性格で、家業は比較的規模の大きい米穀商を長兄と共同でやっていた。

私は中学（旧制）四年生の時から高校（旧制）の受験準備に入り、大阪中の島にある府立図書館通いが始まった。目標校は次兄が卒業した岡山の六高であったが、中学四年修了時と五年卒業時に実際に受験したのはわけあって六高ではなく姫路高校であった。併し結果は二度共失敗、浪人生活の身となり、今度こそ六高をと決心していた。偶々その年の夏、図書館仲間の一人であるI君と出遭った。彼は私より一年上で、中学卒業の年に六高を受験して失敗、一浪して四高に入ったのである。話がはずんで「高校生活を送るのに岡山と金沢ではどちらが面白いか？」と問うと、彼は即座に「そりゃ金沢だ。絶体的だよ」と云った。その時点で私は目標校

を四高に変えた。

併しそれを実現するにはとてつもなく大きい難問を解決する必要のある事を私は知っていた。と云うのは六番目の兄が中学卒業と同時に富山高校に入ったが、一年生の途中で肺を病み一年間程休学、大阪の郊外で療養したが、その効なく不帰の客となった。父は北陸の不順な気候が将来の大きな楽しみにしていた息子の若い命を奪ったと考えていたのである。

その年も愈々おしつまって、私は意を決しておそるおそる父に申し出た。父はじっと私の顔を見つめていたが、やがてぽつりと一言「自分の体の健康管理は自分で責任をもってやれよ」と。後日、幸運にも金沢から合格通知が飛び込んで来た。父も心から喜んでくれて、終日ニコニコしていたのが忘れられない。その父も二十一年前に八十一歳で天寿を全うした。

吉川　八郎　大正10年4月20日生　本籍　大阪府
▽昭和20年9月京都大学工学部卒▽昭和45年国策パルプ工業㈱取締役▽昭和47年山陽国策パルプ㈱取締役▽昭和48年3月千代田紙業㈱副社長、同年9月社長▽昭和60年取締役相談役

感謝報恩

吉田和彦

慶長以来三百数十年の歴史を持つ上野焼の窯業に精進していた吉田家は、豊前国小倉の藩主小笠原公より御用器製陶人として小禄ながら生活に不自由のない待遇を受けておりました。

しかし維新大業の成就で徳川三百年の夢が醒め、小笠原公より与えられていた禄を失ってからは、まさに生活苦であり、父は幼少より貧乏と苦労の連続でしたが、吉田家再興の一念に燃えて勤倹努力の一生でした。

父は二宮尊徳先生を特に崇拝していましたが、私が父から受けた教訓は感謝報恩の報徳訓からの教えが多かったように思います。

報　徳　訓　（二宮尊徳）

父母の根元は、天地の命令に在り。
子孫の相続は、夫婦の丹精に在り。
吾身の富基は、父母の積善に在り。
身命の長養は、衣食住の三に在り。
来年の衣食は、今年の艱難に在り。

身体の根元は、父母の生育に在り。
父母の富貴は、祖先の勤功に在り。
子孫の富基は、自己の勤功に在り。
衣食住の三は、田畑山林に在り。
年々歳々、報徳を忘るべからず。

苦労に耐えた人ほど、他人の苦労に対して本当の思いやりの心をもつことができるのではないかと思います。父は常に相手の立場や気持になって物事を考える気くばり、思いやりの心の大切さと、商人は信用が第一であること、そのためには時間と約束を絶対守ることが第一歩であることを教えてくれました。

仰ぎ見れば空の広さは極めなく
伏し見れば水の流れと人の行末

昭和三十八年、七十四歳で波乱に富んだ一生を閉じましたが、自叙伝『牛の歩みの六十年』には神佛信仰の念の厚かった丑年生れの父の人生観や事業哲学が赤裸々に語られています。

私にとって本書は父の貴重な体験から滲みでた生きた教訓であり、正しい商道に精神するための大きな指標ともなり、常に座右に備え、日々の反省と明日への飛躍の糧としております。

吉田　和彦　昭和3年12月10日生　本籍　福岡県
▽昭和38年山十合名会社代表社員就任
▽40年山十株式会社代表取締役
▽九州板硝子卸商協同組合副理事長、全国板硝子卸商協同組合連合会評議員

己の分を知れ

吉田敬一

郷里の家の庭の一隅に

花蜜柑匂ふ夕べをくつろげり

と彫った自然石が坐っている。父の句である。

私自身は俳句をやらぬので上手か下手かよく分からないが、世を去った昭和四十五年の句となっている。改めて母がまとめた句集を読みかえして見ると、そこには矢張り私の心の中に無口で静かに坐っている父以外は発見できなかった。

高浜年尾先生に戴いた序文の中にも、「決して自分を押し出そうという行き方ではなく、いつも人の後に静かに立って、他に労はされることもなく楽しく句に親しんでいる」とある。酒を飲むと大変に賑かで愉快であったが、不断は無口というより全く口下手な親父であった。

だからお説教などを喰った覚えも殆んどないし、まして警句の如きものは一つもない。中学を選ぶときも、一流校よりむしろ楽に合格できるところへ行くことになったし、現在、医者をやっている弟などは魚釣りや野ら遊びが好きで、絶対に農業高校向きだと真剣に考えていたこともあったようだ。無理な背伸びはしない、適性に合った自由な生き方をしろというのが芯に

あったと思われる。

私にも決して医者の跡取りをしろとは云わなかった。唯一寸不満らしかったのは、官庁的な国鉄に入社したときで、本当は民間企業の方が面白かろうにと云いたげであった。そして一度の人生だから、出来るだけ楽しくやれよと云って、正調博多節と木更津甚句、それに何やら大変おどけた踊りを一つ、社会人一年生になる私のために、酒を飲みながら一生懸命伝授して呉れた。人生の機微を下手な口で云うよりは、ということであったのかも知れない。

最後の句は

古稀過ぎて逝ける仕合せ天高し

であったが、田舎医師として一生を終った父が語りかけて来る言葉は、「決して無理をするな、己の分を知れ」ということだと心に銘じている。

吉田　敬一　昭和2年2月17日生　本籍　福岡県

▽昭和25年九州大学工学部電気工学科卒

▽国鉄門司鉄道管理局長、本社運転局長、昭和56年常務理事九州総局長を経て昭和59年3月退任

▽現在財団法人鉄道弘済会理事・九州支部長

〈好きな言葉〉自然、悠然、偶然

無言で教えた家族の心

吉村喜好

私の父は私が十四歳の時四十七歳の若さで逝った。今から五十年も昔のことである。当時私の家は袋物の卸商をしていたが、欧州大戦後の不況から大きな借金を抱え、その返済と子供八人、祖父母の十二人の家計を独りで支え、悪戦苦闘の毎日であったようである。小売店もしていて店の構えだけは大きく、祖父はかつては村長もしていたこともあって、近所付合いや寄付には大盤振舞をし、貧しい内情を露さなかった。しかし、家の中ときたら、食後のお茶もお茶の入っていない白湯で済まし、醤油も半分水で薄めて使うといった具合であった。そして、父は家族のためいろんな仕事を試みたが、どれ一つ成功しなかったようで、失意の中で世を去った。

この様な貧困の中にありながら、十二人の家族のまとまりはとても良かったように思う。兄弟姉妹で争った憶えもないし、両親の間や祖父母との間にも不和があったようには憶えていない。大低の家庭不和の原因は経済的貧困にあると言われるが、不思議なことに、毎日の食事も事欠くような当時の貧困の中で、我が家はとても平穏であったのである。

父は私はにこれといった教えや格言めいた事を言った事はなかった。又そのひまが無い程働きづめの生涯であった様である。だが、父は深く真宗の教えに帰依していた。そこで毎日、夕

食前に一家揃って仏壇の前で御正信偈を読経するのがきまりであった。それが終らないと食事にはならなかった。これは私がもの心ついた頃から父や祖父が亡くなるまで続いた。一緒に約三十分位の唱和が終って夕食の団欒が始まるのであった。この食事前の家族の読経唱和が貧しい中での家庭の平和を保っていたのではないかと思う。

今私の家庭にはこのような団欒はない。当時を回想して核家族の現代の家族こそ一日に一回は一緒に何かを為し、そして一緒に食事するという平凡で大切なことを忘れてしまったことに気付いたのである。

吉村　喜好　大正12年1月2日生　本籍　福岡県
▽昭和26年旧制九州大学文学部卒、九州大学教育学部助手を経て▽昭和30年長崎大学学芸学部に転任
▽現在　長崎大学教育学部教授

人間、信用が一番ばい

吉村　慶元

父は明治十八年、浮羽郡竹野村に生を享け、兵役満期後、満鉄病院薬局に奉職中、薬剤師を志し、二十六歳で薬学校に学び、資格を得て奉職の店主に見込まれ、その妹（お袋）と結婚。三十四歳で大分市に暖簾分け、吉村薬局として独立しました。「家内とワシと合わせて五十貫、子供は一ダース」が自慢の常だったと親父のことを聞いております。私の兄弟は十男三女、卸売が活発となり大勢の店員と寝食は一緒であり、共に親父の郷里、筑後弁で「おとっちゃま」と呼称していました。幾ら家族が多くなっても〝常に春風家中にそよぎ渡る〟をモットーに、一家は常に睦まじく行かねばならぬを堅い主義にしていまして、父の遺した家憲が我が家にございます。

一、営業に対して一心一問たるべきこと。

一、政治などの事に一切関与せぬこと。

一、相場、株の売買に絶対関与せぬこと。

一、一夫一妻を堅く守り、妾をおかぬこと。

一、常に家に伝わる宗教を信じ、信仰生活を忘れぬこと。

一、保証の依頼、引受けをせぬこと。

であります。

独立三年目、仕入先の武田商店（現在の武田薬品工業）の御主人が、九州方面の取引先の盛衰の理由を語られ、当時大変手狭であった家のことを心配され、家の拡張、新設のため無条件の融資の申出があったし、その他数々の支援を戴いております。

母屋（義兄）からの恩、仕入先・武田商店からの恩に報いることから出来上った前出の家憲でもあろうかと考えています。

父は、私が旧制中学四年の昭和二十三年に亡くなりましたが、近頃の我が身に重く響きますことは、「何んちゅうても、人間、信用が一番ばい」であります。

吉村　慶元　昭和6年3月18日生　本籍　大分県

▽昭和29年京都薬科大学卒。コーヤク株式会社入社、56年社長就任。

〈信条〉諸悪莫作。衆善奉行。自浄其意

己こそ己の寄る辺

依田　久

父はおそれ多くも近上天皇と同年の明治三十四年生れで、陛下に肖るがごとく長寿の人生街道を確かな足取りで歩んでくれている。夕餉の食卓を囲み晩酌を交しながら、仄かに老いの顔に紅がさす頃になると、次第に口が滑らかになってきて、特に健康の話になりだすと、一言どころか、私がそっと食卓の囲みから抜け出した後も、今度は母と妻を相手に延々と続くのである。そういう訳で「父の一言」は現在まだまだ進行中で、特筆すべき〝一言〟となると、まだ整理がつかないありさまである。

振り返れば、我家の躾教育は専ら母の分担になっていたようで、父から直接的に諭されたり叱られたりした記憶はあまりなく、唯自分の体験談、又は自分ならこうするといった独言に近い話であったように思う。その中で、私を東京の大学に巣立せた後の最初の便りに記されていた一文は、未だに父に白状していないが、その後二十五年の月日を経ても私の心の奥底に深く刻みつけられ座右の銘としている。

曰く「己こそ己の寄る辺、己を措きて誰に寄る辺ぞ、よく整えし己にこそ、誠得難き寄る辺をぞ得む」。三歳の時に父を亡くし、母一人子一人で育てられ、北九州から一歩も踏み出さず、

明治、大正、昭和三代に亘る激変の世を己の判断と能力のみで頑張りぬいてきた〝おやじ〟ならではの一文であったと思う。息子の巣立ちに当り、後は任すぞ、しっかりやれ、との意が込められ、贈られたであろうこの一言は、これからも末永く我人生の指標として、暗闇の一灯となってくれるだろう。

依田　久　昭和16年1月北九州市小倉北区に生まれる
▽昭和39年慶応義塾大学法学部卒業、同年より53年まで東芝に勤務
▽53年4月㈲依田を設立、代表取締役。不動産業、同賃貸業を主に現在に至る

心を開く

渡部　明

父は姫路藩士の長男として生れました。当時祖父は廃藩によるわずかばかりの退職金で生計を立てておりましたので、家族の生活は決して楽ではなかった様でした。

父は神戸商業を卒業後、神戸市役所の吏員となり、後に煙草会社を経て日本石油に入社、役員迄進みましたが、戦後、マッカーサー司令部の財界追放で不本意乍ら退職いたしました。

父の仕事の関係で私共一家は新潟県長岡市に住みました。冬は軒先迄雪の積もる様な所でしたが、いくら寒くても足袋ははかせてもらえず、通学は藁靴で終始しました。「寒い」等と泣きごとを言うと、いつも「これしきの事でへこたれるな」と叱咤激励されました。父は何事にも厳格で、曲がった事のきらいな人でしたから、自分自身にも家族にも大変厳しい人だったと記憶しております。そんな父にも優しい面がありました。私が小学校二年の頃、同じ年位の子供の豆腐屋が重い荷物をかついで豆腐を売り歩いているのを見て、家に招き入れ、飯を喰せたり菓子を与えていたのを覚えております。

大学入学後初めて下宿生活を体験しましたが仕送りは四十五円でした。当時下宿代が二十円だった事を考えあわせると決して多い方ではありませんでした。これには父なりの理由があり

まして、当時の大学卒の初任給が多い所で七十円、少ない所で五十円というのが相場でしたので、父は仕送りはそれ以下であるべきだと言う自分の考えを守り通した訳です。親元を離れてからは親父の良い所もわかってきました。その頃から親父と何でも話し合う様になり、話の分かる父だったと思っています。

父は日本石油に入る前、上海の日英煙草に長い間勤務しておりましたので、その間の経験談をよく聞かされました。外人との交際や人の使い方使われ方についてよく話し、きまって「外人とのつきあいに必要な事は言葉だけではない、心が必要なのだ。つきあう相手が外人だろうと日本人だろうと、大事な事は心を開く事だ」と言っておりました。

後に私が仕事の関係上、米国支店に出され、戦前、戦後二回に亘りニューヨークに十数年勤務し、大過なく仕事が出来たのも父のこの一言や教えによる所が大きいと感謝しております。

渡部　明　明治43年9月15日生　本籍　東京都
▽昭和10年神戸商大卒、浅野物産㈱入社、昭和22年同社金属部長▽昭和23年朝日物産株式会社設立・同社取締役▽昭和43年副社長▽昭和47年社長

健康こそ人生の美である

和智午郎

父は、満九十八歳、数への白寿である。一口にいえば厳格そのもの。健康第一で、運動、食事に専念し、悩みは一さい放棄して正にマイペースである。

「早起きは三文の得」と、早寝早起きの習慣がある。

私はこんな中に育って来たので早起きである。学生時代は夜の試験勉強は誠に苦手であり、三文の得は夜三文の損をするので、損得は零としてこの習慣には批判的であり、且つ怨んだこともある。而し年をとり記憶力がにぶる程に、朝の読書は身につく感じがして最近は得かも知れない。読み、書き、饒舌ることも仕事柄とはいえ健康の一つの様である。最近は読み、饒舌るが、書くことが少ない様である。書くことは人生の創造的感覚を生み、放言を慎むことになる。

「人に迷惑を掛けるな。でないと何れ我が身に迷惑がかかって来る」とも言った。迷惑は因果応報の代表的なものである。而し世は持ちつ持たれつというから、之は唯我独尊の様な気がするが、之も長生きの一つの秘訣かも知れない。

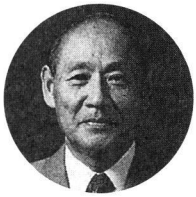
「歩き、山に登り足腰を鍛え、忍耐力を養へ」とも。分かっているけど実行はむずかしい。小

学校の頃より休みになるとおやじのお付合いで山へ引張り出された。唯山頂をきわめた時の征服感は思い出に残っている。山登りは征服感を味わう、結果として足腰が強くなる気がする。

父が日頃口にする言葉を並べて、私なりのおぼつかない批判をしてみた。而し自身が還歴を超え、父の年齢に近づく程に、不思議と同じ言葉をいっていることに気付きおかしくなる。

現代は昔より確かに良くなったと認めながらも、古き良きものを失っていることも認めなければならない。戦後四十年、自分達が亡ぼしたものの大切さが、ようやく分かって来て、新しきものと古きものの共存を考える時が来た。それ丈におやじの一言はもう一度反省してみる必要があると思う。

我が家のおやじの一言は総合して云うなら、健康こそ人生の美である。すべてを失っても健康には代えられない。健康は心と体のバランスの中から生まれてくるということである。



和智　午郎　大正7年5月5日生　本籍　福岡市

▽昭和17年10月慶応義塾大学経済学部卒業

▽昭和23年1月西部瓦斯株式会社入社、57年6月同社取締役社長就任、西部ガス興商株式会社取締役社長就任、現在に至る

▽福岡経済同友会幹事、㈳日本ガス協会理事、㈳日本ガス協会九州地方部会会長

あとがき

本書刊行に当たり、安川寛・北九州商工会議所会頭、四島司・福岡商工会議所副会頭をはじめ執筆者のみなさまに絶大なご協力をいただきましたことを心から感謝申しあげます。

先哲の言葉を借りるまでもなく、青少年は国の宝であります。今日のむずかしい時代に、これら青少年が青雲の夢をもって大きく羽ばたくよすがに、本書がなにか役立てばとねがい、併せて弊社創立以来の社会の鴻恩に対する感謝をこめて本事業となった次第であります。

今日、青少年の教育が大きな問題になっているおりから、この本が多くの人に読まれ、二十一世紀をになう青少年の人間形成に資すれば幸いに存じます。

なお、本書製作に当たり、紙面の都合上、原稿の一部を割愛させていただきましたことをお断りいたしますと共に、編集は加治屋知暁氏、表紙写真(劔岳八ッ峯)は登山家でもある松村周典氏のご協力を得ましたことを申し添え、お礼申します。

髙藤建設株式会社

会長　髙藤　國太郎

父親のひとこと

昭和61年2月25日 初版　　（非売品）
平成８年2月25日 ２版

監　修　創立40周年記念誌
編集委員会

編　集　加治屋　知　暁
発行者 初版　髙　藤　國太郎
２版　髙　藤　昌　和
発行所　髙藤建設株式会社
北九州市門司区東新町１丁目１番30号
電話（093)381－0461

印刷　アロー印刷株式会社